

---

# ポケットモンスター +

HERON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター +

### 【Zコード】

Z0006E

### 【作者名】

HERON

### 【あらすじ】

森の隠れ家で遊んでいたタキとショウ。しかし、一人は突然気分が悪くなり意識を失ってしまう。しばらくして目を覚ました二人だが、そこは見たことも無い場所であった。

## 第一回　「勇気」と「弱さ」

「なんだよこの絵?」「何って、僕が思い描くヒーロー像を」

「こんな弱そうなのが?」「勇気と根性は向よりも強いんだ。この炎はその表れだよ」

「ショウが何て言おうが、これが僕のヒーロー像さ。僕のピンチを救ってくれる唯一のヒーロー」

タキの思い描くヒーロー像。それは友達のショウの言ひ方によると見  
るからに弱そい。

でも、タキの中では最高のヒーロー像。いつか自分が思い描くヒ  
ーローが現れないかなあとthoughtしていた。

タキは時々こういふ話を熱く語る。そんな話をショウは文句も言  
わず聞くのだが、必ず否定し、馬鹿にするように笑う。

「そんなことよりあそこ行かないか? 今日、物凄い暇なんだよ」

ショウは、タキの話が一段落ついた後、そう問いかけた。

あそことは、タキとショウが小さい頃に家の近くの森の中に作っ  
た隠れ家で、高校生の今までずっと使い続けている一人だけの秘密  
の場所である。

タキも暇な日だったのでショウの問いかけを承諾した。

一人が向かった森の隠れ家は、人の気配が無く静かで、鳥のさえ  
ずりや、虫の声しか聞こえない。そんな隠れ家で、一人は和やかに

雜談していた。

「やつぱりここは和むよなあ。疲れているときに最適だぜ」

ショウは、ハハハッと笑いながらそう話していたのだが、急に様子がおかしくなった。

急に息が荒くなり始め、変な汗まで流れ始めた。「…………」と言ひながらその場に倒れる。

「いきなりどうしたんだよショウ！」

タキは急に倒れたショウに驚き、大きな声で呼びかけていたのだが、タキも次第に気分が悪くなり始め、その場に倒れた。そして一人は気を失い、意識は遠い世界へと消えた。

しばらくして一人は田を見ました。しかし、そこは見たことも無い場所であった。

隠れ家があることはあるのだが、周りの風景がおかしい。明らかに地形が違うのだ。まるで、一人がいた隠れ家だけ別の森に移動したような感じになつていて。

「…………タキ………… ゆづくじと俺が指差す方向を見てみ

ショウが驚きながら指差している。これはただ事じやないと思い、タキは素早くショウが指差す方向を振り向いた。

そこで二人が見たものは、鳩のようで鳩ではない形をした鳥の大群であった。

一人がしばらく「唖然」としていると、鳥の大群が一人の方へ向かってきたではないか。それに気づいた二人は、一目散に走り始めた。

「どうじゅうことだタキ！　どうして俺達が追われなくちゃならんのだよ！？　それになんだよあの鳥！　鳩に似てるけど違うよな！　鳩じゃないよな！」

「そんなの僕に言われても知らないよ！　僕だって今の状況が理解できないんだから！」

一人は愚痴を言い合いながら逃げ回った。何かに追われたときの耐久力は凄まじく、何分もの間全力で走り回り、ついには鳥の大群から逃げ切り森からも出ることができた。

森から出た先は見たことも無い場所ではあるが、家などが立ち並び、人もいることからみると町のようである。とりあえず一人は現状把握のため、町の人々に聞き込みをすることにした。

「すいません。この町の名前はなんていう町ですか？」

タキが町を歩いていたおじさんにそう尋ねた。

「ここはトキワシティだよ。名前も知らずにトキワに来るなんて珍しいなあ」

一人は驚いた。トキワシティなんて行つたことは当たり前の事、聞いた事すら無いのだ。

「なんだか不思議だな君達は……ちょっと聞きたいんだけど、これは持つていいよね？」

おじさんは、大きさに驚いている一人を見て、首を傾げながらそう言つと、真ん中にスイッチのようなものがある、丸い形をした赤と白の色が混ざったボールを取りだした。

二人は田になりながら、一人口を合わせて「持つてません」と言葉を返した。

「えつ！？ 持つてないのかい！？ ところとはポケモンを持つていないとこりとだよね？ 君達はどこから来たんだい！？」

おじさんは、さつきとは打つて変わつて、焦つた口調で一人に問い合わせた。

「信じてくれるかは分かんないけど、田を覚ましたらこの先の森にいたんだ。そこで、鳥の大群に襲われて逃げてきたつてわけ。それとポケモンつて？」

シヨウがそう言つと、タキも頷いた。

「うむむ……きっと、ポケモンに襲われて頭がおかしくなつてるんだな……そうだ。まずは、オーキド博士の研究所へ行こう。きっと君達の助けになってくれるよー。」

おじさんは思ついたように言つた。

「それはちが……」

タキは、頭がおかしくなつてることを否定しようとしたが、シヨウに止められ、小声で「今はここで言い争いをするより、おっちは

やんに従つとくほつが賢明だ。着いていけばなんか分かりそつだしさ  
と言われると、タキも静かに口を閉じた。

「 わあ。おじさん着いてきて」

一人は「わやわやあいがといひやれこます」と小さくお辞儀をしながらそう言つと、おじさんと共にオーキッド博士の研究所へと足を進めるのであった。

## 第一回。ポケットモンスター。略してポケモンの世界

おじさんと共にオー・キド博士の研究所へ向かっている途中、三人は新たな町に着いた。

そこは、マサラタウンという町らしく、ここにオー・キド博士の研究所があるらしい。

二人は、おじさんに言われるがままにオー・キド博士の研究所に足を踏み入れた。

研究所といふこともあり、難しそうな本がズラッと並んでいる。まあ、ポケモンの研究所なので、難しい本は全てポケモンに関することなのだが……

研究所に入った後、おじさんが一人を連れて、オー・キド博士の下へ連れていった。

「失礼します。オー・キド博士……実は、困ったことがあります……」

おじさんがオー・キド博士に一人に関する事情を説明した。初めは笑顔でおじさんの悩みを聞いていたオー・キド博士も、事情を聞く内に真剣な表情に変わった。

「何と… それじゃあこの子達は、ポケモンを知らぬのはもちろんのこと、ijiがどこかもわからないというのかね?」

オー・キド博士も、今までにない出来事に頭を悩ませている。

「どうにかなりませんかオーキド博士？」

おじさんも、オーキド博士同様に頭を悩ませてこらめつだ。

「そうじゃの……君達はポケモンはおるか、この世界のことはかり知らないんじゃな？」

こきなじ話を振られた二人はビクシとして「は、はい！」と答えた。

「なら、ポケモンの事について少しでも知識があつたほうがよからう。理由はどうあれ、この世界ではポケモンについて知らないことどうにもならないからのお」

せう言つと、オーキド博士は紙とペンを取り一人に渡した。

「よいか。今からワシが言つようとよへくメモるんぢやぞ。とても大事な話じゃからの」

オーキド博士がポケモンに関する基本的な話を話し始めた。

「まず、ポケモンといつのはポケットモンスターの略で、この世界にすむ生き物なんぢや。」「まあはいいかの？」

二人はメモを取りながら「はい」と頷いた。

「つむ。そのポケモンは、モンスターボールといつボールで捕まえることができるのぢや」

オーキド博士は、自分のポケットに入つてあるモンスターボール

を取り出し、一人に見せた。

「あつー！ ジれおじさんに見せてもらひたボールと同じだ！」

タキがそう叫んでモンスター ボールを指差した。

「ほう。 それじゃ 話は早いの。 このボールはポケモンを捕まえるためにある。 その捕まえたポケモンを育てたり戦わせたりして、 ポケモンマスターを目指す人たちをポケモントレーナーといふのじゃ」

オー・キド博士の話を一人は必死でメモする。 いや、 必死なのはタキだけで、 ショウはなんの焦りもみせずにマイペースにメモしている。 そして「博士。 質問いいですか？」と手を上げた。 オー・キド博士も「なんじや？」と質問を許可した。

「ポケモンマスターといふのはつまり、 最強のポケモントレーナーと云う解釈でよろしいでしょうか？ そして、 この世界にはポケモンマスターになるための数々の試練があり、 世界中のポケモントレーナーがポケモンマスターになるために日々努力している」

「おお！ 中々鋭いの。 簡単に言えばそういうことじやな。 ポケモンマスターになるためには、 ポケモンリーグという大会で勝ち抜かねばならん。 しかし、 面白いことにポケモンリーグに参加するためにも条件があつての。 八つある各地の公認ポケモンジムのジムリーダーに勝利して、 八つのバッジを手に入れねばならんのじや」

この後も、 ポケモンが入っている手持ちのモンスター ボールは六個と決められていて、 七個目以降は、 あらかじめ決められてある場所へと転送されてしまうこと。

野生のポケモンを捕獲しても、 レーナーの力量が足りないと命

令に従わない」とetc……色々な細かなことまで説明してもうつた。

オークド博士がここまで説明したといつことは……一人も薄々と感づいていた。

「ふう。これで説明は終わりじゃ。ちゃんとメモは取れたかの？」

二人はオークド博士の説明を書き込んだ紙を見せた。タキは、言われたことをそのまま紙いっぺに書いた。

ショウは、内容をまとめ、コンパクトに書かれている。  
しっかりとメモを取っている一人に、オークド博士も「ちゃんとメモを取れておるの。感心感心」と上機嫌だ。

「うむ。一人とも立派じゃ。何か」褒美をあげないといかんのあ…  
…おお！ あがいいわい」

オークド博士は、ワザとひそかそう言つて、棚の中にしまわれてあつた三個のモンスター・ボールを取り出し、一人の前にある机の上においた。

「この世界ではポケモンを持つていないと話にならん。この、三個のモンスター・ボールの中に入っている三匹のモンスターを、君達に一匹ずつあげようではないか。この世界でポケモントレーナーとして頑張っている間に君達の世界に帰れるかもしれんしお」

ポケモンが入っているモンスター・ボールを見て、一人は「おおー」と、テンションがあがつている。

「ねえ。モンスター・ボールの中からポケモンをだしてみていいです

か！？」

「よこせ。自分の気に入ったポケモンを選ぶには、実際に見てみるのが一番いいからね」「おお！」

「本当？ やつたあ……」

タキは、相当テンションがあがつているらしく、勢いよく三匹のポケモンをモンスター・ボールからだした。

しかし、三匹のポケモンをモンスター・ボールからだした途端、テンションショーンがあがつて笑顔だつたタキの顔から笑顔が消えた。

「ねえ。オーキド博士。この一番左のポケモンってポケモンだよね？」

「やうじゅよ。このポケモンはヒトカゲというポケモンじゃ」

「僕、ヒトカゲに決めた。うん。絶対決めた。いいよねショウ？」

タキは、真剣な表情でショウに問いかける。  
ショウも、タキの変化に驚いていたらしく「あっ…………ああ…………」と遠慮がちに言葉を返した。

タキが真剣になるのも無理はない。ヒトカゲは似ていたのだ。タキが思い浮かべるヒーロー像に。タキは感激したのだ。現れないかなあとと思っていたヒーローが目の前に現れたことに。

タキがヒトカゲを見て感激している最中、ショウも真剣な表情で一匹のポケモンを見ていた。そして……

「俺はここに決めた。このポケモンの名前はなんていうんですか？」

ショウは、真ん中のモンスター・ボールに入っていた龜のよつなポケモンを選択した。

「ふむ。このポケモンはゼニガメといつポケモンじや」

シラウは、ゼニガメといつ名前を聞いて首を傾げる。

「なんだか、パツとしない名前だな。名前を自分の好きなよつに変更するのよつじので？」

「全然じこ」とじや。自分で名前をつけたじこによつ愛着もわくつてもんじや」「やじや」

「えつ。わうなのー、じゃあ僕はヒーローで名前にするー、だって僕のヒーローだからね！」

名前をえていとこつ答えて、質問したショウよつも、なぜかタキのほつがテンションがあがつてこる。

「ヒーロー……？ なんのことなんじや？ タキ君はポケモンの事を知らないはずなんじやなかつたのかのお？」

ヒトカゲがタキの思い浮かべるヒーロー像と瓜二つだとこつとを知らないオー・キド博士にとつてはチンパンカンパンな話である。「あまり気にしないほうがいいですよ。一緒にいる俺でもあまり理解ができないんですから」

せひひとやつはこのけたシヨウに、タキせ、ムツとしながひシヨウ  
ウニ言葉をぶつかる。

「じゅあ、シヨウはゼガメになんてな前つかるのセー。」

「亀といえばあれだろ。なんてつけると毎'づへ。」

怒り口調のタキの言葉を、シヨウは冷静に対処し、逆に質問を返した。

「ノロノロヘ。」

「違ひ。マコオから離れ。」

「パタパタ？」

「だから、マリオから離れ。」

タキは、やつせまでの怒りが嘘のように真剣に考え込み、じぱりくして、思いついたように勢いよく言葉を発した。

「分かった。ターツルズだー。」

「確かにミコータントには近いが違ひ。ほら、あれだよあれ。繩で縛る最もメジャーな技といえばー?」

タキは、ようやく答えが分かったようだが、恥ずかしくてその名前がいえないらしく「答え分かつちやつたから自分で発表しなよ……」と、呆れたようにシヨウに言葉を発した。

「亀甲縛りつて言葉恥ずかしいか……？ 亀とこえぱやつぱいの言葉に限る。そつから、名前を略してキックマーつて名前に決めた」

「忘れてたよ……ショウつて超がつくほどのもんね。時々、二重人格なんじやないかって思っちゃうへり……」

「うひせえ。がキックマーを選んだ理由はそれだけじゃないんだよ。さつき説明で言つてただろ？ レーナーの力量次第で、ポケモンは命令を聞かないって。だからよ……」

シヨウは、タキに耳打ちで内容を伝えた。

「うわ……それって僕達の世界じゃ犯罪じゃない？ よく思いつくねそんなこと……」

一人がこんな会話をしている間。何を話しているのかわからないオーキド博士は、会話に入ることが出来ず困っている。

それに気づいたショウが、咄嗟にフォローに入る。  
「あつ、名前の由来については気にしないで下さい。一つの問題ですから。それはともかく、ポケモンを手に入れた俺達はまずどうすればいいんでしょうか？」

いきなり話を振られたオーキド博士はビクッと驚きながらも言葉を発した。

「『ほん……君達にはいまからポケモントレーナーとして旅に出てもいい』」

オー・キド博士は、棚から赤い色をした機械を一つ取り出し、一人の前にある机の上に置いた。

「これはポケモン図鑑という図鑑じゃ。」この図鑑は捕まえたポケモンのデータが自動的に登録されるハイテクな図鑑でのお。君達にはこの図鑑を完成させて欲しいのじゃ。」

オー・キド博士は、そう言つと一人にポケモン図鑑を渡した。ポケモン図鑑を渡された一人はとつと、ポケモン図鑑にとても興味をもつたようで、快く引き受けた。

「そうじゃ。ポケモンと触れ合ついい機会にちよつとお使いを頼まれてくれんかのお？ トキワシティの道具屋にこれを渡してくれるだけでいいんじや。」

オー・キド博士は、まるで計算したかのよつと、後ろにおこてあつた袋を一人の前にある机の上に置いた。

「えへ。それつて、博士が行きたくないだけなんじや……」

タキが疑いの眼でオー・キド博士を見る。

「それはちがうぞタキ君。お使いの途中にポケモンに出会つこともあるじやうつ。そこで、手に入れたポケモンで戦うのじや。そつする」とことひつて、ポケモンは技を磨き、精神を磨き、強くなつていのじや。」このお使いは、いわば修行じや！

オー・キド博士が力強くそう発した。

「むうう。なんだか丸め込まれたような気がするなあ……」

なんだか納得いかないタキに、ショウが話しかける。

「俺もそんな気がするんだよなあ。でも、オーキド博士の言つて」「  
も一理ある。だから、ジャンケンでどっちが行くか決めないか?  
それなら納得がいくだろ?」

「確かに……それなら文句なしだもんね! じゃあ、早速!」

「最初はグー!」と叫んでしたタキをショウが「ちょっと待て  
よ」と止める。

「ルールをおわらこしといひ。ジャンケンってのは勝てばいいわ  
けだ。勝てば行かない。負ければ行く。これでいいな?」

「なんだよ急に改まつて……それでいいと想つよ。それじゃあ……  
最初はグー! ジャンケンポン!」

タキはグーをだした。しかし、ショウはその場では何もださず、  
タキがグーをだした後に、堂々と後だしジャンケンをしてパーをだ  
した。

「なに堂々と後だししてるんだよショウ! 反則だぞ!」

タキがショウに不正を訴える。

「おいおい……ルールのおわらこはしたはずだぜ? ジャンケンは  
勝てばいい。後だしが不正だとは一言も言つてない」

ショウの理不尽な言い分に、とうとうタキもブチ切れた。

「もういいよ！ 僕が行けばいいんだろ？ 時々ショウハウといふいう嫌なところあるよねー！」

タキは、オーキド博士がトキワシティの道具屋に対するお届け物を怒りながら力強く持った。

「行つてきますー！」

タキは怒り声で叫び、オーキド博士の研究所から姿を消した。

「ショウ君。ワシも今のほどつかと思つた。今からでも遅くない。一緒に行つてあげなさい」

オーキド博士は、呆れた口調でショウを叱つた。

「いいえ。確かに俺はタキにひどい事をしました。もしかしたら嫌われたかもしません。しかし、それだけのリスクを背負つても仕方ないくらい、あなたに聞かなければならぬことがあるんですよ。当然。タキ抜きでね」

ショウが不敵な笑みを浮かべながら話す間に、オーキド博士に向かを質問した。

そんなことを知る由もないタキは、ショウの愚痴を言いながらトキワシティへと向かつた。

## 第三回。使いの帰り

タキは、偶然にもポケモンに出来ついとなくトキワシティに着き、お使いを済ませた。

「ふう。終わつた終わつた。ショウのせいで無駄に疲れたよ全く」  
タキはまだショウに対して怒つており、愚痴をこぼしながらマサラタウンへ向けて歩いていた。

そのときだ。草陰からタキの前に見たこともない生物が現れた。  
タキは、その生物を見た途端に勘づいた。今、自分の目の前にいる  
生物はポケモンなんじゃないかと。

タキはすかさずポケモン図鑑を取り出し、その生物を調べた。

タキの勘は当たつていた。その生物は「ラツタ」というねずみポケモンで、身長は0・3m。体重は3・5kgのこと。

「ねずみポケモン……そのまんまだけどこの世界にもねずみって言葉があるんだなあ。不思議～」

そんな言葉を思わず言つてしまつたタキだが、「ラツタが戦闘態勢に入ったのを見ると、ハツと我に返りこちらもポケモンをだす。

「そんなこと言つてる場合じやないやー。ポケモンにはポケモンで勝負だつたよね。いけ！ ヒーロー！」

タキはヒーロをだし、攻撃するよう命令した。しかし、ヒーロは戦おうとせず、タキの命令を無視している。

「どうしたヒーロー、ひつかいて弱らせるんだ！」

しつこく命令するタキにイライラしたのか、ヒーローはコラッタではなく、タキの顔をひっかいた。

「痛たたた！ 何するんだよヒーロー、僕じゃなくてあっちー！」

コラッタを指差すタキだが、ヒーローは知らんぷりをしてタキの指差す方向を見よつともしない。

タキとヒーローがそんなやりとりをしていると、近くにある木の後ろから笑い声が響き渡った。

「誰だ！」

タキが笑い声がする方向を見る。

すると、木の後ろからヤンチャそうな男が現れた。

「おもしれえなあ。トレーナーの命令も聞けない馬鹿なポケモンと、そのポケモンをコントロールすることも出来ない駄目トレーナーのコンビとは。なあ。俺のコラッタにそこの馬鹿ポケモンを傷つけて欲しくなけれど、金を置いて今すぐ逃げな。駄目トレーナーでも、それくらいは出来るだろ？」

男のこの言葉に、タキが男を睨みつけた。

ヒーローの尻尾の先の炎が激しく燃え上がっている。さつと怒っているのだろう。

「残念だね。僕は金はおろか、どんな通貨単位かも知らないんだ。

だから無理だと返答するねー!」

「ふ～ん。じゃあ、じらしめてやるしかないよなあ。コラッタ!  
あの馬鹿ポケモンをボッコボコにしてやれ!」

男がコラッタに命令を下す。

「ヒーロー、僕の命令を聞いてくれないなら、僕は命令なんてしない。ヒーローが抱いている怒りをそのままぶつけてくるんだ!」

タキがヒーローに声をかけると、ヒーローはタキの方を見て静かにコクリと頷き、コラッタに向かつて突進していく。

突進していくヒーローに向かつてコラッタが飛び掛り、鋭い前歯から繰り出される噛みつきを仕掛けた。それをヒーローが振り払い、体当たりでコラッタを吹っ飛ばした。

体当たりで吹っ飛ばされたコラッタは体勢を立て直すも、衝撃でグラッともらつぐ。  
そこを勝機と見たヒーローは、口の中にためた火の粉を吐き出し、コラッタにぶつけた。

これにはコラッタも耐えきれずその場に倒れた。勝負ありである。

「やった! 強いぞヒーロー!」

タキが拍手しながら喜ぶ。

「ちつ……覚えてるよー。コラッタが弱すぎたんだ。俺の負けじゃねえ!」

男はそつ悪態をつくと、足早に逃げていった。

「あれが、駄目なトレーナーの見本だな。よく覚えといひ……それにしてもよくやつたよヒーロー！　お手柄お手柄！」

タキが笑顔でヒーロを迎える。ヒーロも「カゲヒ」と元氣よく鳴き、尻尾を揺らしながら笑顔でタキに近づいた。

しばらくの間、わつきまでのやりとりは嘘のよつに楽しそうにしていたタキとヒーロだが、ハツと我に返ったヒーロが、まだ認めたわけじゃないといった感じでムスッとする。

しかしタキは急に態度が変わったヒーロを見て、怒る様子も驚く様子もなく、ハハハと笑っている。

「こきなり仲良くなれりうなんて都合よすがれるよね。でも、絶対に仲良くなつてやるからな！　わつきのヒーロの笑い顔、もう一回見たいしさー。」「

タキは、ニシコリヒーロに微笑みながらモンスターボールを取り出し、「お疲れ様。ゆつくりお休み」と言つと、ヒーロをモンスター・ボールの中に戻した。

タキはモンスター・ボールの中にヒーロを戻した後、ショウやさつきの男に対し怒っていた姿が嘘のよつに、ルンルン気分でマサラタウンへと足を進めた。

## 第四回。ポケモンバトル。タキとショウ

ルンルン気分でマサラタウンへ着いたタキは、お使いに行くときの怒った顔が嘘なような笑顔で、オーキド博士の研究所に入った。

「お使い終わったよ！」

タキがオーキド博士とショウの下へ行き、元気よく話しかけた。すると、ショウがタキの下に駆け寄り、勢いよく頭を下げた。

「怒らせるよーうなことしぐめん！ 大人氣無いことしちゃったな

……

「いいよ。もう気にしないし。だから顔をあげなよ。ショウらしくないしさー！」

タキは笑いながらショウを許した。ショウも「ありがとな」といい、共に笑った。

そして、いよいよ一人の旅立ちのとき。一人がオーキド博士に挨拶をして、トキワシティの先にあるトキワの森へ向かおうとしたそのときだ。

「なあタキ。俺達ポケモンバトルもしたことないだろ？ ここは練習と思つて俺とポケモンバトルしないか？」

ショウがタキへポケモンバトルを要求する。

「いいよー。僕も練習が必要かなと思つてたんだ！」

タキは快くショウの要求を承諾した。タキは、あえてお使いの帰りに一度ポケモンバトルをした事を言わなかつた。一度ショウをギヤフンと言わせてやろうと思つたのである。

早速モンスター・ボールを出し、ポケモンバトルを始めよつとした二人をオーキド博士が止めた。

「ちょっと待つのぢや。ポケモンバトルはいいことなのぢやが、ポケモンバトルに関する注意を少し話しておこう」

それは大事なことだと思つた一人は、モンスター・ボールを一度しまい、オーキド博士の説明に耳を傾けた。

「基本的なことじやが、ポケモンバトルに勝つても負けてもポケモンのせいにしないこと。勝つた人も負けた人も、礼儀正しく最後は握手じや。決して人を不快にさせるような態度をしてはいかんぞ。それがマナーといつやつじや」

小さな声で「確かに基本的なことだなあ」と軽くショウに対し、タキは大きく頷いていた。つこさつき、「マナーを守れていないうトレーナーと出会つたので、とても共感できるのだ。

「それが分かればよいのぢや。ポケモンバトルは大事なことじやからドンドンバトルして経験を積むのぢやぞ」

オーキド博士はそう言つと後ろに下がり、ポケモンバトルを観戦する姿勢に入つた。

二人は仕切りなおしてモンスター・ボールを出し、勢いよくポケモ

ンをだした。

「行けヒーロー！ 最強の勇気と根性を見せてやるんだ！」

「その年で、よくそんな言葉が言えるよな……」

一人の掛け声に合わせて、ヒーローとキッカーがモンスター・ボールから飛び出す。

「ヒーロー、ひっかくだ！」

タキは勢いよく命令したが、やはりヒーローに命令を聞く気は無く、命令を無視する。

「もう！ 本当にわがままなヒーローは！」

タキが困惑していると、ショウが逃すはずが無かつた。

「なんか知らねえけど、向こうは仲間割れしてるとみたいだな。チャンスだぜキッカー。探りの体当たりだ」

ヒーローが命令を聞かないわがままな性格なのに対し、キッカーはトレーナーの命令にキチンと従い、ヒーローに体当たりを仕掛ける。言い合いになっているタキとヒーローは、キッカーの体当たりに気づかず、モロに体当たりが直撃し、吹っ飛んだ。

しかし、すぐに立ち上がったヒーローは、尻尾の先の炎が激しく燃え上がり、キッカーを睨んだ。

そして、キッコーの下へ突進し、キッコーにひつかくを仕掛ける。

「無駄だ！ キッコー。相手に背を向ける！」

ヒーロのひつかくは見事にヒットした。しかしそれはキッコーの背中。つまり、亀の甲羅にヒットし、ダメージは無い。

「普通。相手に背を向けるつて行為は負けを意味する行為。しかし、キッコーの背中には強力な防具がついてる。こりゃ、有利なポイントだ。そして、この甲羅に身を隠したなりびつ対応する？」

シラウがそう言つと、キッコーは甲羅の中に身を隠し、ヒーロに向けて突っ込んだ。

ヒーロは、キッコーの甲羅体当たりをギリギリでかわすが、ダメージを取れる術がないヒーロは反撃することが出来ない。

しばらくの間、ヒーロは、キッコーの甲羅体当たりを避け続けていた。

しかし、次第にスタミナは奪われ、動きにも疲れが見えてきたそのとき。

「ヒーロー、避けるなんて考えちゃ駄目だ！ このまま避け続けても勝ちは生まれない！ 受け止めるんだ。流れを変えなきや。無理だなんて考えないで。ヒーロなら出来る！」

タキがヒーロに向けて言葉をかける。いつものヒーロならタキのこの言葉を無視していただろう。しかしヒーロは、甲羅体当たりを受け止める体制に入る。タキの言葉がヒーロに伝わった瞬間である。

「ちゅうと無茶だぜタキ。これで決まりだ。突っ込めキッコー！」

キッコーがヒーロに向かつて甲羅体当たりで突っ込む。

「確かに無茶だ。でも、そんな無茶だつてヒーロは根性で乗り越えてくれる！」

ヒーロが突っ込んできたキッコーを受け止める。しかし、甲羅体当たりの勢いは止まらず、ズルズルと後ろに押されてゆく。ヒーロは、歯を食いしばりながら根性で我慢する。

「うだだり……これは予想外だ」

ショウが驚くのも無理はない。ヒーロは甲羅体当たりを受け止めたのだ。

「よし！ そのまま地面に叩きつけるんだ！」

タキは思いつきりガツツポーズをしてヒーロに命令した。

「キッコー！ 高速回転だ。摩擦を作れ！」

ヒーロがキッコーを地面に叩きつけようと手を振り上げた瞬間を狙い、キッコーが高速で甲羅を回転させ摩擦を作ったことでヒーロが突然の痛みに驚き、手を離した。

「惜しい！ もう少しだつたぞヒーロー！ でも、流れが変わった。押し切れるかもしれない！」

意気込んでいるタキサイドに比べ、ショウサイドは少し暗い雰囲

気になっていた。

「ふう。」のまま押し切れると思つてたけど、そりや甘かったか。  
…もつやるせ俺は。奥の手使用だ

「まだ奥の手が……やっぱり凄いやショウは。でも、それもヒーロ  
は根性で乗り越えてくれると信じる。僕達の奥の手は根性だ！」

「」の瞬間。余裕が見えていたショウが消えた。  
一匹のポケモンのスタミナも少なくなってきた今、決着の時は近  
い。

## 第五回。決着！ タキ丶Sショウ！

「キッコー。水鉄砲」

「ヒーロー！ 火の粉で応戦だ！」

キッコーの放った水鉄砲に対し、ヒーローは火の粉で応戦する。

激しくぶつかり合う水鉄砲と火の粉。しかし、徐々に火の粉が押され、火が消えた。

火の粉に打ち勝った水鉄砲は、勢いが弱まることなくヒーロー目掛けて飛んでいき、クリティカルヒット。

「ヒーロー！」

タキが心配そうに呼びかける。その呼びかけのおかげなのか、水鉄砲がクリティカルヒットして倒れたヒーローが、フラフラになりながら立ち上がった。

「決めるキッコー。相手に水鉄砲を打ち破る手段なんて無い！」

キッコーがヒーローに向けて、渾身の水鉄砲を放つ。

ヒーローに向けて真っ直ぐ飛んでいく水鉄砲。フラフラのヒーローに、それをかわす体力はもう無かつた。

しかし、水鉄砲はヒーローに命中することは無かつた。タキがヒーローをかばつたのだ……

「なつ……大丈夫かタキ！」

水鉄砲を食らって吹っ飛び、立ち上がらないタキの下にショウウが駆け寄る。

「タキ……お前……」

ショウウがタキの下に駆け寄り、声をかけようと顔を見ると、涙を流しているタキの顔があつた。

「どうしたタキ。そんなに水鉄砲が痛かったか？　とりあえず涙拭け」

ショウウがタキにハンカチを渡す。

タキは、ハンカチを受け取り涙を拭く。

「ありがとう。僕、最後にヒーローを信じることが出来なかつた。火の粉が水鉄砲に負けたとき、もう駄目だと思つちゃつたんだ。でも、ヒーローは立ち上がつた。その光景に呆気にとられて命令することも出来なかつた僕は最低だ……」

ハンカチで涙を拭いても吹いても、タキの涙は止まることは無かつた。

そんなタキを見たヒーローが、タキに近づいてきた。

「カゲエー！」

ヒーローは、明るい鳴き声でタキを励ました。タキの肩をポンッと触つたりしている。

「ほら。ヒーローも氣にしてないから元気だせつて励ましてくれてん

「うわ。トレーナーがポケモンにマジ心配されてどうしたよ。

ショウがタキに向けて手を差し出す。

「うさ。ありがとうー。」

タキもこのままじゃいけないと思ったのか、必死で無理な笑顔を作つて、ショウが差し出した手をギュッと握り、立ち上がった。

「そうだ。それでこそタキだ。それに、どっちかといつと俺のほうが最悪な男だ。俺は、勝つ確信があつてタキにポケモン勝負を挑んだんだからな」

ショウのこの発言に、タキが疑問をもつた。

「えっ？ 勝つ確信があつたってどうこいつって？」

「まあ、実際は有利なだけで絶対勝つわけじゃないんだけど、現段階なら勝てるって確信があつた。まつ、これはタキが博士のお使いに行つたところから確信に変わつたんだけだな」

時間は、タキがイライラしながらお使いに行き、ショウがオーキード博士に質問するところまでかかる。

「ある質問？ なんじゃ？ それは、タキ君を怒らせる必要がある質問なのかね？」

オーキド博士が少し怒り口調でショウに言葉をぶつける。

「ええ。せむりライバルには、あまり情報を提供したくないでしょ

「うへ」

ショウが、少し一ヤツとしながら言葉を返す。

オーキド博士は、ライバルといつも葉に反応する。

「ライバル？ タキ君とショウ君は友達じゃなかつたのかね？」

「ええ。友達です。むしろ親友だ。だから余計にタキと競いたくなつたんですよ。俺のストーリーでは、タキと俺がポケモンマスターになり、最後の最後で俺が勝つて、眞のポケモンマスターになるつてストーリーですから。やつぱり最後は親友と本氣の戦いをやりたいんですよ」

ショウは、オーキド博士の答えを待つことなく、言葉を進める。

「だから、俺が抱いている疑問をタキに悟られるわけにはいかなかつた。だから、無理やりタキと俺を離したんです。こんなにうまくいくとは思わなかつたけど。それでですね。質問というのは属性の関係のことなんですよ」

「属性の関係……！ もしゃショウ君！」

オーキド博士が驚く。そう。オーキド博士は、属性の関係を話していなかつたのだ。

属性に関しては、後々知つていつてもひつのが一番身にしみるとオーキド博士は考えていたからだ。それをこんなところで質問されるとは思つていなかつた。

「やっぱり関係ありますか。いやあ。見た目が見た目だったもんでも気になつていたんですよ。タキは、多分気になつていないと思いま

す。自分のヒーロー像に似たポケモンが現れたわけですからね。だから、これはチャンスだと思ったんです」

実は、ショウがゼニガメを選択したのには、亀といつ言葉に反応したわけではなく、ちゃんととした理由があった。

ショウは、ポケモンの特徴を見ていたのだ。

ヒトカゲには、尻尾に炎がある。つまり炎属性。

ゼニガメは、亀といつこともあるし、水を吐きそうな雰囲気がある。つまり水属性。

フシギダネには、体の上に植物のようなものが生えている。つまり自然属性。

一般的に炎は自然を燃やす。水は炎を消す。自然は、水から力を与えてもらえる。

それは、タキとショウがいた世界では当たり前のことである。しかし、それが自分達の全く知らない世界だとどうだろうか。

いきなり知らない世界に飛ばされた生物は、環境の違いからか、一般的な考えが麻痺してしまう。そうなると厄介なもので、知らない生物が炎を吐け水を吐け、植物を飛ばせるとしても、所詮は知らない世界の知らない生物の話。属性の一般的理論なんて考え方しない。

しかし、タキがヒトカゲを選んだとき、ショウは色々とわざらしい理由をつけて、炎属性に強い、水属性のゼニガメを選んだ。

全て推測ではあつたが、一般的理論を考えながら行動していたのだ。

「オーキド博士。こんなところで間違いは無いですよね？」

「う、うむ。属性の考え方はそれで間違いはないのぉ」

「それはよかつた。俺もリスクを負つた甲斐がありましたよ。後はタキの帰りを待つのみ。ちゃんと謝らないこと。やりすぎちゃいましてからね。俺が自分でしたことですけど、やつぱり自分のせいで怒った親友の顔を見るのは嫌ですからね」

そして、今に至るところわけだ。

「それじゃ、あの名前のぐだりは……」

「そういうわけ。全部、疑問隠しのためのぐだり。まあ、そんなことしなくともタキはヒーローを選んでただろうな。知り合って間もないポケモンのために涙流せるんだからよ」

ショウが、微笑みながらタキの頭を軽く小突く。

「痛いなあ……もう言わなくていいでしょ泣いたことは！ それより、僕と競い合いたいって、本気で言つてるの？」

「ああ。マジで言つてる。一度、何かでタキと競い合いたかったんだ。勉強じゃタキが勝つし、スポーツじゃ俺が勝つだろ？ まともに正々堂々競いえる何かが無かつたんだ俺達は。だから、ポケモンでタキと競い合いたい。これなら一から正々堂々競い合えるだろ？ まあ、属性は俺が有利だけだ。タキは俺と競うのは嫌か？」

「嫌じやないよ。僕もショウと競い合いたい」

ショウは「えつ」という顔をした。ショウの予想では、タキがしつこく「嫌だ」と言ってくると思っていた。だから、それに対する返しの言葉も用意していたのだ。

「今日。ショウと戦つて思つたんだ。ショウに勝ちたいって。もつとポケモンバトルしたいって。もうやめられないよ。僕はポケモンマスターになる。そのためには、僕はショウと仲良く冒険しちゃいけない。僕は、ショウのライバルでいなければならぬ」

力強くそう言うタキ。

そんなタキを見て、軽く微笑むショウ。

「うつし。じゃあ決まりだな。今から俺とタキはライバル同士だ。絶対、タキには負けないからな！」

「望むところだよ！」

タキとショウはガツチリと握手を交わした。  
そして、いよいよ旅立ちのとき……

## 第六回。旅立ち

「いよいよマサラタウンからの旅立ち。

タキとショウが、オーキド博士に旅立ちの言葉を発する。

「オーキド博士。絶対ポケモンマスターになつてもう一度会いに来るからね！」

「本当に色々とお世話になりました。あなたがいなければ俺達どうなつていたことか」

オーキド博士も、一人に言葉を返す。

「うむ。二人とも立派なポケモントレーナーを目指すのじゃぞ。わ  
しは、タキ君とショウ君なら、きっとポケモンマスターになると信  
じてある」

そして、ガツチリと握手をした三人。旅立ちの瞬間だ。

「一人はオーキド博士と別れた。  
そして一人も別々の道を進む。

タキは、トキワシティに少しの間滞在し、野生のポケモンと戦い  
ヒーロの特訓。

ショウは、トキワシティの奥の森。トキワの森を抜けた所にある、  
「ビシティをを目指す。

「ショウ。一度お別れだ。また、何処かで会つたらポケモンバトル  
しそうね。俺。絶対に強くなるからさ」

「ああ。結局頂点は一人とも同じところにあるんだ。絶対にまた再開する。そんときはまた倒してやるから覚悟しどけよ。じゃあ、俺は先に進むからそろそろ行くわ。じゃあな。我がライバル。再開を楽しみにしてるぜ」

二人は、出会ったときから一緒にいた。一緒に遊び、勉強し、喧嘩し、笑いあった。

そんな二人が、初めて別々の道を歩もうとしている。目標は同じだが、歩む道は違うのだ。

今、この瞬間から、タキの旅。ショウの旅。一つの違った旅が始まった。

## 第七回。特訓

ショウと別れた後、特訓のために早速草むらでポケモンを探していたタキ。

するとそこには、一匹のポケモンが現れる。

「あつ、こいつはー！」

タキが驚くのも無理はない。そのポケモンは、トキワの森で遭遇したあの鳥と同じ姿だったのだ。

あの追いかけられた出来事を思い出しながら、鳩みたいな形をしたポケモンをポケモン図鑑で調べる。

そのポケモンはポッポといつて、ポケモンで、身長は0・3m。体重は1・8kgのこと。

「こりポケモン……鳩ポケモンじゃなくて？」

思わずツッコみを入れるタキ。

だが、そんなことを言っている場合ではない。これは特訓のチャンスなのである。

タキは、ワクワクした顔つきでモンスターボールを取り出し、ヒーロをだす。

それに気づいたポッポは、威嚇し、警戒しながら戦闘態勢に入る。

「よし勝負の基本は先手必勝だ！ ヒーロ。ガンガンいくんだ！」

しかし、ヒーローは戦いにこいつとしない。タキのほうをジッと睨んでいる。

焦ったタキは「じうしたんだヒーロー、ガンガンいくんだ！」と、何回も同じ言葉を繰り返した。

ヒーローは少しイライラしてきたのか「カゲエ！」と大きく鳴くと、タキの足をシンシンと突付き、自分のほうを指差す。

「ヒーロー、もしかして……」

「このときタキは感じた。ヒーローは、自分に命令しようと誓っているのだと。

「カゲツ」

ヒーローは、その通りだとでも言つようこそ、静かに頷きながら鳴いてみせる。

「ヒーロー、君の心が命令しると言つて居るよつに感じた。だから命令するよ。体当たりだ！」

嬉しそうにそう叫ぶタキを見たヒーローは、少し微笑みながらコクンと頷き、クルッとポツポの方を振り向き、体当たりを仕掛けようとした。

「カ……カゲエ？」

タキとヒーローは目を疑つた。ヒーローが振り向いた先には、ポツポの姿がなかつたのだ。

焦りと情熱で目のが見えていなかつたタキ。タキの方を向いていたので、当然、ポツポの姿が視界に入つていなかつたヒーロ。

そんなタキヒーロに取り残されたポツポは、呆れたのか威嚇するのをやめ、どこかへ飛び去つてしまつたのだ。

あれだけ情熱パルスが共振していたタキヒーロ。しかし、この出来事に少しの間、呆然としていた。

しばらくして、タキが不意に「アハハ」と笑う。

「結局、こんな結果になつちやつたけど僕達が得たものは大きかつたよね！ 行こうよトキワの森に！ 僕達の友情パワーがあれば絶対大丈夫だよ！ うん。絶対！」

タキは、ヒーロが命令を聞いてくれるようになつた。すなわち、パートナーになれたと思つてゐるのだ。

そんなタキの熱い思いと裏腹に、ヒーロは、やれやれと思いながら、小さく「カゲエ」と冷めたよつに鳴いた。

「そんなに照れなくていいんだよヒーロ。鳴きたいときは思いつくり鳴くものぞ！ ジャあ、モンスターボールに戻すよ。ゆっくり休んでてね！」

タキは、ヒーロが照れているので小さく鳴いたのだと思い、満面の笑みでヒーロにそつまづ。タキは、とても上機嫌のようだ。

そして、ヒーロの反論も待たぬままモンスターボールに戻し、トキワの森へと足を進める。

## 第八回 レッショ一。トキワの森

トキワの森の中へ入ったタキ。

しかし、タキはトキワの森からニビシティまでの道のりを知っているわけでも、描かれた地図を持つているわけでもない。

ヒーロと友情パワーを分かち合えたと思っているタキは、嬉しさのあまり、勢いでトキワの森へと入ってしまったのだ。

これでは手探りでニビシティまで辿り着くしかない。この方法よりは、もう一度トキワシティに戻り、町の人にもニビシティまでの道順を聞いた方が早いだらう。

しかし、今のタキはそんなこと頭に入っちゃいない。原動力は勢いなのだ。何も考えずにトキワの森を手探りで突き進む。

その結果。現在、タキは道に迷っている。我に返った頃には時すでに遅し、帰り道なんて分かりやしない。

「完全に迷っちゃったよ……もしかして僕はここで一生を終えるのかなあ。餓死……そんな苦しい死に方嫌だあ！ トキワの森で白骨死体発見なんてニュースになつたらもつと嫌だあ！」

泣き言を言いながら歩き続けるタキ。

しかし、ここで一発逆転の大チャンス。タキに神様からのプレゼントが。

「人だ。人がいる！ これで助かるぞ」

なんと、泣き言を言いながら歩いている途中、虫取り網を持った

一人の少年を発見したのだ。

これはニービシティまでの道を聞くチャンスだと思ったタキ。すぐに少年の下に駆け寄り、ニービシティまでの道を尋ねた。すると、思わず答えが返ってきた。

「えつ。うーん。じゃあ、僕とポケモンバトルしようよ！ それに勝てば教えてあげる」

「そつそんな。ポケモンバトルはいいけど、先に道を教えてくれてもいいじゃない。それからなら、僕はいくらでもポケモンバトルをするよ！」

少年の言い分にタキは猛反論。しかし、少年が言つ。それがポケモンバトルのルールなのだと。

そう。普通、ポケモンバトルとは、何かを賭けて戦うものなのだ。勝てば相手から賭けた物をもらえるし、負ければ賭けた物をあげなければならぬ。これはルール。

まあ、誰が見ているとかいうわけでもないので、ルールを守らない無法者も多いらしいのだが、もし誰かに見つかって通報されると、お繩頂戴になるらしいので注意が必要である。

なので、少年が負ければタキにニービシティまでの道案内を。タキが負ければお金。

しかし、タキはこの世界のお金を持っていない。というか通貨單位すら知らない。

「うーん。それじゃ仕方ないね。何か持つている物はない？」

「持つているものと言われても……」

タキはズボンのポケットなどを手当たり次第探す。そして見つけたものが……

「うわあ。こりゃいいじゃん。キラキラしてなんだか綺麗」

ビー玉である。この世界ではキラキラしたものは結構珍しいもの。のようだ、好かれる傾向にあるようだ。

これで条件は成立。タキが勝てば一級シティまでの道のりを、少年が勝てばビー玉を。生い茂った森の中、ポケモンバトルスタートだ。

「行け。ヒーロー！」

タキがヒーローをだす。

ポッポとの試合で肩透かしを食らつたためか、やる気は十分。いつでもOKといつ感じである。

「行け。キャッピー！　お前に決めた！」

少年がだしたポケモンは、キャッピーといつキャッチーな名前とは裏腹に、アゲハチョウの幼虫を大きくしたような外見をしている。これはマニアック受けしそうな感じだ。

「ここのポケモン。僕がいた世界にも似たような虫がいたような気が……」

そんなことを呟きながら、ポケモン図鑑でキャッピーを調べる。

そのポケモンはキャタピーといいういもむしポケモンで、身長〇、  
3m。体重2、9kgの」と。

「いもむしポケモン……今まで見てきたポケモン。みんな見た目そ  
のまんまだよね……」

なぜかテンションが下がるタキ。しかし、そんなことでテンションを落としている場合ではない。今は、ポケモンバトルの真っ最中なのだ。

「でも、これはチャンスかも。身長だつて体重だつてヒーロのほうが高いし重い。力的には有利なはずだ。先手必勝。体当たりだ！」

タキがヒーロに命令する。ヒーロもタキの命令を聞き、キャッピーに体当たりを仕掛ける。

「確かに体格的には不利かもしれない。でも、戦い方によつては勝ち田もある！ キャッピー。糸を吐く！」

少年がそう言つと、キャッピーがヒーロに向けて糸を吐いた。すると、体当たりを仕掛けるヒーロを嘲笑うかのように糸が体に絡みつき、身動きが取れない状況になつた。

「これで君のポケモンは行動が出来ない。さあ、キャッピー。見せてやれ。虫の恐ろしさを！」

キャッピーが糸が絡まつて身動きが取れないヒーロに近づき、力普ッと噛み付いた。

致命傷ではないが、地味にジワジワくる痛みに、ヒーロも苦しそうな表情をしている。

「ふふふ。見たか。これがキャッピーの攻撃力の低さを克服するために編み出した拷問地獄だ！ 身動きが取れないまま地道に体力が奪われるよー！」

少年が自慢気に、そして自信気にそつ語る。

タキも、必死で今の状況を開拓する方法を考える。

「そ……そうだ」

タキはショウが話していた属性の話を思い出した。  
そして考えた。基本、昆虫が吐く糸は炎で燃える。なので、キャッピーが吐いた糸も燃えるんじゃないかと。しかし、そうなるとリスクも生じる。糸は体に巻きついているのだ。糸を燃やすことによりヒーロ自身の体も燃えることになる。いくら自分が炎属性といえども熱いものは熱い。多量のダメージは覚悟しないといけない。

バトル経験が浅いタキにとって、自分の攻撃を自分で食らうダメージなんて未知数。もしかしたら、それが原因で敗北してしまうかもしれない。

しかし、今はそんなことを言っている場合ではないのは確か。実行するしかない。そんな状況。タキは覚悟を決めた。

「ヒーロ。火の粉を糸に吐くんだ。熱いと思うけど、ヒーロなら丈夫さ！」

「そんな力技……気が狂ってる！ ダメージを負うのはヒーロなんだとぞ。君じゃないんだ！」

「分かつてるよ。でも、僕は信じてる。ヒーロの根性は凄まじいん

だ。ヒーロなら乗り越えてくれる…」

「「これはマジだ！ キャッピー。噛み付くのをやめてその場から離れろ！」

その途端。ヒーロはなんの躊躇もなく火の粉を糸に向けて吐く。キャッピーも急いでその場から離れた。

炎が糸にドンドン燃え移る。次第に燃え上がる糸。燃え上がる炎がヒーロを包み、いつのまにかヒーロの姿は見えなくなった。

この光景に少年とキャッピーは慌てて行動することが出来ない。

「聞こえてるかいヒーロ。動けるかいヒーロ。聞こえるなら聞いてくれ。動けるなら動いてくれ。ヒーロ。体当たりだ！」

慌てて行動できないキャッピーを攻撃するチャンスだと思つたタキ。すかさずヒーロに命令を下す。

「カゲエ…！」

包まれる炎の中から叫ばれるヒーロの鳴き声。そして、炎に包まれた状態でキャッピーに体当たりを仕掛ける。これでは、いくら糸を吐いても体に絡ませることなんて出来ない。

打つ手のないキャッピーは、ヒーロの体当たりをもろに食らひ。炎に包まれた体当たりなので、ダメージは普通の体当たりより大。しかも、体格の小さなキャッピーがダメージを受けたのだから、これ以上は動けない。試合終了である。それと同時に、包まれていた炎も消えた。

試合が終わった途端。タキはヒーローの下に、少年はキャッピーの下へ駆け寄った。

「大丈夫かヒーロー！ 熱い！？ 痛い！？ 苦しい！？」

あんな命令を下したのはタキなのに、物凄く潤んだ瞳になりながらヒーローに語り掛ける。

ヒーローは、心配されなくとも大丈夫だよ。といった態度でタキを見る。しかし、実際はかなり苦しそうである。ようするに、強がっているのだ。

「よかつたあ。あんな命令出してごめんね。じゃあ、ゆっくりとモンスター・ボールの中で休んでね」

タキがヒーローをモンスター・ボールに戻す。

少年の方もキャッピーをモンスター・ボールに戻したようだ。

「負けたあ。まさか、あんな方法で打ち破られるなんて……あんな作戦が実行できるほど、君とヒーローの信頼関係は厚いんだね」

「いやあ。それ程でも。でも、技にも色々な使い方があるんだね。攻撃が強いから強いってわけじゃないんだなあ」

一人がハハハと笑いながら談笑している。

さつきまで初対面だった二人。でも、ポケモンバトルを通じてあれだけ打ち解けている。これはいい光景だ。

そして、話は本題に戻り二ビシティまでの道の話。

なんと、少年が二ビシティまでタキを案内してくれるとこだ。

タキは大いに喜び、少年に「ビシティまで案内してもらおう。すると、案外、ビシティまでの道のりは短く、タキがトキワシティで迷っていた時間の方が長いくらいであった。

「ありがとう。助かつたよ！」

タキが少年にお礼を言つ。

「いえいえ。それにしても、ビシティに行くつて事はやつぱりあれかい。ジムリーダーと戦いに行くのかい？」

「うん。僕の目標はポケモンマスターだからね。ジムリーダーと戦わないとなれないみたいだし」

「そつかあ。でも、気をつけなよ。ビシティのジムリーダー。タケシはかなり強いよ。ポケモンマスターを目指す人は星の数ほどいるけど、ジムリーダーに勝てなくて挫折する人も星の数ほどいるんだ。タケシに勝てなくて諦める人も多いんだよ実際」

少年は真剣に語る。そして、最後に「僕もそうだしね……」と小さく呟いた。

タキはそこに触れようとはしなかった。人には触れていい場所といけない場所があることくらいはタキだつて心得ている。

「そんなここまで教えてくれてありがとう。本当に君と出会えてよかつた。迷ってよかつたあ！ って感じ！」

タキが、少年に向けてスッと手を差し出し、握手のポーズをとる。

「僕も。君とのポケモンバトルすつごい熱かった。絶対。ポケモン

マスターになつてね

少年もタキに向けて手を差し出し、ギュッと熱い握手を交わした。

そして、タキと少年が別れる。

タキは「ビシティのジムリーダー。タケシの下へと。少年は、またトキワの森へ、ポケモンを探しに戻った。

タケシというジムリーダー。

ジムリーダー戦なんて始めてのタキにとつて、どれだけ強いのなんてわかりやしない。タキは、そう考えると次第にワクワクしてきたのであつた。

## 第九回。早くも再会

「エリが一ビシティのジム……」

タキがいるそこは一ビシティのジムの前。見た目はなんともないただの建物だが、そこから流れ出る雰囲気に何か異様なものを感じ、ジムの中に足を踏み入れることが出来ない。

そんな事を感じながらジムの周りをうろうろしているタキ。すると、ジムの中から見覚えのある人物が現れた。

「おっ！ タキじゃないか。何してんだよ。ていうかいいもんゲットしたんだぜ！」

そう。ショウである。

ショウはタキを見るや否や、どこかで買ったのである。鞄の中からグレー色をしたバッヂを取り出し、タキに見せびらかした。

「何つて……！？ それはバッヂじゃないか。もしかしてショウは……」

タキがショウの持つているバッヂを指差してそう言つ。

「いいだろ？ ジムリーダーを倒した証だからな。グレーバッヂつていふらしい」

「へえ……いいなあ。でも、僕も今からタケシに挑戦しに行くんだ！ 僕も、グレーバッヂ手に入れるもんねえ！」

「俺は予言者じゃないから断言はしない。でも、多分無理だ。タキがどんだけ強くなつたか知らないけどな」

ショウがバッヂを手にしたことで闘志が燃え上がつていたタキ。しかし、ショウの余計な一言で、その思いも一気に冷めた。

「なつ……そんな言い方ないだろ！　どうしてそんなこと言えるんだよ！」

今の一言葉に相当イライラしたのか、タキがショウの胸倉を思いつきり掴む。

「そりやあ、戦つてみれば分かるや。そんなことよりよお、『』のジムリーダーは俺が倒したばっかで戦える状態じゃないんだ。今日のところはヒーロだつけ？　とにかく、お前の大変なポケモンを休ませてやつたらどうだ？　どうせ、ポケモンセンターっていう施設も知らないんだろう？」

タキは掴んでいた胸倉をそつと離した。こんなところで怒つても意味はないと思つたからである。どうせなら、スパッとタケシを倒して、ショウをぎゃふんとにさせてやるつと思つたのだ。

それに、ポケモンセンターという施設もタキは知らない。『』はおとなしく話を聞くのが得策なのだ。

ショウがポケモンセンターについてタキに説明する。

ショウの説明によると、ポケモンセンターとは、ポケモンの疲れを、謎の機械によって癒してくれる施設らしく、しかもそこには無償で、職員の人も綺麗らしい。

「とまあ、こんなところだな。タキのことだから、野生のポケモンとか、ポケモントレーナーとかと戦いまくつてんだろう？ 絶対、ヒーロもお疲れだろうから、休ませてやりな。案外疲れてるんだろうぜ、ポケモンも」

「やつぱりヒーロも疲れてるのかな。さつきも接戦のポケモンバトルしたところだし……そうと決まれば早速行かなきゃ！ 教えてくれてありがと！」

タキは、精一杯の笑顔でショウにそう言い、手を振ってポケモンセンターに向けて走り出そうとした。たつきがで胸倉を掴むほど怒っていたのが嘘のようだ……

「おい！ ちょっと待て！」

ショウが慌ててタキを止める。何か渡したいものがあるみたいだ。

「ほら。ポケモンセンターまでの地図。どうせ、何処かも分からず探し回るんだろう？ これ持つてけよ。便利だろ？」

「あ……ありがと！ やっぱりショウはいい奴だ！」

タキはショウの手をギュッと握り、ブンブン振りながらそいつ。

ショウは、タキが自分の手を思いつきり握るせいでの、ポケモンセンターまでの道のりを書いた紙がクシャクシャになっているのに気づき、バツとタキの手を振り払い、クシャクシャになった紙を渡した。

「せっかく俺が書いた紙がクシャクシャになっちゃったでしょうが！……まあいいや。それと、もう一つ言いたい事がある」

そう言つと、恥ずかしそうにタキから目を逸らしたショウ。そして、ボソッと言葉を発し始めた。

「さっき、俺がタキにジムリーダーに勝てないって言つたけど、別に一生勝てないって言つてるわけじゃないんだぜ。俺はタキの諦めない心と努力する心は認めてるんだ。最終的には勝つだろうと思う。そこんところは誤解しないでくれな……」

ショウが恥ずかしそうに言つた台詞に対し、タキは元気よく「うん！」と返す。

「うん！」とこう言葉だけで気持ちを伝わるものだ。ショウには、この「うん！」だけで、許してくれたんだだと感じた。

そして、ショウも一ビシティを離れ、次の町へと移動するようだ。

「じゃあ、そろそろ行くわ。俺の後を見失わず追つてこいよ。そんなで、最終的には一人でポケモンマスター決定戦やろうな」

「絶対見失つたりしないよ。それどころか追い抜いてやるんだもんね！　じゃあ、また何処かで会おうね」

こうして一人は別れた。

一人の再会は早く、そして短かつた。

また、どこかで出合えるといいなとしみじみと思いながら、ショウに貰ったポケモンセンターへの道のりのが書かれた紙を頬りに、ポケモンセンターへ向けて足を進める。

## 第十回 初めてのジム戦

ショウから貰つた地図を頼りに進むと、あつという間にポケモンセンターに着いたタキ。

中に入ったそこは、タキのいた世界でいう病院のようなところ。そこに看護服を着た女性が一人受け付けにいた。早速、ヒーローを休ませるため、看護婦の下へ向かう。

これは余談であるが、確かに綺麗な人だなあとタキは心の中で思つた。

タキは、ヒーローを休ませるため看護婦に話しかける。

すると、モンスター・ボールを出してくださいと言わされたので、言われたとおりにモンスター・ボールを出し、看護婦に渡した。モンスター・ボールを受け取った看護婦が、モンスター・ボールを謎の機械の中に入れ、どこかへ持つていく。

少しの間、待つていて下さいと言われたタキであるが、特にすることがないので、自分が元々いた世界の事を考える。

親は心配していらないだろうか。もしかしたら探し回っているんじゃないだろうか。色々考える。

さらにエスカレートしてきて、もしかしたらここは死後の世界なんじやないだろうか。そうじゃなかつたら夢？ 色々な説が頭に浮かぶ。

だが、こんなことをどれだけ考えても埒が明かない。そう思つたタキは、自分の大切な人たちに自分の声が届けばいいなと思つた。

僕は大丈夫だから心配しないでね。って……

考え方をしていると瞬く間に時は流れ。ふと気づくと、タキは看護婦に名前を呼ばれていた。ヒーロの疲れがとれたのだ。

タキは、看護婦からモンスター ボールを受け取り、ポケモンセンターを出る。

当然、向かう先はニビシティのジム。タケシの下だ。  
ショウに言われた事を思いだし、気合を入れながらニビシティのジムのドアを開ける。

ジムに入ったそこは真っ暗で何も見えない。  
しばらく何をしていいかわからずキヨロキヨロしていると、中から人の声が聞こえ、明かりがついた。

そこにいたのは、自分と同じくらいの年であらう男で、石段の上に座った状態でこちらを見ている。  
ニビシティの見た感じと同じで、ここも石が多いなとタキは思つた。

「誰だ」

石段の上に座っている男がタキに話しかける。

「誰だつて……挑戦しに来たトレーナーに決まっているじゃない！  
そんなことより、人に誰だと聞くより先にやることがあるんじやない？」

タキはツッコんだ後、挑発するように言葉を投げかけた。

「確かに……それは失礼した。俺はタケシ。」」「ビジムのジムリーダーだ。こんなところで話すのもなんだろ。早速、始めようか」

タケシはそう言つと、ジムバトル用の特別バトルフィールドへ移動する。

特別フィールドは、ジムにあわせてなのか、地形が岩で「ゴジゴジ」としている。

タキも後ろを着いていき、いよいよ、初めてのジムリーダー戦が始まろうとしている。

「それではジム戦を始める。使用ポケモンは一体。ポケモン交代は可だ。いいな」

「あ……あの。僕、手持ちポケモン一体しかいないんだけど、駄目……？」アハハ……アハツ……」

タキは笑つてごまかそうとする。

「…………よくそれで戦おうという気になつたな……仕方ない。今回は一体で認めよう。使用ポケモンは一体だ」

「ありがと。いい人だね！」

タキは、ホッと胸を撫で下ろし、元気よくそう言つた。

「お世辞はいい。では行くぞ……行け。イワーク！」

「緊張するなあ……でも、頑張るぞ！ 行くんだ。ヒーロー！」

二人ともポケモンを出した。この瞬間。タキの初めてのジムリーダー戦が始まる。

しかし……

「な……何この大きさ。大きいなんてもんじゃない。無差別級過ぎるよ……」

そう。イワークは大きかった。いや、大きすぎた。ポケモン図鑑で調べたところ、体長8・8m。体重210kg。それに比べ、ヒーロは0・6m。8・5kg。

イワークの田には、ヒーロはミクロマンくらいの大きさに見えていることだろう。ヒーロの田には、どこまでも続いているかな大きな壁に見えていることだろう。それくらいの体格差があるのだ。

バトルの方も呆氣ないものであった。

イワークの圧倒的な体格に恐怖してしまったタキとヒーロは、イワークの尻尾を振り回す攻撃をもろに受け、一撃でダウンしてしまったのだ。

タキはバトルに負けた。そう実感したときには膝が地に落ちていた。

「あ……負けちゃった……」

言葉に出すと、更に実感してしまつもので、自然と涙が瞳からこぼれ落ちる。

「気にすることはない。負けて成長する事だつてある。自分が成長

したと感じたらまたいつでもここ。俺は逃げ出したりなんかしない

タケシは、膝を落として涙を流しているタキの肩にポンと手を置きそう言つた。

タキは「クツ」と頷き、黙つてニビジムを出た。

そして、ヒーローを休ませるために、またポケモンセンターへ行き、看護婦さんにヒーローを預けた。

「僕、浮かれてたのかな。ヒーローとの友情パワー。そして、ヒーローの勇気と根性があれば絶対負けないって思つてた。そうだよ。浮かれてたんだよ僕。この世界にはまだまだ凄いポケモンがたくさんいる。あんな規格外のポケモンだって存在するんだ。特訓しないと。もう、負けないよつに、ヒーローを傷つかせないために」

タキは、ポケモンセンターにいる人達に変な目で見られているのも気にせず、独り言にしては少し大きな声で、そう言葉を発した。

タキが次に行つ行動は決まった。

そう思つたときの行動は早いもので、ヒーローが回復した途端、ニビシティの外にある草むらでポケモンを探し、特訓始めたのであった。

## 第十五回。特訓の末に

特訓を始めるために草むらでポケモンを探すタキであるが、ただ無差別にポケモンを探すわけではない。田標は打倒イワーク。硬そで大きなポケモンを探す。

しかし、中々お田道でのポケモンは見つからない。  
もうどれくらい草むらを歩き回つただろう。タキの体力も次第に奪われてへとへとに。

なので、一度休もうと思い、近くにあつた石の上に座つた。

石の上で一息ついているタキ。

しかし、突然、風景が揺れたような感じがして慌てる。

その感じは何度も何度も繰り返された。タキは何度も繰り返されている間に気がつく。自分が座っている石が揺れていのだと。

タキは素早く立ち上がり、石をジッと見つめる。すると、タキが座っていた石が突然浮いた。浮いた石が地面深くに沈んでいたときは気がつかなかつたが、浮いた石には手も生えているし目もある。タキは直感した。ここつはポケモンだと。すかさずポケモン図鑑を開き調べる。

そのポケモンはイシツブテというがんせきポケモン。身長0・4m。重さ20・0kgのこと。

「がんせきポケモンにしては小粒だよねえ……でも、ここつはとても硬そうだぞ！」

これは神様からの贈り物だらうか。偶然にも見つけたイシツブテ。

これはタキにとつてとても好都合なポケモンだつた。

体格は大きくはないがとても硬そうなポケモン。これは特訓相手に丁度いい。

これを逃す手はないと思つたタキが急いでヒーローをだす。

「ヒーロー、全力でイシツブテをひつかくんだ！」

先手必勝ともいわなればかりに、全力でイシツブテに向かつてひつかくを繰り出す。

「カ……カゲエ！？」

しかし、ひつかくがイシツブテにまともにヒットしたはずなのに痛がつているのはヒーロー。

イシツブテはそんなヒーローを田をパチパチさせながら見ている。

だが、それから五秒ほど。イシツブテは気がついた。自分は攻撃されたのだと。

そう思うとなんだかイライラしてきたイシツブテは、右手をグルグル振り回しながら、自滅して痛がつているヒーローに向かつて突進する。

「やつぱりひつかくは効かないか……ヒーロー。イシツブテの攻撃はかわしちゃ駄目だ。苦しいかもしけないけど、これもイワークの攻撃を受けきるための修行だと思って全部受け止めて！」

ヒーローは、少し無茶だなと思いつつ「カ…カゲエ……」と無理やり自分の中で納得させて了解する。

その瞬間だ。イシツブテが、グルグル振り回していた勢いで、右

ストレートをヒーローに繰り出した。

当然、ヒーローはかわさない。だが、もうこの受けるのはまずいので手でガードはした。それでもヒーローは地に倒れこんだ。それほどイシツブテのパンチは強烈。

イシツブテも倒れこんだヒーローを見て「ツ～ブテ～」と得意げに鳴いてくる。

「立て。立つんだヒーロー！ これで倒れてたら僕達は一生イワーカに勝つことは出来ない。厳しいかもしない。苦しいかもしない。でも、立ち上がらないことには何も始まらないんだ！」

タキも必死に声をかける。

その声に触発されてか、分かつてゐよといつた感じで立ち上がる。その後も一発二発とイシツブテのパンチを受け続ける。でも立ちあがる。

もう、体力も限かるくらいのダメージは受けているはずだ。でもヒーローはギブアップするとはなかつた。

これはもう、根性といつ大きな力に支えられているとしか言ひようがない。

それと同時にイシツブテの怒りボルテージもMAXまで上がつていた。

このイシツブテは自分のパンチに相当自信があるらしく、ヒーローが立ち続けることに不満があるらしい。

そのせいなのか、イシツブテはこのパンチを最後のパンチにしようと考へる。自分が持てる最高のパンチをお見舞いしてやろうと思つたのだ。

つまり、イシツブテはヒーローを一体の強敵として認めた。自分の右手を最高速で回転させ「ツーブテーーー」と叫ぶ。

イシツブテの行動とフラフラしているヒーローを見て、もつ為す術はないのかと思ったタキ。しかし、イシツブテが「ツーブテーーー！」と叫んだのを聞いた瞬間。タキは閃いた。

「ヒーロー、叫んでいる口の中に手を突っ込んで投げぬけろー。」

タキの声が届いたヒーローは、フラフラな手で「ツーブテーーー」と叫んでいるイシツブテの口の中に手を突っ込み、口の間をギュッと掴んだ。

これにはイシツブテも驚いた。しかし、そんなことはもはや関係なかった。

イシツブテが行う行動は、ただ自分が持つ最高のパンチをヒーローにお見舞いするだけなのだ。

イシツブテはヒーローに掴まれた口の間なんて気にせずに、右ストレートをヒーローの腹にぶち込む。

右ストレートが当たった瞬間。イシツブテは勝利を確信した。だがおかしい。自分の見ている世界が回っていることに気づく。

そして、気づいたそのときには、イシツブテの頭は既に地面に打ち付けられていた。

そう。ヒーローは、イシツブテの最高のパンチを受けきり、更に2000kともあるイシツブテを投げぬいたのだ。

もう、立てるはずなんてない。動くことすら出来ない。ヒーローは根性だけで絶対不利な状況を切り抜けたのだ。

きつと、イワーク戦のときは、あの威圧感と体格に心の底から怯えていたから尻尾攻撃一撃で葬り去られたのだろう。この戦いを見ているとそんな感じがする。

地に倒れこんだヒーローに近づくタキ。

しかし、ヒーローは気絶していた。あれだけの攻撃を受けたのだから仕方ない。体力は既に限界を超えていたのだから。

「無理な命令してごめんね。今からポケモンセンターで疲れを癒してもらいうからね。それまで痛み……我慢してね」

タキがそう言つてヒーローをモンスター・ボールに戻す。

そして、ヒーローとギリギリの勝負をしたイシツブテの下にも近づく。

「ありがとうイシツブテ。本当に強かった。イシツブテのお陰でイワーク戦の案がうがんだんだ。本当、イシツブテと戦えてよかったです。いきなり攻撃しちゃってごめんね。だからといつちゃなんだけどイシツブテも一緒にポケモンセンターに行こう! それが僕に出来る最大のお礼だよ!」

タキがイシツブテにそう言つて、イシツブテのほうを向いて、イシツブテを持ち上げようとした。

だがそのとき、タキはなんだかズボンの裾に違和感を感じた。何かに掴まれているような感じがしたのだ。なので、ズボンの裾を見てみると、なんとイシツブテがタキのズボンの裾を掴んでいるではないか。

「ツ……ツブテエ……」

「えっ！ なんでイシツブテが僕のズボンの裾を！ いきなり攻撃なんてしちゃったもんね……やっぱり僕達恨まれてるのかなあなんて……アハッ。アハハッ……」

タキが苦笑いでイシツブテの方を見る。

そんなタキを見たイシツブテは、裾を掴んでいる手を離し、違うとでもいう様に手を振る。

そして、タキに手をパーにして差し出した。匕首やら握手を求めているようである。

この行動でタキは全てを理解した。

そう。イシツブテは……

「も……もしかして仲間になってくれるのー？」

「ツブテー！」

そうだとでもこいつよつてイシツブテが鳴く。

「やつやつたあー！ イシツブテみたいな心強いポケモンを仲間に出来て嬉しいなー！ やうだ。まずは名前を決めないと。うん」とねえ

「……」

タキは名前を考えた。

すると即座に浮かんだのが某RPGゲームの、あの厄介な奴であった。

そして、あの厄介な奴を仲間にしたときの名前はロッキー。もうこれで決まりである。

「ロッキー！ イシツブテの名前はロッキー！ それでこの後は確

かモンスター・ボールでゲットするんだよね。ちょっと待つてね！

……あつ、そうだ。僕はモンスター・ボールを持ってないんだ」

タキにはモンスター・ボールはない。

「でも、モンスター・ボールはお店で買えるんだよね。それじゃ早速買つてくるからこ」で……そうだ。お金も持つてないんだ……」

そう。タキにはお金もない。

「『めんロツキー。僕、無一文でモンスター・ボールを買つお金もないんだ。だから仲間になつてくれるなら、しばらく僕の後ろを置いてくれないかな……疲れるだらうげじごめんね』

タキが手を合わせて謝る。

それを見たロツキーは、精一杯右手を前に突き出し、力一杯親指を立ててOKポーズをする。

ロツキーはかなり熱い性格のようだ。タキといいヒーロとロツキーといい、なんとも暑苦しいメンバーが揃つたものである。

「ありがとう！ よろしくねロツキー！ ロツキーもすぐポケモンセンターで疲れを癒してもらわないと。わあ。僕の腕に乗つかつての周りを元気良く動き回つた。

ロツキーの方に両手を差し出すタキ。

しかし、ロツキーは人差し指をチツチツと揺らし、自分で草むらの周りを元気良く動き回つた。

自分で動けるから心配ないと言いたいよつて見える。

「アハハッ！ 元気一杯だねロッキーは！ ジャあ、後ろから着いてきてね。それじゃポケモンセンターに向けて出発だあ！」

初めて仲間ポケモンが出来て心の底から嬉しく思うタキ。  
初めての仲間。名前はロッキー。

嬉しさの余り鼻歌を歌いながらポケモンセンターに着いたタキ。タキはポケモンセンターでポケモンを癒し、ニビジムのジムリー。タケシに再挑戦するため、ニビジムへ向かう。

## 第十一回。リベンジ。タキvsタケシ！

タキが改めて「ビジムの扉を開ける。

「再戦に来ました！ どうぞよろしくお願ひします！」

タキが相変わらず真つ暗な「ビジムの中でそう呟く。  
すると、前と同じようにタケシの声が聞こえ明かりがついた。

そこには、やはり石段の上に座るタケシが。石段の上がそんなに  
落ち着くのだらつか……

「昨日の今日でもう再戦に来たのか……たった一日で強くなつたと  
は思えんが、こちらもジムリーダーの身として相手しないわけには  
いかない。それに、新たなポケモンも捕まえてきたようだしな」

そのポケモンとは当然、ロッキーのことである。未だにモンスター  
ボールを買えないため、モンスター・ボールの中に入ることは出来  
ず、タキと共に行動をしている。

そして、あの地形がゴツゴツしているバトルフィールドに移動し  
た。

今回は、正式にタキが一体のポケモンを持しているため、二対  
一。ポケモン交代ありの正式な「ビジムバトル」が行われる。

「それでは始めようか。行け。イシツブテ！」

「行くんだロッキー！」

両者の一体感。それはどちらも同じポケモン。こつなれば話は早い。どちらのイシップテの方が強いのか。これしかない。同じポケモン同士のバトルは、トレーナーとしての質を見極めるのに最適なかもしない。

「ほう。そちらもイシップテか。それはいい。イシップテ同士の格の違いを見せつけてやろう！ イシップテ。殴る攻撃！」

タケシのイシップテがゆっくりとロッキーに近づき、思いつきり振りかぶって殴ろうとする。

しかし、ロッキーは右腕をグルグル振り回しているだけで一歩も動こうとはしない。

これに対し、タキは一つも避けるといふ命令をしようとはしない。逆に、ワクワクした顔つきでロッキーを見守っているくらいだ。

「俺のイシップテの打撃を避けようともしないとはいい根性だ！ イシップテ。お前の打撃力の怖さ。思い知らせてやれ」

タケシのイシップテがロッキーに渾身の右ストレートを決める。しかし、ロッキーは効いていないのか、相変わらず右腕をグルグル振り回している。

「効いていない……？ そんなはずはない。もう一発だ。倒れるまで殴つてやれ！」

一発。二発。タケシのイシップテは、ロッキーに右ストレートを入れ続ける。

しかし、ロッキーは相変わらず右腕を振り回すのをやめようと

しない。

そして四発目。ここで状況が変わった。ロッキーがタケシのイシツブテの右ストレートをかわしたのだ。タケシのイシツブテは、ロッキーが自分のパンチで倒れないことにムキになっていた。

恐らく、ムキになつてパンチが大振りになつてしまつたので、ロッキーにかわされたのだろう。

かわしたロッキーが、逆にタケシのイシツブテに右ストレートをお見舞いする。  
あれだけ腕をグルグル振り回していたのだ。かなりの右ストレートだろ？

その証拠に、タケシのイシツブテはもう意識がない。タケシのイシツブテの右ストレート三発を一発で、いや、それ以上の力でお返ししたのだ。

「イ……イシツブテ……よくやつた。戻れ……なんてことだ。俺のイシツブテが一撃で……一つ聞きたい。それだけのイシツブテをどこで捕まえたんだ？」

「草むらで偶然見つけたんだ。そして、ヒーロとの死闘の末、仲間になつてくれたんだ。どう？ 最高でしょ。僕のロッキー」

笑顔でそう言つタキに対し、タケシが初めて笑顔を見せた。

「ああ。最高のイシツブテだ。さつき、強くなつたとは思えんなどといつてすまなかつた。認めよつ。君は俺のジム戦の相手として十分なトレーナーだ。俺も全力を尽くす。行け。イワーク！ 全力で

行くぞー！」

元気良くモンスター・ボールからイワークを出すタケシ。

「おっと言いたれていた。ポケモンを交代するか！？」

「『』のままでいいよ。ロッキーはまだ完全燃焼してないからね…」

タキはロッキーをかえようとはしなかった。

この行動に、ロッキーも両方の手で親指を立てて、最高の選択だとでもいうような感じで張り切っている。

「では、行くぞイワーク。まずは、イシツブテに思いつきり殴られろ。気合を入れないとな

『』の言葉に、親指を立てて張り切っていたロッキーがピクツとなりイワークの方を振り向いた。どうやら、殴られるという言葉にイワッとしたようである。

「ツーブティー！」

ロッキーが全速力で右腕を振り回す。

そして、イワークに近づき右ストレートを思いっきり打ち噛ました。

右ストレートを当てるまでは、自分よりも何倍も体格が大きなイワークに恐れることなく立ち向かっていたロッキー。

しかし、右ストレートを当てたとき、ロッキーは力の差を感じた。自分のパンチじゃイワークを打ち碎くことは出来ないと感じたのだ。

だが、そう感じたときにはもつ、イワークの尻尾がロッキーにヒットしていた。

ロッキーの意識はもう、遠い世界へと……

「ロ……ロッキー！」

「いいぞ。最高のパンチだつた。気合も最高まで高まつたぞ。そのイシツブテは最高だ！ 反射的にイワークが攻撃をしてしまうほど のパンチなどそうない。大事に育てればまだまだ伸びる。本当に楽しい戦いだ！ さあ、一体目。かかつて来い！」

タケシは、自分の中にある興奮が抑えきれないといった感じでそう叫んだ。

タキもロッキーをフィールド外に運んだ後、興奮を抑えきれない感じで「行け。ヒーロー！」と叫んだ。

ヒーローもモンスター・ボールの中から、戦いを見ていたかのようにテンションが熱い。

早く戦いたいという声が聞こえてきそうなくらいである。

「やはりヒトカゲか。だが、どうしたものか、前のようにイワークに対する恐怖がないようだ。ヒトカゲも一日の内に成長したものだな！」

そう言葉を受けたタキは、無邪気な笑顔をタケシにぶつけた。

「うん！ もう前みたいに体格の差なんかで怖がつたりはしない。僕達にはどれだけ大きな相手でもぶつかっていくしか勝つ道はないんだ！ そうじゃなきゃ、相手にも悪いしね。だから安心して。こ

のテンションを削ぐような真似はしない。それどころか、もつとも  
つと最高のテンションになるよ。それは、この空気が物語ってる!」

「それは楽しみだ。イワーク。絶対にこの戦いに勝つぞ。これはジ  
ムリーダーとしてではない。一人のトレーナーとしてだ!」

「それは僕だって同じ。ヒーロ。勝つのは僕達だ!」

こうして、異様に熱いテンションの中、イワーク対ヒーロの試合  
が始まろうとしている。

## 第十二回。小さな巨人達

「イワーク！ まずは小手調べに石を吐く」

イワークの口から多量の石が飛び出し、ヒーローを襲う。

それをヒーローが軽快にかわす。前のような怖さはもうない。これくらいの攻撃をかわすことなんて楽勝である。

「ヒーロー、こっちも様子を見よう。イワークに向けて火の粉！」

お返しといわんばかりにヒーローがイワークの体に火の粉をぶつける。

しかし、イワークは平然としており、ダメージを受けた様子はない。

「どうした！ その程度の攻撃。俺のイワークには全く受け付けるぞ！」

「どうなあって思つてたよ。こいつでなくっちゃ……面白くない！」

「そうだ。そうでなくっちゃ面白くない。これからもっと面白くてやるつ。イワーク。尻尾攻撃だ！」

この尻尾攻撃。名前は安易で弱そうな技に思えるが、実際はかなり手強い攻撃だ。

体長8.8m。体重210kgから繰り出される尻尾攻撃。ビックリするほど長い尻尾、そして体格に似合わない早さがある尻尾

攻撃をかわすのは容易ではない。高いジャンプ力がない限り不可能に近いものがある。なら答えは一つ。受けきるしかない。だが、これも容易ではない。体重210kgの攻撃の重さは言葉では言い表せないほど強烈に違いない。だが、受けきるしかない。受けきらないと勝つ道は開けない。

ヒーローがイワークの尻尾攻撃を受ける。

その威力は予想以上に強烈だった。攻撃を受けたヒーローは10mほど離れた岩に激突し、地に倒れた。

「どうした。結局、イワークの尻尾攻撃一発で沈むのか！ 立て。立つてもっと俺を熱くさせる。君達の熱はこんなもんじやないはずだろ？」

「こんな台詞はジムリーダーが言つべき台詞ではない。ジムリーダーは挑戦してくるトレーナーを倒すのが役目であり、決して熱いバトルをすることが役目ではない。

しかし、タケシは立てと言つた。トレーナーを倒すのが役目のジムリーダーが、倒れているポケモンに対し立てと言つたのだ。

もう、タケシはジムリーダーとしてのタケシではない。一人のトレーナーとしてのタケシ……タケシ本来の姿でタキと戦つている。

この感覚はタキにも十分に伝わっていた。だからここで負けるわけにはいかないと心の底から思つ。

「立つんだヒーロー！ 立たないと熱い時間が相手の手によつて終わっちゃう。時間に終わりがあることは分かつてるよ。でも、それを終わらせるのはタケシじゃない。僕達だ！」

「力……カゲエ————！」

精一杯の大声で鳴き、気合を入れるヒーロ。そしてフラフラながら立ち上がって見せた。

この瞬間。ヒーロの体は210kgから繰り出される尻尾攻撃を超えた。

「そうだ。それでこそ君達だ。ではもう一発いくぞ」

イワークがまた尻尾を振る体勢をとる。

そして、ヒーロに向けて尻尾攻撃を繰り出す。

だが、尻尾を振る途中。体に激痛が走る。

そう。今になってあのロッキーのパンチが効いてきたのだ。そのせいで動きが少し鈍る。

その瞬間をヒーロは見逃さない。

フラフラながらも力を振り絞り、イワークの尻尾に飛び乗る。そして、長い長いイワークの体を駆け抜け、頭の上に到達。そのまま、イワークと目を合わせたいんじゃないかというような角度で思いっきり飛び降りる。

「何をしようと思っているのか知らんが、飛び降りで試合が決着するのはつまらん。最後はイワークの技で試合を締めくくつてやろう！」イワーク。石を吐く！

イワークは口を大きく開け、石を吐く体勢をとる。

「それを……それを待つてた！ ヒーロ。イワークの口目掛けて火の粉！」

「カゲエーー！」

ヒーロの口からイワークの口の中目掛けて火の粉が放たれる。その火の粉はイワークの口の中に入り込み、内から燃やす。

これにはイワークも苦しむ。いくら石だからといってイワークだつて一体のポケモン。一体の生物。外は頑丈な石の壁に守られていたとしても、中も同じように壁に守られているとは限らない。

しかし、8・8mの高さから落ちたヒーロだつて無事ではない。ただでさえ、210kgの尻尾攻撃を受けてフラフラだつたのだ。もうピクリとも動かない。

その間も、イワークの体では火の粉が駆け巡る。しばらくの間、もがき苦しんだイワーク。だが、体力だつて限界がある。体の中を駆け巡る痛みに耐え切れず、大きな体が地に沈む。

「イワーク……」

「ヒーロ……」

タキとタケシが、ピクリとも動かないヒーロとイワークを見つめる。

すると、タケシが何か気づいたように「あつ」と声を上げる。

「一つ聞こう。君にはイワークの大きさはどう映る？ 別に深い意味はない。大きさの印象だけを言ってみてくれ」

いきなり、変といつては失礼だが、変な質問をされたタキは、少

し遠慮気味に「大きい……ポケモン」と答える。

「じゃあ、ヒーロはどう映る?」

「小さいポケモン。とこつかこれ何の質問?」

流石に疑問を口にするタキ。

「よく見てみれば分かる。君の大事なヒーロをね」

そう言われたタキはヒーロに近づきジックと見つめる。すると、ある事に気がついた。

「手を……手を上げてる……」

そう。ヒーロは手を上げていた。0・6mといふ小さな体長なので遠くから見れば気づかないだろう。

ヒーロはもう立つ氣力はなかった。しかし、負けたくない。これは一種の抵抗だ。自分はまだ戦える。意識があるとこさやかな抵抗。

「やうだ。どうやら俺の負けのようだな。俺のイワークにはもう立つ力も体を動かす力もない。つまり意識はない。でも、ヒーロには立つ力はなくとも体を動かし戦う意識はある。この差はとても大きいことだ。俺には君のヒーロがとても大きく見えるよ。どうやら小さな巨人は俺のイワークよりも大きな存在になってしまったようだ

タケシが満足気にそう言つ。どうやら完全燃焼したようだ。

「もう一体忘れてるよ。この戦いはヒーロだけの戦いじゃなかった」

タキが、勢いよく指差した先は倒れているロッキー。

「そう。ロッキーのパンチがなければイワークの動きは鈍つていなかつたかもしない。」

これは、ヒーロの勝利ではない。ヒーロとロッキーの勝利なのだ。

「そうだな。訂正しよう。小さな巨人達だ」

タケシは少し笑いながら即座に訂正した。

そして、ポケットから見覚えのあるグレー色をしたバッヂを取り出した。

「俺に勝った証のグレーバッヂだ。本当。今日のバトルは熱かったぞ。そして最高だった。それもこれも小さな巨人達。そして、君のおかげだな」

タケシがタキにグレーバッヂを渡し、握手をするために手を差し出す。

「僕も最高だったよ。最初のジム戦の相手がタケシでよかったです。だって、ジム戦がこんなに熱く最高なものだと思うと、もう次のジム戦が待ち遠しい！」

タキも勢いよく喜んで手を差し出し握手を交わした。

「それはいい傾向だ。では、次のジムがある場所を教えておこう。そこはハナダシティという。水ポケモン操るジムリーダーだから君には相性が悪いだろうな。そこまでの道のりも教えておいてやる。ちょっと待っている」

そう言つと、紙とペンを持つてきたタケシが、ハナダシティまでの道のりを描き、それをタキに渡した。

「相性が悪くても君ならきっと乗り越えていくだろう。俺にはそんな気がしてならない。これからも頑張つていくんだぞ！」

「うん。ありがとう。タケシもジムリーダーとして色々なトレーナーと熱いバトルを繰り広げてね！」

二人はもう一度握手を交わし、タキがニギジムを去り立つとする。すると、タケシが慌てたようにタキを呼び止めた。

「あまりのバトルに忘れていた。戦利品だ持つていけ！」

タケシがタキに向かつて、キラキラと光る何かを投げた。タキが受け取つたそれには、大きく500と書いてある丸い物だつた。これには見覚えがある。

「これ……何？」

薄々感づいているものの、一応、質問する。

「何を言つてこる。500円だ。知らないわけないだろ？」「

「ハハハ……いきなりだから忘れてたよ。それでなんで500円を僕に？」

タキは心の中で、通貨単位も自分達の住んでいる場所と同じなんかとツッコんだ。これでは動物とポケモンを入れ替わつただけで、それ以外は何も変わつたところがないことになる。

タキの中で、更にこの世界に対する謎が深まつた瞬間であった。

「だから戦利品だ。ジムリーダーに打ち勝つんだ。それくらいの『褒美も必要だろ？』

「確かに欲しいかも！　ありがとう。ありがたく受け取ります！」

それは欲しいだろ？　この世界で初めてお金を手に入れられるチャンスなのだから。

こうしてタケシとの戦いを終えたタキ。

タキは、ポケモンセンターでポケモンの傷を癒し、ショップでモンスター・ボールを購入し、ロッキーをモンスター・ボールの中に入れた。

そうしていると時間はもう夜。どこか休めるところはないかと歩いていると宿屋を発見。

早速、宿屋の中に入りスヤスヤと眠りについた。

そのときにはもう残金は200円。後、宿屋一回分の金しかないことに気づかずスヤスヤ眠るタキの夢は、当然、ポケモンの夢であった。

## 第十四回。真つ暗闇オツキミ山

楽しいポケモンの夢を見てぐっすりと眠れたタキ。

当然、気分も快調で、早速、タケシにハナダシティまでの道のりを書いてもらつた紙を頬りに出発しようと考へる。

タケシの書いた紙を見たところ、ハナダシティに行くには、3番道路を抜け、オツキミ山という場所を越えないとハナダシティまで行けないようだ。

だが、タキはワクワクしていた。オツキミ山はどんなポケモンが出来るのだろうと興味津々なのだ。

タキは宿屋を出て、オツキミ山へ向けて出発する。

タキは軽快なステップで3番道路を抜け、オツキミ山に到着。中に入ると、とても真つ暗。とても行動できるよくな状態ではない。

タキは、真つ暗なオツキミ山の中。何か策はないかと考える。すると名案がある。

そう。ヒーロの尻尾の炎である。あの炎を明かりがわりにすれば、きっとオツキミ山の中も見えることだらう。

それは見事成功。ヒーロの明かりがあるのでいいと進むことが出来た。

途中、ズバットというポケモンも発見したが、じつちが攻撃しない限り襲つてくることはないらしく、比較的安全にオツキミ山を抜けられそうだ。

そんなこよもあつて楽々ムードのタキは、ハナダシティへ早く行きたい一心からか、急いでオツキミ山を抜けようとしていた。

急いでいたので、前も見ず走りながら進んでいたこともあつたのであらう。人と勢いよくぶつかってしまった。

「い……痛てて……あつ、『めんなさい』大丈夫ですか！？」

タキはすぐに、自分の不注意のせいでもぶつかってしまった人のところに向かい、謝った。

「大丈夫。気にしないで。どこも怪我とかしてないから」

タキがぶつかった人はどうやら女性のようだ。見たところタキよりも少し年上の女性に見える。

「よかつたあ……」めんね。ちょっと急いでたんだ

「不注意なんて誰にでもあるもの。全然気にしてない。それより、いいポケモン持ってるね。その炎があれば確かにほしゃきたくなる気持ちも分かるわ。私なんてここまで手探りで来て、もうくたくたでもう一回もここに来てるけど、全然慣れない」

女性がウフフと笑いながら笑いつ。

女性がそう言つた後、タキが何かを思いついたように「あつー」と叫ぶ。

「そうだ！ オツキミ山の出口まで一緒に行かない！？ 僕のヒー  
ロがいれば手探りでくたくたになる心配もないと思うんだ！」

タキが、ぶつかつたお詫びこと女性を誘つ。

女性は、いきなりの誘いに少し考えながらも答えをだしたようだ。

「せうまつてくれるなら、お皿葉にせうわせうかな

「じゃあ、早速行こう。あつ、一応自己紹介しどくね。タキって  
言つんだ。よろしく。」

タキが女性に向けて手を差し出す。

「私はユリカ。じゅりかよろしく。

ユリカが握手しながらそつまつ。

「ひして、ポケモンの世界で初めて、少しの間であるが共に行動  
する仲間が出来た。

タキは、初めての仲間であるユリカと共に、オツキ＝山の出口へ  
と向かう。

## 第十五回。早くハナダシティに行きたいのに……

尻尾の明かりに照らされながらオツキミ山の出口を手指す一人。その途中、オツキミ山とは思えないほど明るい、そして人だかりが出来ているほど活気付いている通路を発見した。

そこへ向かつた二人は、なぜ明るく、人だかりが出来るほど活気付いている理由がすぐに分かつた。

なんと、松明を両手に持つた男と、男の手持ちポケモンらしきポケモンが、オツキミ山の通路を遮るように座っているのだ。

何事かと、近くにいる人に聞いてみると、遮るように座っている男が、意味不明なことを口走り、通らせてくれないらしい。

無理やり通ろうとしても、男の持つポケモンが強く、通り抜ける事が出来ないそうなのだ。

この話を聞き、人一倍行動力があるタキは、男をどかそと、話し合いを試みる。

すると、男は静かにタキを睨み、面倒くさそうに口を開いた。

「お前はなんだ？ お前の連れらしき女にかっこいいところを見せに来たのかい？ それならただうざいだけだ。この場から立ち去った方がいい」

淡々とそういう語る男に少しイララきたタキ。  
自然と口調も激しくなつてくる。

「なつ……そんなわけないだろ！ みんながここを通れなくて困つてるとかせに来たんだよ。普通分かるでしょ……そういうこと

だから、ここをどこでよ。通行の邪魔だからさ」

少し怒り口調のタキに対し、男は、見下したような笑いを漏らす。

「邪魔？ これは親切だ。ここから先はレベルが違う。お前達の自信を失わせたくないから俺が審査してやつてるのさ。俺に勝てないようじやこの先は到底越えられる壁じやない。一度、ここを通った俺が言つてるんだ。間違いない。もう一度言おう。これは親切」

ついにカチンときたタキ。そんなことを言つなら自分とポケモンバトルをやろうと持ちかける。男もやる気のようで空氣はもうバトル寸前である。

しかし、それをユリカが止める。

そして、自分が戦うといって、自分の手持ちポケモンを場に出しだ。

「駄目。タキは怒りに身を任せて戦いを挑んでいるわ。それじゃ、誰も救われない。ここは冷静に分からせてやるのが一番。自分が無力だつてこと。でも、発展途上の存在だつてこと」

「ふつ……人の努力も知らないでよく言つよ。まあいい。そつちの男に味あわせてやりたかったが、ウォーミングアップも大切だからな。やつてやるよ。それで嘆くんだ。自分が無力だということを。そして見上げるんだ。ここから先の壁の高さをね」

いつのまにか、コリカと男の言い争いになつており話しに入ることが出来ないタキ。ここはバトルを観戦することに決め、出そうとしていたヒーローをポケットに戻す。

そして、ポケモン図鑑を取り出し、見たこともない双方のポケモ

ンを調べる。

コリカが出したポケモンは、ウツドンといつ名のハエとりポケモン。体長、1・0m。体重、6・4kg

男のポケモンは、ドガースといつ名のぞくガスポケモン。体長、0・6m。体重、1・0kg

「なんだかどっちも恐ろしく毒っぽいなあ……ドガースは見た目から毒っぽいけど、ウツドンなんて雰囲気が……」

タキが客観的な目線でツツコミを入れる。その後、バトルがスタートした。

先手を取ったのはドガース。

「ドガース。いつものようにいくぞ。そこをだけトレーナー共。ドガースの毒ガスに巻き込まれる前にな」

男がそう言つと、ドガースが勢いよく毒ガスを噴射し始めた。

「よくある戦い方ね。ウツドン。この汚いガスを吸い込んでしまいませんさい」

「リカの命令を受けたウツドンが、先程、ドガースが噴射した毒ガスを勢いよく吸い込んだ。どうやらウツドンには毒の耐性があるらしく、吸い込んでもダメージはないらしい。

「さあ。もういつもの戦い方はできないわね。次はどうする?」

「くつ……どうやら俺の天敵のタイプのようだな。まあいい。なら

力押しでいくまでだ。ドガース。体当たり」「

ドガースがウツドンに体当たりを仕掛ける。しかし、ウツドンは体の向きを変え、葉っぱの部分で体当たりをガードする。ウツドンの葉っぱはとても鋭く、体当たりを仕掛けたドガースが逆にダメージを負ってしまった。

「本当。それでよくあんな大きな口が叩けたものね。自分の戦い方が出来なかつたらすぐに力任せの行動で切り抜けようとする。そんなことだから負けてしまつ」

コリカは余裕といった口調で男を挑発する。

「つるさい……これは相性が悪い。もしあ前のポケモンが毒に耐性のあるポケモンじゃなかつたら俺はこんな無様な姿を晒さずに勝つていたんだ！」

男が初めて取り乱し、そう叫んだ。

「相性の問題？ ふざけないで。相性の壁を越えようと頑張るものトレーナーの仕事。苦手なタイプ用の戦略を考え、苦手な攻撃を受けるポケモンを励まし続ける。それがトレーナー。あなたは相性から逃げているだけ。自分の苦手なタイプじゃなかつたら勝てるなんてありえない。その思想の時点では、あなたはもう負けている」

コリカは、そう言った後、小さな声でウツドンにハッパカッターと命令した。

ウツドンから繰り出される鋭い葉っぱがドガースを切り刻む。

そして、この時点でバトルは終了した。

「Jの試合にタキは圧倒されていた。まさか、ユリカがここまで強いとは思いもしなかったのだ。

そして、タケシとの試合により成長したのであらう。自分とユリカのトレーナーとしての差を肌で感じることが出来た。タキは心の中でユリカを越えられるように自分自身も、もっと努力していくことを決意した。

「さあ、どうだつた？ 自分の無力差を感じることが出来たかしら？」

ユリカがゆっくりと男に近づく。

すると、どうしたことであらう。男はボロボロと涙を流しているではないか。

そして、初めてタキと話した、あの冷静さが嘘のように取り乱した表情でユリカに言葉を投げかけた。

「お前に言われなくとも分かつてたさ！ 僕が無力だつてことも。駄目トレーナーだつてことも。相性から逃げていたことも。全部分かつてた。でも、それを認めることがんのかよ！ 認めちまつたら……惨めな姿で全てを失うだらうがよ……」

「認めなさい。全てを失う？ 結構なこと。そこからまた土台を作り直せばいい。トレーナーなんて挫折と復活の繰り返し。挫折を恐れていて強くなれるトレーナーなんていないわ。全てを失うことでも越えられる壁だつてある。だから、また一からスタートすればいい。トレーナーだつてポケモンだつて成長することが出来るんだから」

男はもつ言葉を返すことは出来なかった。

ただ、ユリカの言葉に頷くことしか出来なかつた。

「か……かつこいい！　かつこいいよゴリカー！」

タキがゴリカに向かつてそう叫ぶ。すると、タキの周りに居た人達も、自然とゴリカに向かつて拍手を送つた。

なんだか、異様なテンションに包まれているオツキミ山。男に足止めされて通ることが出来なかつた人達も、これでは男とゴリカのショーケを見に来た客のように見える。

「あ……いや……その……」

ゴリカがいきなりの拍手に対し、アタフタしながら照れているそのときだ。

「うぬせーーー！」

男のこの一声で、みんなの拍手が止む。そして、この場にいる全員が男を睨みつけた。

「せつかく俺がリセットしたつてのに、俺を無視して盛り上がりてるんじゃない。というか、全てを失うつてこんな感じなのか。なんだか、逆にすつきりしたつていうか、モヤモヤが消し飛んだつていうか……どっちにしても、久しぶりだ。こんな気持ちは」

どつやら、久しぶりに感じる開放感に感激している様子だ。

「やうだ。中々悪いものではないだろ？」

「ああ。それより、みんな悪かったな。俺の身勝手な判断で道を塞いでしまって。これからはもうここは自由だ。そして、その女。ありがとう。色々と吹っ切れた。俺はまた沢山経験を積んで壁を越えてやる。どうせ一からのスタートだ。負けまくつても昇り続けてやるわ」

男がそう言い、その場を立ち去る。したその時、ユリカが「私の名前は女ではない。ユリカだ！」と叫ぶ。タキも流れに身を任せよつと判断したのか「僕はタキだ！」と叫ぶ。

「ユリカってのはさつき、そこの中が言つてたのを聞いてたから知つてる。ただ、人の名前を呼ぶのを好まないだけだ。ちなみに、俺の名前はカケオ。まあ、頭の隅のほうにでも置いといてくれ。じゃあな」

カケオは、そういうオツキミ山の入り口方面へと消えていった。

タキとユリカは、カケオという名を頭の隅のほうに刻んだ。

そして、二人とも同じ事を思った。カケオは、これからトレーナーとして大きく成長するだろうと。出会ったときのカケオと去ったときのカケオを見ていると、そういう気がしてならなかつたのだ。

そして二人は、オツキミ山を出る。

久しぶりに洞窟を出て広がる光、青い空、白い雲。そして、二つのバッヂを持つジムリーダーがいる町。ハナダシティ。

## 第十六回。相性の壁

オツキミ山を抜け、ハナダシティに着いた二人。

本来ならここでお別れのはずなのだが、ユリカの目的地はタマムシシティという場所らしく、そこにもジムリーダーはいるらしい。つまり、そこはタキも通らなくてはならない道。目的地ではないとはいえ、ユリカと行く先が一致している。別れる必要はないということだ。

かなり自分の言いたいことは遠回しにタキに話を切り出したユリカであるが、言っていることをまとめてみると、ここで別れるのではなくて、自分の目的地までタキと一緒に旅をしたいということだ。

そう解釈したタキは、喜んでタマムシシティまで一緒に旅を続けることにした。

タマムシシティまで一緒に旅を続けることとなつた二人は、ハナダシティを見て回る。

ハナダシティは、とても水に溢れた町で、水の流れる音が心地良い。岩に溢れていた一ビシティとは、また違つた雰囲気がある。

ハナダシティを見て回つてゐる途中。タキはハナダジムを見つける。

ジムリーダーとのポケモンバトルを楽しみにしてゐるタキのことだから当然だろ?。ジムを見つけた途端に足がジムへと傾き、ジムの中に足を踏み入れようとする。

しかし、それをユリカが止めた。

「タキ。まだ駄目。今そのままじゃハナダジムのジムリーダーには絶対に勝てない」

いきなり、ジムに入るのを止められたタキ。当然「なぜ?」と反論する。

「ハナダシティを見て分かるように、ハナダシティのジムリーダーは水タイプのポケモンを得意としている。対して、タキのヒーローは炎タイプのポケモン。相性が合わない」

「ちょっと待つてよ。さっきユリカは、オツキミ山で相性の壁は越えられると言つたじゃない。ユリカは僕には相性の壁は越えられないって言つた!？」

タキが少し怒り口調でユリカに反論する。  
そもそも、さつきユリカは相性の壁は越えられるといつたばかり、これでは話が合わない。

「タキは苦手なタイプのポケモンに対し、何か対策を考えたことはある? 耐性をつけようと努力したことはある? 相性の壁は、口だけで越えられるほど甘いものではない。努力しないで越えられる壁なんてないわ」

バッサリとユリカがそう言つ。この言葉は、少し怒り気味だったタキにも届いたようだった。

「ない……」「めんねユリカ。相性の壁なんてまつたく越えられてないのに、越えられるって聞いただけで越えられた気になつてた……でも僕達は越えるよ! こんな駄目な僕だけさ。努力は一つの得意技なんだ。当然、ヒーローもロッキーも僕より凄い努力家だし、根

性だつてある。絶対に越えられない。いや、越える！」

「当然。私は壁を越えられないと感じるトレーナーにわざわざ「」  
なことを言つたりしない」

タキの意氣込みを聞いたユリカは、軽く微笑みながらボソッとそ  
う言つた。

その後、タキは考えた。炎タイプが水タイプに対抗するにはど  
うすればいいか。しかし、思いつかない。タキには経験が足りない  
のだ。苦手なタイプのポケモンと戦うイメージが中々掴めない。  
そんな状態で、いくら対抗策を考えようと見つかるはずはない。  
時間だけが刻々と過ぎていく。

「どう？ 何かいい策は思いついた？」

「ずっと、黙つて頭を悩ませながら考えているタキを心配してか、  
ユリカが声をかける。

「つづん。どうも掴めないんだ。」「こう難しこ」と考えたことな  
いから、どうも慣れなくて」

「そんなに難しく考へることはない。タキが思うようにやってみれ  
ばいい。何事にもまずは挑戦が大切。壁は少しずつ越えていけばい  
いの」

「ユリカに助言を受けたからなのか、その後、少し考へたかと思つ  
と、何かを思いついたように立ち上がった。

「そうだ！ あつたよ。僕達でも今すぐ出来る対策法。対策法つて

程のものでもないかもしないけど……でも、とにかく挑戦が大切なんだよね！ 対策法を思いつけたのもユリカのお陰だよ。ありがとうユリカ！」

タキが精一杯の笑顔でユリカにお礼を言つ。

「べ、別に私は礼を言われるようなことはしていない。挑戦するのは、た、タキなのだから」

ユリカは照れているらしく、上手く言葉を喋れていない。そんな姿を見て、タキがまた笑う。

「アハハ！ そうだね！ ジャあ、早速、行動に移さないと。時間は待つてくれないもんね！」

そう言つと、タキはユリカを誘導しながらハナダシティに広がる大きな湖へと走つた。

どうやら、ここが対策法を実行する場所らしい。

この場所でタキの水タイプ対策が始まろうとしている。

## 第十七回。水タイプ対策

湖に来たタキはヒーローとロッキーを場に出した。

戦いだらうと思つて場に出されたヒーローとロッキーは、田の前に広がる大きな湖に田をパチパチさせていく。

さうにヒーローとロッキーは驚く。なんと、タキから湖の中に入るよう命じられたのだ。

されば、ヒーローとロッキーも嫌がる。水はどちらにとつても弱点。弱点の中に飛び込むなんて自殺行為だ。

ヒーローとロッキーは精一杯に首を横に振り、嫌だといふ気持ちを示す。

それは、タキにも伝わったようだ。しかし、タキは首を縦には振らない。

「お願い。僕はヒーローとロッキーに苦手な水を克服してほしいんだ。こんな無茶言つてレーナーでごめん」

タキが両手を合わせてお願いする。

しかし、それでもヒーローは気が乗らない。いくら、タキの命令といえど、こんなこと無意味に感じたのだ。

そんなヒーローに対し、ロッキーは動く。ロッキーは挑戦したかったのだ。どれくらい自分が水に耐えることが出来るのか。限界への挑戦である。

勢いよく湖に入るロッキーであるが、十秒も持たずに陸に上がる。

やはり水は苦手。

だが、このロッキーの行動により状況は一気に変わる。さっきまで気が乗らなかつたヒーローが動き出したのだ。

ヒーローはとつても我慢した。十秒、二十秒と記録を伸ばしてゆく。そして、三十秒を過ぎた時点でヒーローが陸に上がる。

陸に上がつたヒーローは青ざめた顔で、同じく青ざめた顔のロッキーを勝ち誇つたような顔で見た。

これにカチンときたロッキー。少しの休憩の後、湖の中に入り、我慢する。

ロッキーも二十秒、三十秒と我慢し、三十五秒まで記録を伸ばした。

そして、同じじように青ざめた顔で陸に上がつた後、ヒーローに勝ち誇つたような顔を見せた。

それからは、同じ」との繰り返しである。

体力回復のために少し休憩し、湖に入り、タキが記録を計る。それが続く」とヒーローとロッキーは、負けるわけにはいかないと記録を伸ばしていく。

ついには、一分という大台を超えるほどの持久力対決となつていた。記録を計るタキも大変である。

だが、持久力にも限界というものはある。一分三十秒を過ぎた辺りから、めつきり記録は伸びなくなり、ヒーローとロッキーの体力的にも限界だらうと、タキもヒーローとロッキーを止めた。

「ヒーロ。ロッキー。ごめんね！ 真剣に我慢してるヒーロとロッキーを見ると止めるタイミング分からなくなっちゃった……」

タキが止めた途端に、地に倒れこんだヒーロとロッキーを見て、焦りながらそう言つ。

「でもこれでよかつたのかも。タキのポケモン達。凄く満足そうな顔をしてる」

ユリカが静かにタキに囁いた。

「でも……やつぱりこんな対策法は無茶だったかなあ……結果的にヒーロとロッキーの我慢大会になっちゃつたし」

「私はそれでいいと思う。我慢大会でも、確実に水に対する抵抗力は上がつている。それに、ヒーロとロッキーの絆も。これは、ヒーロとロッキーだから成功した対策法ね」

「だよね！ これもヒーロとロッキーが頑張つてくれたお陰だよ。あつ、頑張りすぎて疲れたよね！ 今から急いでポケモンセンターに行くからゆつくり休んでね！」

タキはそう言つとモンスター・ボールにヒーロとロッキーを戻し、ポケモンセンターにモンスター・ボールを預けた。

じつして、タキのハナダジム対策は終わつた。後は、実戦で対策法の成果があらわれるかどうか。それは明日のジム戦で明らかになる。

## 第十八回。激突！ハナダジム！

次の日。ポケモンの体力も十分に回復。迷わずハナダジムへと足を踏み入れる。

ハナダジムの中は「ビジム」とは全く違い、ポケモンセンター並みの綺麗な施設だ。

きちんと受付もあり、ジム戦が混雑するようなこともない。

ジム」とにこれほど設備の違いがあるのが驚きである。

タキは早速、受付でジム戦の予約を済ませる。

通常なら、先客のポケモントレーナーの予約が入つていれば、タキのジム戦は何日後かになっていたはずなのだが、運よく今から試合が出来るみたいだ。しかし、ジムリーダーの下へむかえるのは挑戦者だけなので、コリカはジム内で待つていても「うつ」とになる。

いよいよジム戦という雰囲気を感じ、ますます気合の入ったタキは、やる気十分な顔つきでジムリーダーの下へ向かつ。

タキの向かつた先には、周りが水で囲まれたフィールドがあつた。フィールドの先にはタキと同い年くらいの女性が腕を組みながらタキの方を見ている。

「あんたが今日の挑戦者ね。あたしはカスミ。別名。ハナダジムのおてんば人魚よ…」

タキがくるやいなや、いきなり勢いよく自己紹介を始めたジムリーダーのカスミにポカーンとするタキ。

同じジムリーダーであるタケシとのテンションの違いについてい

けないようだ。

「もー…。せっかく人が自己紹介してんだから、あんたも自己紹介しなさいよ！ それが礼儀つてもんでしょう！」

「タキです……別名はありません」

「いつもは元気一杯なタキもカスミのテンションにはついていけないようだ。気持ちでは完璧に押されている」

「なんか調子狂うわね……まあいいわ。ポケモンバトルを始めます。使用ポケモン二体。ポケモン交代可。いいわね？」

「うん！ よろしく！」

そう言い終わると一斉にポケモンを出す。

タキはロッキーを、カスミはヒトデのようなポケモンを出した。

新たにポケモンを見たタキはいつものようにポケモン図鑑を出しカスミのポケモンを調べる。

名はヒトデマン。体長0・8m。体重34・5kg。体長の割りに体重が重いポケモンである。体の中心にコアみたいなものがついているのが特徴だ。

「行くわよヒトデ…えつ…？」

カスミが驚くのも無理はない。カスミがヒトデマンに命令しようとその時には既にロッキーの拳がヒトデマンに振り下ろされようとしていたのだ。

当然、タキはロツキーに何も命令していない。完全にロツキーの単独行動だ。

しかし、この行動が功を奏す。完璧な先制攻撃となつたロツキーの行動が相手の出端を挫き、相手に行動させる隙を与えたのだ。

そして、当然のようにロツキーのパンチはヒトデマンを捉えた。無防備な状態で攻撃を受けたヒトデマンは大きく吹っ飛び壁に激突。中心のコアが点滅したかと思うと、静かに水に倒れこんだところをカスミがモンスター ボールに戻した。

「やるわね……ポケモンがトレーナーの命令無しに攻撃してくるなんて。ポケモンに相当信頼されてるか嫌われるかのどっちかね」

白川紹介の時とは打って変わったテンションで、そう言つ。

「ロツキーが僕を信頼してくれてるかは分からぬ。でも、僕はロツキーを信頼してる！」

タキがカスミの言葉に対し、自信満々にそう返す。

「……本当、調子狂うわ。完全に油断してた。でも、もうこんな失態はないと思ひなさい！ 行くのよアズマオウ！」

カスミが勢いよくアズマオウを水面に出す。

アズマオウ。体長1.3m。体重。39.0kg 黒い斑点が多い金魚のような形をしているが額から大きなツノが生えているのが特徴だ。

水面に出されたアズマオウは、水に囮まれたフィールドの中に潜り、姿をくらましながら移動する。これで、ロッキーにはアズマオウの行動は読めないとつわけだ。フィールドを活かした戦い方である。

「これじゃ、アズマオウの動きが分からないよ。ロッキー。今はジツとアズマオウが現れるのを待つんだ！」

タキの命令を受けたロッキーはピタッと立ち止まり、アズマオウが現れるのを待つ。

「へえー。命令もきつちり聞くじゃない。タキはいいトレーナーだわ。ポケモンを縛りも放しもしない……これって結構難しいことなのよ。今ので一つ分かった。タキはポケモンから信頼されてる。タキのポケモンが物語ってるわ。でも、それだけじゃ私には勝てない。私はハナダジムのジムリーダー……別名。ハナダジムのおてんば人魚。タキみたいなトレーナーを沢山相手にしてきた……そして、倒してきた！」

カスミの言葉と同時にアズマオウが水の中から跳ね上がり、ロッキー目掛けて飛び掛る。

「アズマオウ！ 飛び掛った勢いでツノで突く！」

「ロッキー！ 君の得意のパンチで応戦するんだ！」

二人の命令とともに動く一体のポケモン。

命令通り、ツノとパンチが激しくぶつかり合つ。しかし、どちらも何もアクションがない。どうやら威力は互角。相殺したようだ。

「よし！ 食い止めた！」

アズマオウの渾身の一撃を食い止めて一安心のタキ。

「甘いわ。アズマオウ！ 今、相手のポケモンは無防備よ。そのまま水鉄砲を食らわせるのよ！」

アズマオウがツノとパンチが相殺しあつているその状態から水鉄砲を放つ。ガードできぬロッキーは、相性の悪い水タイプの技をモロに食らう。

「ロッキー！ 今の君なら耐えれるはずだよ！ 今度はこっちの番だ！」

「何言つてゐるのよ。私のアズマオウの攻撃を……そんなん……」

ロッキーは耐えた。これも、あの特訓があつてこそその事だらう。アズマオウが攻撃をし終わつた直後の事だ。体制が整わない今は、さつきとは打つて変わってアズマオウが無防備。遠慮なくロッキーのパンチを打ち込める。

「行けロッキー！ サっきの痛みを何倍にもして返してやるんだ！」

「ツーブテーーーー！」

タキの言葉に反応するように大きく叫ぶロッキー。そして、アズマオウに渾身の一撃をぶち込んだ。

無防備のアズマオウにロッキーの渾身の一撃をかわす術はない。

ロッキーの一撃は見事にクリティカルヒットし、ヒトデマンと同じようにアズマオウも静かに水へと倒れこんだ。

カスミのポケモンは一体とも戦闘不能。この瞬間。タキの勝利が決定した。

「あ～あ。完敗ね。ブルーバッチ。これはもうタキのものよ」

カスミがタキにブルーバッチを渡す。

「ありがとう。楽しいバトルだったよ！ カスミとポケモンバトル出来てよかったです！」

「そりやそうよ。ポケモンバトルで熱くならないわけないじゃない！ これからもどんどんポケモンバトルしなさいよ！」

「うん！ どんどんポケモンバトルしていくよ！ だって楽しいもん！」

二人は笑顔で握手を交わす。バトル前の一人ではありえない光景だろう。

そして、タキはハナダジムを後にした。

その後、ユリカと合流したタキが元気良くユリカに言葉を発する。

「本当、ユリカの言う通りだったよ…」

「何のことだ？」

急にそう言うタキの発言に意味が分からず、ユリカが言葉を返す。

「ジムのことだよ。ユリカがいなかつたら僕、絶対に相性なんて考  
えずにカスミに挑戦してた。それじゃ、絶対あんないバトルは出  
来なかつたし負けてた。それに気づいて止めてくれたユリカには何  
でもお見通しなんだなあつて思つて。やっぱりユリカは凄いや！」

「それは違う。私は理論的にそう言つただけ。ハナダジムのジムリ  
ーダー。カスミと戦い勝利したのはタキ。別に私が凄いわけじゃな  
い。それよりも、ブルーバッヂを手に入れたんだ。クチバシティを  
目指そう」

「なんだか話をすりかえられたような気がするな……まあいいや  
！ 次はクチバジム！ また楽しいポケモンバトルが出来たらいい  
なあ！」

こうしてカスミを倒し、ブルーバッヂを手に入れたタキ。次に目  
指すはクチバジムのあるクチバシティ！

## 第十九回。喋るポケモン！？

事件とは突然起くるものだ。

なんと、二人がクチバシティに向かう途中。一つのこじんまりとした研究所から「助けてくれえー！」という叫び声が聞こえたのだ。これを見過すわけにはいかない。そう直感で感じたタキは大急ぎで研究所のドアを開けた。

大急ぎ、そして、真剣に研究所に足を踏み入れたタキは、研究所の中の現状に思わず口がポカーンとなつた。

「これは……どういふこと？ ポケモンしかいない」

少し遅れて中に入ったユリカも、意味が分からぬようだ。

するとその時……

「そんなポカーンとした顔で見てんと助けてーな！ 困つてんねんでわい！」

「ポ……ポケモンが喋った！？」

「嘘……」こんなことひて

二人は何が起こっているか分からぬほど驚いた。

それもそうだ。ポケモンが喋っているのである。「こんなこと、タキに色々とポケモンについてアドバイスしているユリカでさえ体験したことの無い出来事だ。驚かないほうがどうかしてる。

「タキ！　ここはとりあえず落ち着こい…… そうだ。ポケモン図鑑で調べてみてはどうだ？　何か分かるかもしね」

「流石ユリカ！　その手があつた！」

「コリカの提案を採用したタキ、早速ポケモン図鑑を取り出し、喋るポケモンを調べた。

しかし、ポケモン図鑑にはなんの反応もない。

この図鑑はとても高性能なのだ。ポケモンに対して反応しないわけがない。

「ポケモン図鑑にも反応がない…… といつことはまさか……」

「そりや姉ちゃん。ええとこに気づいたで。あんたらの絡みが結構おもろかつたから言いださんかったけど、わいはポケモンちやう。人間や。まあ、半分人間で半分ポケモンなんやけどな」

それなら話は通じる。人間なら言葉は話せるし、ポケモン図鑑が反応するわけがない。しかし、重要なことはもう一つある。なぜ、人間がポケモンの姿になつているかということだ。

「とにかくや。ちょっと助けてもらいたいねん。わいの後ろにある大きい機械のボタンを押して、わいを人間の姿に戻して欲しいんや。わいは左側の機械の中に入るから、どちらさんでもいいんで右側のボタンをポチッと押してくれるだけでかまへんから。頼みますわ」

必死に頼むポケモン人間。二人も、こんな姿で頼まれたからには断るわけにもいかない。というか、助けるために研究所へ入ったんだから断る理由もない。

頼まれた二人はせつせと機械の前に移動する。

そして、ポケモン人間が左側の機械に入ったのを確認すると、ポチッとボタンを押した。

ボタンを押した途端、機械が勢いよく振動する。どうやら作動したようだ。

その後、しばらくして機械の振動が止まり、左側・右側、両方の機械のドアが開いた。

なんと右側から男が、左側からポケモンが。それぞれ出てきたのである。

「いやあ。助かったわ。ほんまに助かった。お一人さんおおきにならん。それはいいけど、なんでこんなことになっちゃったの？」

タキはお礼などどうでもよかつた。ただ、なんでこんなことになつたのか。それに興味が集中していた。

「これなあ。結構、話が長くなんねんけど……」

まとめるところだ。

この男はマサキというポケモン研究家及び開発者。タキは知らないが、世界的に有名な、転送システムの開発者の一人である。

マサキは、マサキの現在の相棒ポケモンであるイーブイと新しい転送装置の実験をしてみたのだが、見事に失敗し、例のよつたな事態になってしまったのだ。

ちなみに、どんな機械なのかは見ての通りなのだが、完成段階で

はないので秘密らしい。

マサキいわく、この転送装置実験が成功し、完成すると、ポケモントレーナーが喜ぶこと間違いなしらしい。

「僕には分からぬけど、とても凄い人なんだね。なんだか有名人と出会った気分だよ！」

「せやから有名人やねんて。わいの知名度もまだまだやな……」

「いや、ほとんどの人が知っていると思う。それ程、転送装置は役にたつてる」

先程説明したとおり、マサキは転送システムで有名になった。すなわち、現在開発している転送装置よりも前に一つ転送装置を開発しているのだ。

「へえ。ユリカがそこまで言つんだから相当、凄い人なんだね！」

「そうや。よつやく分かったか！」

マサキが高らかに声を上げる。

「なんだかマサキって関西人みたい。喋り方も自信に満ち溢れた態度も！」

タキが冗談交じりにそう言つ。

「関西人？ なんやそれ……なんか誤解しとるみたいやからとります。えず言うとくと、この喋り方はグレンタウン独特の喋り方なんや。まあ、珍しいからな。勘違いしてまうのも無理ないわ」

マサキが冗談交じりにそつまつと、急にニッコリと笑顔になり、もう一度、口を開いた。

「それとや、わいが自信に満ち溢れてんのは自分に酔いしれどるからとけやうで。ただ、嬉しいねん。わいはポケモンとポケモントレーナーの環境を良くしたいから研究しとる。ということはや、わいが有名になるほどいい方向に進んでるってことやろ？　わいはポケモンが大好きや。そんな自分がポケモンの環境をよくしてるとと思うと、いやでも自信に満ち溢れるわ。わいの自信はポケモンの環境をよくする原動力なんや！」

「ごめん。確かにちょっと誤解してた。マサキはただのポケモン好きじゃないんだね。ポケモンに人生を預けたポケモン好きなんだね！」

「そうこういつちやー！」

その後、少し雑談をし、出発の準備を始めたタキとユリカ。すると、マサキが何かを取りに奥に行き、間もなく何かを手に持ち戻ってきた。

「これやるわ。助けてもらつた礼やー！」

マサキが何やらチケットのような物をタキとユリカに渡した。

「これは、サンクト・アンヌのチケットや。クチバシティにある港から乗れるわ。快く使い

「いいの？ ありがとうー」

「気にすんなー。一ヶ月に数枚支給されるからなあ。わいくらいに有名になると。普通に買つと結構すんねんでそれ。今月は特に使い予定もないし丁度よかつたわ」

マサキがまた、高らかに声を上げ、笑う。

「ありがとうー。じゃあ、そろそろ行へよー」

「おつかれ。達者でなあ。最後に一つ注意や。絶対にポケモンを苦しませぬことじつたらあかんでー。まあ、あんたら限りてそんなことさせないからねー」

「うさ。その注意についてほせりきつと約束できるよ。苦しませないでー。」

ついして、喋るポケモン事件を解決した一人は、改めてクチバシティを出立。

## 第十九回。喋るポケモン！？（後書き）

実際のマサキの設定とは大きく異なることをここで報告しておきます（汗）

## 第一十回。クチバジムはなんだか奇妙

サンサンと照りつける太陽。それに合わせる様にザザーッと鳴る海の波。

そう。ここは港町クチバシティ。タキにとって三つ目のジムのある、クチバジムがある町だ。

クチバシティに着いた途端、いつものように町を回る一人。そして、クチバジムを発見。

しかし、ハナダジムのような例もある。今回もしつかりと相性対策を整えて挑戦しようと思つたタキは、戦いたい気持ちを抑えてジムの前を通り過ぎようとした。

しかし、それをユリカが止めた。

「ここは大丈夫。今のタキなら十分に勝てるわ。中に入りましょう」

なんと、ハナダジムのときは打つて変わつて、ユリカのほうから今すぐジムに挑戦したほうがいいと提案する。

「確かに僕も戦いたいのは山々だけ……なんだか他のジムと比べて外面が大きいし、やっぱり準備を整えた方が……」

「大丈夫。ここなら絶対に」

そう言つと、ユリカが半場強制的にクチバジムへとタキに足を踏み入れさせる。

「な……何するんだよ。入っちゃつたじゃない！　ああ、もう戻れないだろ？　もう、向こうは僕達を呼びかけてるみたいだし

……」

タキの言つとおり、かなり遠くではあるが、三人の男が一人を呼び声が聞こえる。

クチバジムは外面こそ大きいものの、中は何も置いておらず、視界・聴覚を遮る障害物のようなものも置かれていないので周りがよく見えるし聞こえるのだ。これでは大きいジムの無駄遣いである。横も縦も二ビジムの1・5倍くらい広いというのに……

もう、こうなっては仕方ない。タキも覚悟を決めて三人の男の下へ向かつた。

「ウエルカムクチバジムへ。ミーに挑戦しに来たのですネ？」

三人のうちのリーダー格と思われる男がタキに話しかける。

「はい。なんだかそうなっちゃつたみたいです」

なんだか外人みたいな喋り方だなと思いながらも、もう突っ込むのはやめようと決心したタキは、そこには触れずに普通に言葉を返した。

「なんだか曖昧ネ……オー。OKOK。ボーアイがなぜ曖昧か分かりました。横のガールが前にクチバジムに挑戦しに来たのを覚えていまーす。そして、いつも簡単にバッヂをゲットしました。だから、このジムは楽勝ということで無理やりボーアイをジムに連れ込んだ。違いますか？」

思つた以上の推理力にタキは驚く。しかし、ユリカもジムバッヂを持つてしていることは初耳だ。

「ええ。四つ持ってるわ。死闘と言える試合をしてのバッヂよ。クチバジムのマチスから貰ったバッヂ以外はね……」

どうやら、ユリカはマチスのことを良く思っていないらしく、少し睨みつけるような表情でそう言つた。

「オー。恐い恐いネ。まあ、恨まれるのもよくあること。今は、リアルバトルの時間じゃないネ。ポケモンバトルの時間。さあ、ボイ。バトルするネ」

マチスはそう言い、モンスター・ボールを取り出すのかと思えば、ポケモンを出す気など更々ないようだ。ポケモンバトルをしようと、マチスがそう思つたタキに気づいたのか、マチスがヘラヘラとした顔で言葉を発する。

「オー。言い忘れてました。ボーイには今からミーの横にいる二人と戦つてもらうネ。使用ポケモンは一体。一発勝負ネ」

マチスがそう言うと、横で黙っていた二人が静かに動き出し、慣れた手つきでモンスター・ボールを取り出した。

そして、なんだか煮え切らないままタキは一人とバトルする。結果は楽勝だった。ニビジムとハナダジムを勝ち抜いたタキにとって弱すぎる相手だつたのだ。

一人に勝利した後、マチスが笑顔で拍手しながらタキの下へ歩いてきた。

「凄い凄いネ！　これだけの力があれば十分。オレンジバッヂ。これは君のものネ」

そう言つてオレンジバッヂをタキに渡そうとするマチス。このマチスの行動に、コリカが珍しく感情をぶつけようつに激しく言葉を発する。

「早く受け取るのよタキ！　分かつたでしょ。マチスはこいつの男。なめてる。ポケモントレーナーである私達をなめてるー。」

「結構、うるさいガールネ……!!」ジムリーダー。そのミーが認めたんだから別にいいでしょ。ああ、ボーア。受け取るネ」

マチスがうきびつした顔でコリカの言い分を軽く流す。

「受け取らない……いや、受け取れないよ

タキがオレンジバッヂを受け取るのを拒否する。この行動にマチスが不思議に思つ。

「なぜだボーア。バッヂは欲しいんだろう？　なら、貰うべきネ。ボーアは十分強いネ」

マチスがもう一度、オレンジバッヂを貰うよつとタキにすすめる。しかし、タキは受け取ろうとはしない。

「受け取れないよ。だって、ジムリーダーのマチスと戦つてない。バッヂは欲しいよ。でも、僕はバッヂのためにジムに挑戦してるんじゃない。戦いたいんだ。ワクワクする戦いがしたい。ジムには間

違ひなくワクワクするよつた戦いが出来るジムリーダーがいる。だから挑戦したい……ポケモントレーナーならポケモンバトルが多い。マチスはそうじゃないの！？」

タキが自分の思う気持ちをマチスにぶつける。

タキの真剣な気持ちがマチスに届くかどうか。それは、マチスの行動次第……

「ブラボー……ブラボーボーイ！」

急に、マチスが子どものように騒ぎ出した。  
そして、ギュッとタキの手を握り締める。

「その気持ちよ！ ポケモントレーナーならポケモンバトルをしたい。最近のトレーナーにはそれが欠けてるね。ガールはボーイを見習うべきね。ガールはミーの人間性で質を判断し、あの時、おとなしくバッヂを受け取ったネ」

マチスは、ワクワクを押さえきれないといった表情で活き活きと  
そう語る。

そして、また言葉を発し始めた。

「もちろん、ボーイもミーの人間性にうんざりしてたはずネ。でも、  
ポケモンバトルを挑んできた。これが大事。そこにポケモントレー  
ナーがいるからバトルをしたい。これは当たり前のことネ。でも、  
最近のトレーナーは人間性や立場を気にする。自分の気に入った相  
手としかバトルしようとしてない。これじゃ駄目ネ」

意氣揚々と語るマチス。しかし、その説明には引っかかるところ  
があるようを感じたタキは、思い切ってマチスに質問する。

「じゃあ、なんでマチスはわざわざポケモンバトルを避けるような態度を取るの？ ジムリーダーなんだから戦える機会なんて凄く多いのに」

タキの質問に、マチスは照れるように頭を搔いた後、少し照れ笑顔になりながら口を開く。

「気づいて欲しいからね。ミーも本當なら快くジムリーダーとしてバトルしたいね。でも、それじゃ誰も気づいてくれない。だからミーはヒールを演じるね。これをきっかけに色んなところでバトルが増えたら、ミーもハッピー・ハッピー！」

その言葉を聞いたタキはいい意味で笑みがこぼれた。

さつきまで睨みつけるような眼でマチスを見ていたユリカにも笑みがこぼれた。

それを見たマチスにも笑みがこぼれた。

そして、しばらく笑った。ハッピーな瞬間である。

すると、さつきまでバトル以外で一言も喋っていなかつたマチスの横にいた一人が、何やらマチスに耳打ちした。

「そうネそうネ。はしゃぎ合ってる場合じゃない。ミーはジムリーダー。さあ、ボーカルバトルするね……と、その前にやることあるマチスの言つとおりにジムの外に出る一人。

そう言つと、マチスが一人に外へ出るようだと言葉を発した。

「どうしたの！？ バトルは？」

「

」

バトルする気満々だつたのに肩透かしを食らわされたような感覚になるタキ。

「まあ見てるネ。OKよ！」

マチスが中にいる一人に向かつて大声で叫ぶ。

その後、ジムに何か大きな音がしたかと思うと、中に入っていた二人が大急ぎで外に出てきた。

一人が出てきたその後もジムから発せられる大きな音は静まろうとしない。

あれこれ二分程であろうつか、ようやくジムから発せられる大きな音が止まつた。

「終わつたネ。さあ、中に入る」

マチスが嬉しそうにジムの中に入る。  
二人も後を追つように中に入った。

「な……何これ」

「どうなつているの……」

タキもユリカも驚いた。無理もない。何にも無かつたジムが大自然のような森や草に囲まれているのだ。どんな仕組みなのかも分からぬ。

「驚いてる驚いてるネ。この地形には意味があるネ。ちょっとミーの戦い方は変わつてる。だから、こんな地形にしてるネ」

そう言つと、マチスはクチバジムの戦バトル方式を説明する。

まとめるところだ。

マチスは、戦いはトレーナーとポケモンの友情も大事だが、ポケモン自身の行動力も大事だと考えている。だから、これだけ広いジムを作り、外からは中がどうなつているか分からぬように大自然のような作りになるような仕込みを行つたのだ。

そして、本題のバトル方式。使用ポケモンは一体。トレーナーはジムの外で待機し、大自然の中、ポケモンだけでバトルするサバイバル方式。勝利方法は、ジムの中で勝利したポケモンが、敗北したポケモンを背負つてジムの外に出てくること。

このバトルは、トレーナーの命令は一切ポケモンには聞こえず、ポケモンの判断だけで行動しなければならない、非常に難易度の高いバトル方式である。

「じゃあ、勝負ねボーグ！　さあ、久しぶりのバトルネ、ライチュウ！」

マチスはそう言つとライチュウを出す。

ライチュウを早速、ポケモン図鑑で調べるタキ。

名はライチュウ。体長0'8m。体重30'0kg。どことなく大きなネズミにも見えなくないポケモンだ。ネズミに比べると少し可愛く見える。

タキが出したのはヒーロ。タキがヒーロに、今回のバトル方式を伝え、準備万端。

「勇敢なボーイのポケモンだからって手を抜く」とは無いネ。思いつきり倒してやるネ。ライチュウ」

「僕が命令しなくてもヒーロは大丈夫だよね！ 頑張れヒーロー！！」

二人の言葉を聞いた、ライチュウとヒーロは、気合を入れてもらつたかのように真剣な顔になり、ジムの中に消えた。

ライチュウとヒーロ。トレーナーのいない戦いが今、始まろうとしている。

## 第一十一回 ヒーローバラライチュウ。トレーナーのいないサバイバルバトル！

草木が生い茂る森の中、トレーナーの指示も無く、ポケモン自身の能力の高さが試される戦いが今、始まった。

ジムの中へ入った途端、ライチュウが広い森の中へ素早く身を隠す。

ヒーローを攪乱する作戦なのだろう。思惑通り、ヒーローは注意深く辺りを見渡し警戒している。確実に精神ダメージを与えていたいことだ。流石、マチスのライチュウ。サバイバル方式に手馴れている。

一方、ジムの外でポケモンの勝利を祈るトレーナー達。

「ボーグ。気分はどうね？」

口を開くマチス。

「さつきから緊張が止まらないよ……信じて待つことがこんなに緊張するものだとは思わなかつた」

暑くもない気温の中、額から冷たい汗を流すタキ。

「感心感心ネ。戦場へ旅立つ人は、色々な感情が交差して不安な気持ちになるネ。でも、帰りを待つ人だって同じように不安ネ。それは、ちゃんとパートナーと意思疎通できる証拠。ボーイのポケモンも不安というプレッシャーに支配されないように頑張ってるネ。ボーイも支配されないように頑張るネ」

嬉しそうに話すマチス。そんな一人を黙つて見ていたユリカが小さな声で言葉を発する。

「私は惜しい事をした。私もタキのようにもつとポケモントレーナーとして素直になるべきだつた。そうすれば私の横にいる一人のようには、ポケモントレーナーとして輝けていたのだろうな……」

ユリカの声は一人には届いていなかつた。

しかし、ユリカの気持ちは一人に届いていることだろう。ポケモントレーナーとして大事な気持ち。それは、ユリカも一人と同じように戸惑っている。

そのような会話をジムの外でしているとき、ジムの中の戦いは大きな動きを見せていた。

ライチュウが地に倒れるヒーロを見下ろしているのだ。

ヒーロは耐えることが出来なかつた。いつ、どこから攻撃がくるか分からぬ不安。トレーナーのタキが横にいられない不安。色々な不安の積み重ねは表にも裏にも隙を生む。その隙をライチュウは見逃さない。この状況は必然といえるものであつた。

ヒーローを背負い、ジムの外へでようと行動するライチュウ。しかし、ヒーローはボロボロの体でそれを拒否する。

他のポケモンなら不安に押しつぶされていたかもしれない。

しかし、ヒーローには諦めないと強い意志がある。その意志は、時に不安すら打ち破る。

だが、その意志すら打ち破るつといづライチュウは、フィニッシュを決めようとするかのように最大出力で電撃を溜め始める。

ここで電撃を食らえば終わる。そう感じたヒーローは、体の力を全て振り絞り、ライチュウに向けて火の粉を放つ。

最大の力で電撃を溜めていたライチュウに火の粉を交わす時間は無く、火の粉はクリーンヒット。今度はライチュウが地に倒れる。ダメージ的に五分とはいかないものの、逆転の可能性が見えた一撃。ヒーローの執念。

だが、思った以上に起き上がるのが早いライチュウ。ヒーローに休息の時間すら与えてくれない。いや、ライチュウが『えようとしない。

サバイバルでは相手にプレッシャーを与えるのはとても大事なことだ。無理に立ち上がり常に相手にプレッシャーを与える続ける。その心の現われに、ライチュウの足はガクガク。とても立てる状態とは思えない。

しかし、ライチュウは前に出る。一歩一歩ゆっくりとヒーローに向かい足を進める。有利なのは自分だ。そう言っているかのように自信的な表情で……

ヒーロはもう前に足を進ませることもままならない。さつき、体の力を全てを振り絞つて火の粉を放ったのだ。もう、反撃する力すら残っていない。状況は絶望的ともいえるだろう。でも、なぜかヒーロは負ける気がしない。なんだか心が熱い。いつもの熱さとは違う。なんだか分からぬ熱さ。

ヒーロは突然、叫びたくなつた。もう、我慢できない。叫ばないと熱さに押しつぶされる。そう、本能が叫んでいる。

「カゲヒヒヒ……」

ヒーロが思いつきり叫ぶ。サバイバルバトルに手馴れているライチュウも驚き、一瞬、動きが止まるほど大きな叫びだ。

その声はジムの外にいるタキには届かない。

しかし、なぜだか分からぬが、タキにはヒーロが自分を呼んでいる気がした。そして、タキも思いつきり呼びかける。

「ヒーロ……」

ヒーロと同じように思いつきり叫ぶタキ。しかし、その声に驚くものはいない。逆に、さつきから嬉しそうにバトルしていったマチスが額から冷や汗を流し、不安に支配されている。

「バトル中に……まさか……ネ」

自分に言い聞かせるように誰にも聞こえないような声でボソッと言葉を発するマチス。

しかし、マチスの思つ、まさかの事態は現実に起つ。

ジムの中で起るまさかの事態。

地に倒れ、気絶するライチュウ。そして、ヒーローとはまた違う形のポケモン。

そのポケモンがライチュウを背負い、ジムの外へ出る。この瞬間。勝負は決まった。

「まさか……本当にこんなことになるなんて……まったく、ボイは大した大物ネ」

「ヒーロー……ヒーロー?……」

タキが驚くのも無理はない。ライチュウを背負つて出てくるポケモン。それはヒーローしかいない。しかし、ライチュウを背負つて出てきたポケモンは、明らかにヒーローとは違つ形をしたポケモンなのだ。

「どうなってるの……これ?」

タキが不思議そうな表情でユリカを見る。

「タキが驚くのも無理はない。でも、安心するんだタキ。あのポケモンはヒーロー。ヒーローは進化したの」

「進化?」

タキは、進化の事をオーキド博士から聞いていない。全く分からぬのだ。

「進化とはポケモンが成長した証。ポケモンは成長すると進化する。当然、進化しないポケモンもいるけど、タキのヒーローは進化するポ

ケモン。姿は変わつてもヒーロはヒーロ。それに変わりはないわ

「そりなんだ！ よかつた。いきなりヒーロとは違うポケモンが出てきたからビッククリしちゃつたよ。でも、あのポケモンはヒーロなんだよね。なら、全然いいや！」

コリカの言葉を聞き安心するタキ。進化したヒーロに近づく。

「よくやつたよヒーロ！ そうだ。ヒーロがバトルしてる時にね、なんだかヒーロの声が僕に聞こえてきたんだ。心配のしそぎかなあ？」

ヒーロに話しかけるタキ。ヒーロも、首を縦に振りながら「カゲH」と鳴いている。

「やつぱぱつヒーロもそつ思つ？ でも、それはこことだよなー！」

そう言つた後、モンスターボールにヒーロを戻すタキ。

その後、マチスがタキに近づく。

「ブラボー！ まさか、バトル中に進化するとは思わなかつたネ。進化とはトレーナーとの心の共鳴も大事ネ。相当な信頼関係がないと独断で出来ないネ。離れて行動していくとも共鳴しあえるポケモンとトレーナーの信頼関係。正にブラボー！ オレンジバッヂはボーライに相応しいバッヂ。久しぶりにオレンジバッヂが輝いて見えるネ」

そう言つたマチスは、タキにオレンジバッヂを手渡す。

「ありがとう。僕はマチスから色々なことを学ばせてもらつた。このオレンジバッヂはその証だよね！？」

「その通りネ。ボーアとバトルできるトレーナーは幸せネ。ミーが幸せなんだから間違いなしね！」

ガツチリと握手を交わすタキとマチス。

その後、ユリカがマチスに言葉を発する。

「私も幸せだ。やつと私の持つバッヂ全てが輝いて見えるようになつた……マチス。一つ聞いていい？ 私の持つオレンジバッヂも輝いて見える？」

とても真剣な顔でマチスに問うユリカ。

問われたマチスは一つも考える様子を見せることなく、優しい笑顔でユリカに微笑みかける。

「当たり前ネ。ガールがボーアと一緒に行動することで学んだことも多いネ。だから、ガールは、オレンジバッヂが輝いて見えた。そういうことネ！」

ユリカとマチスもガツチリと握手を交わした。この瞬間。ユリカのオレンジバッヂは、輝きを取り戻した立派なバッヂとなつた。

そして、マチスと別れた二人が次に目指すのは、クチバシティの南部にあるクチバ港！

## 第一十一回 サント・アンヌ号へ動く軍団

クチバシティを南に進んだところにあるクチバ港。

二人はここで、マサキから貰ったサント・アンヌ号のチケットを使い、船に乗り込む。目指すはタマムシシティ。タキから見て四つ目のバツヂがある町で、コリカの目的地でもある重要な町だ。

船に乗り込んだ後、船員に場所を案内される。タキとユリカは、マサキから貰ったチケットの番号が違うので、別々の部屋となる。

タキが案内されたのは、サント・アンヌ号の中でも特に大きな部屋。マサキという人物の凄さをしみじみと感じる。

その大きな部屋には、今のところタキを除くと人はいない。正に選ばれた人のみが入れる部屋と言つべきか。

「こゝがタキ様の部屋となります。それと、こゝの部屋にはもう一人お客様が来られます」

船員は、タキにそひとその場を立ち去った。

しばらくして、部屋にノックの音が響き渡った。恐らく、もう一人の客が来たのだろう。

予想した通り、部屋に入ってきたのはもう一人の客人と、案内人

の船員。

船員は一通りの説明を終えた後、部屋を出でいった。

「若いのに凄いなあ。中々入れんねんでこの部屋

船員が部屋を出た瞬間、笑顔で積極的にタキに喋りにきた三十九歳の年であるう男。

タキは軽く頭を下げ、挨拶し、言葉を返す。

「別に僕が凄いわけじゃないよ。マサキからチケットを貰つたからここに入れたんだ」

「マサキさんの知り合いかいな！ そりや凄い話や。これは役に立つかも知れへんな……」

不適に微笑む男。

「まつ、短い間やけどよろしく頼むわ。わいの名前はコルト。そちらさんの名前はなんて言つん？」

コルトの発言が少し気になつたタキだが、この世界で突っ込んでもあまりいいことがないことを今までの旅で知つたタキは、あえて突つ込まない。名前を教え、挨拶だけを交わす。

その後、無言の時間が続き、静かな部屋の中、出港のアナウンスが流れる。

そのアナウンスは途中までは普通のアナウンスだった。しかし、異変は突然訪れる。

「……え、ただいま出港いたしました。確認いたしましたね。も

「一度言こましょつか。出港いたしました。それではこれより作戦実行とさせさせていただきます。実は、このサント・アンヌ号の船員は全て偽者です。ですが『安心くだせー』。我々の技術は完璧です。船の操縦はお任せください。ところによつては…………お前達は全員逃げられねえつてことだよ！ 今からお前達の部屋を訪問する。そこで手持ちのポケモンを差し出せば逃がしてやる。助かるなんて考えるんじゃねえぞ。この船を乗つ取つたのは我々、残酷非道のロケット団なんだからよー！ ガタガタ震えて待つてやがれ！」

急なアナウンスに船内は戸惑いの渦に巻き込まれる。  
ロケット団といつのはかなり凄い組織のようだ。隣の部屋などから、悲痛の声が二人の部屋まで貫通していく。  
当然、タキも戸惑う。

「何々！？ どうこいつと？ ロルトは何か分かる！？」

とつあえずロルトに聞いてみるタキ。

「すまんなあ。船が出港した後にでも伸び伸びと話たりひとつ思つててんけど、まさかここで出てくるとは厄介なやつちや。まつ、わざわざ名乗りしてくれたのはありがたいな。とつあえずや、タキはどんくらい強い？……そいやなあ。バツヂ何個持つとる？」

「ロルトの落ち着いた質問に、タキは大慌てで三つと答える。

「よつしゃ。最高に役立つわ。とつあえず手持ちのポケモン全部だすんや」

タキは言われた通りにヒーロとロッキーを場に出す。

「よつしや。じゅあドアが開いた瞬間、行動開始や。とりあえず、タキはわいの後ろを着いてきてくれ。相手がポケモン使つてきたときこ応戦してくれると助かるわ」

タキは、よく状況は分かつてないものの、コルトの命令に頷く。

じぱらぐして、部屋のドアが開く音がした。

恐らく、ロケット団がポケモンを奪いに来たのだろ？。

「じゃあ行くで。タキは何が起こったか分からん思うけど、とっても危険なことすんねや今から。もしかしたらひどい目に遭うかも知れん。でも、そうしな、人を・ポケモンを助けることが出来ん。タキは、それでも人やポケモンを助けたいと思うか？」

「うんー、当たり前だよー！」

「ええ返事やー！」

そう言ったコルトは、開いたドアから現れた、全身黒い服を来た、黒いベレー帽に書かれている赤色のRが目立つロケット団であろう男を思いつきり蹴り飛ばした。

「す……凄い」

その蹴りはタキも驚くほど鋭い蹴りで、一撃で黒づくめの男をノックアウトした。

「驚いてる場合ぢやうでー、早よせなあかんねやー、他のロケット団員は待ってくれへん！」

「う……うん！」

勢い良く部屋を飛び出す一人。

どんな存在なのかもイマイチ分からないロケット団。  
まだ、状況も掴めていないタキだが、サント・アンヌ号に乗る、  
人・ポケモンを助けるため動き出す！

## 第一十一回 サント・アンヌ号へ動く軍団へ（後編）

十九話で、サント・アンヌ号のチケットの枚数に関する訂正があります」といふ上で報告してもおきます。

## 第一二三回 サント・アンヌ号 ～救出作戦～

部屋の外に出た二人。  
広い通路を慌ただしく走る。

「ビ……ビバアの」れかうー。」

「とにかく走るんや。多数のロケット団員が今の音に反応してこっちに向かってきとるはずや。そうなると、残ったロケット団員が一つのエリアに集まる数が限られてくるやろ？ 道はたくさん分かれとる。十分、分散されるわ。それを利用して助けるつちゅーわけや」

走りながら説明していると、部屋を発見。その部屋の前には、ロケット団員の姿が……

「そんで、見つけもつたロケット団員はいつするー。」

ロケット団員の姿を発見するや否や、鋭い蹴りで思いつきり蹴り飛ばす。

そして、部屋の中にいる客とポケモンの無事を確認する。

この場にいるのは危ないので、客にも着いてくるよつて話。

「よつしゃ。まず一人無事や。タキ！ ポケーツと見とるだけじゃあかん。ロケット団員もポケモントレーナーや。もしもわいがしぐじつて、向こうがポケモンつこうてきたら、リザードトイシツブテで応戦してや。流石のわいもポケモンは蹴れん。人には人。ポケモンにはポケモンや」

「うん！ 分かった！」

「よつしや。じゃあ次いくで！」

同じじように部屋を回った。

「コルトの活躍は凄まじく、タキの出番は全くない。奪われそうになつたポケモンだつてきちんと助ける。頼りになる男だ。

きっと、武術にはかなりの自信があるのだろう。時には相手の口ケット団員二人同時に出てわすといつたこともあつた。しかし、コルトはつわりと倒してみせる。

「凄いよコルト！ なんだか無謀な状況でもいけそつな気がしてきた！」

「なんも凄ない。まだ助けられてへん。凄いっていつのは助けきつたときにでも言ひてくれ」

タキは普通にコルトがかっこいいと思つた。  
熱さがあるにも関わらず、大事なところではクールな男はツボなのだ。

その時だ。一つの部屋から女性の大きな叫び声が聞こえてきた。  
タキはこの声に聞き覚えがあつた。そう。コリカだ。

「ポケモンを渡せ！ そうでないとただじやすまんぞ！」

口ケット団員がコリカの持つモンスター・ボールを奪おうとする。

「嫌！ あなたにも家族がいるでしょ？ その家族と離れるのは嫌でしょ？ それと同じ。私のポケモンは私の家族よ！ 家族を渡せ

るはずがないわー。」

必死で抵抗するコリカ。

そこに一人と、着いてきた客達が駆けつける。

「やうやで姉ちゃん。自分のポケモンは家族や。わいはそれを奪うロケット団が許せん。どんな理由があるんかは分からん。もしかしたら大きな事情があるんかもしれん。でもな、これはやつてええことやない。どんな理由があつたとしてもやつてええことやないんや。それでもやる言つんやつたら、わいは容赦せん」

そういう終わると、コリカからポケモンを奪おうとしたロケット団員を思いつきり蹴り飛ばした。

その時だ。大勢の人に入っている大きな部屋の扉から大きな拍手とブランボーという声が流れ込んできた。

「そうだ。そうだよ。忘れてたぜえ。何やら大きな音がしたと情報が入り、部屋を見に行けば誰も居ない。この部屋は誰だつたかなと見てみれば、なんと名前にコルトとあるじゃないか。こんなことなら大袈裟な行動するんじやなかつたぜ。反省だ反省。本当、邪魔だなコルト。邪魔だなあ！！」

一斉に後ろを振り向いたそこには大勢のロケット団員とボスらしき男。

完全に入り口付近はロケット団により封鎖されており、部屋の外に出れる状態ではない。

「その声、聞き覚えあるなあ思つとつたんや。しかも、その目立ちたがり屋な性格。リュージやな？ 毒蛇リュージ言つた方がええか。

まさか、幹部と出会えるなんて思ひつけんかったわ

タキもココ力も周りの密も、一人の会話にまつたくつこていけない。

とりあえず分かる」と。それは、ロケット団とコルトには、何か深い関わりがある。ただ、これだけだ。

## 第一十四回 サント・アンヌ号 ～読めない毒蛇～

誰も分からぬ状況。そして、静かなこの空間。そんな奇妙な空間で、しばらく動かぬまま睨みあつリュージとコルト。

「リュージ様……」この状況、我々は圧倒的優位に立つております。力押しでポケモンを奪つた方が早いのでは……？」

誰も動かぬ状況に辛抱ならなくなつたのか、ロケット団員の一人がリュージに意見する。

しかし、これがいけなかつた。リュージは、自分に意見したロケット団員を殴つたのだ。

殴られたロケット団員はピクリとも動かない。

「す……凄い……」

タキが思わず声を上げる。

タキが驚くのも無理はない。リュージはロケット団員をただ殴つたわけではない。拳が見えなかつたのだ。恐らく、タキ以外の人間にもリュージが放つた拳は見えなかつただろう。それくらい早かつた。

「相変わらずやな……毒蛇の異名は伊達やないわ。軌道が分からへん自由な拳は、まるで自分を表しとるのよ。毒蛇」

その拳はコルトですら認める拳。相当凄いのだ。

「お前に言われると照れるなあ。自信がついてしまうよ。だが、俺

は別に暴漢野郎じゃねえ。自信をつけるべきじゃない。俺はただ馬鹿な事を言ひ野郎がいたから殴つただけのこと。勘違いしないでくれよ皆さん。俺は結構紳士なんだぜえ？ 初めは無理やり奪おうとしたけどよー！

自分で発言しながら自分で笑っているリュージ。正に奇妙。

「とりあえずどうしたいねん？ 早よせな、こんな状況みんなの体に毒やわ。そこで倒れてる団員の言ひとおり、力押しでくんのが一番早いと思うだ。まあ、わいが止めるけどな」

そのままペースを握られるのは不味いと思ったコルトが挑発を仕掛けた。

「おいおい。これを見ろよ」

リュージが着ている、革ベストのポケットからモンスター・ボールを取り出す。

「腐つてもトレーナーなんだぜ俺達は？ なら、これしかないだろうがよー！」

そう言つと、ポケモンを出すリュージ。

そのポケモンは色が紫色をした蛇のようなポケモンで、正に毒蛇に相応しい名前のポケモンである。

「ほんまに読めそうで読めん幹部やな。よっしゃ。出番やでタキ！ ポケモンバトルでぶち負かしたれ！」

「ほ……僕ー？」

いきなり名前を呼ばれたので慌てるタキ。

「当たり前やろー。言つたやんけ。ポケモンにはポケモンや。わいはトレーナーちやうからポケモンは持つてへんねん。バッヂ三つの力見せたれ！」

コルトの言葉で何かを決心したのか、さつきまだとは違つトレーナーの顔で、大きな声で「うん！」と言ふ。リザードと共に前に出るタキ。

まずは、相手のポケモンをモンスター図鑑で調べる。

名はアーボック。体長3・5m。体重65・0kg。腹部にある恐ろしげな顔のよつた模様が特徴的なポケモンだ。

「それ、図鑑か？」

不意にタキに質問するリュージ。

タキは、少し睨みつけるよつて「やつだけど？」と返す。

「幸せだなあ。いい環境に恵まれてるよお前。ビッグセ、そのポケモンも貰い物だろ？ 残念だが負ける気がしねえ。楽勝だぜこんなのがよおー！」

また、自分の言葉で笑つリュージ。  
これにはタキもムツとする。

「環境なんて関係ないよ。ポケモンとトレーナーは環境とか貰い物とか、そういうところで結ばれてない。間違つてるよー！」

タキも負けじと反論する。

「やつ怒るなよ。軽いジョークだ。早く始めよ!……分かつてると  
は思うがてめえら全員に言つ。何があつても手を出すなよ。これは  
俺といつとのバトルだ。もし、誰かが手を出した場合、俺の拳が  
飛んでくることをお忘れなく」

そう言つた後、リュージもアーボックと共に前に出る。

「じゃあ始めようかあ! ぶつ殺潰してやるぜえ。戦意喪失するく  
らこよめー!」

ポケモンを奪うために船を奪い、作戦を実行していたと思えば、  
自らポケモンバトルを要求してきたロケット団幹部の毒蛇リュージ。  
リュージの本当の目的は掴めないでいるが、とにかく今は戦うし  
かない。

タキとリュージ。異色とも言えるポケモンバトルが、今始まる。

## 第一一十五回 サント・アンヌ号 ～異色対決～

「早速行くぜえ。アーボック。作戦Aから行こうかあ！」

リュージの命令により、アーボックがゆっくりと動き出す。

「ヒーロー！ 先制攻撃の火の粉だ！」

しかし、ヒーローはタキの命令を聞こうとしない。なんだか分からぬが、とても得意気な顔でタキを見ながら、指をチツチツチツと動かしている。

「なんだ。命令も聞けねえのかよてめえのポケモンは！ マジで楽勝だぜえ！」

ケラケラと笑うリュージ。その顔には余裕以外の言葉が見つからない。

「どうしたんだヒーロー！ 火の粉を放つんだ。やられちやうよ！」

焦るタキ。  
すると、ヒーローがクルッとアーボックの方へ振り返り、火の粉を放つ。

「凄い……凄いよヒーロー！」

これは火の粉と言つべきなのだろうか……部屋にいる全員が目の当たりにした光景。

それは、火の粉とは思えないほどの火力。火炎放射とでもいった

ところであらうか。

「これで余裕をかましていたリュージの余裕も消えることだらう。誰もがそう思つた。しかし、リュージは変わらず笑い続けている。「確かに凄い威力だ。ビックリだぜ。でもよお、当たらねえと意味ねえんじゃねえか？ そこに黒焦げになつた俺のアーボックはいるか？ いやいねえ。ということは当たつてねえつてことだよ糞野郎！」

確かにリュージの言つようによるとアーボックはそこにいない。なら、アーボックはどこにいったのだろう……

「上……上やタキ！」

真っ先に気づいたコルトがタキにそう伝える。

「おいおい。助言は卑怯だぜ。でも、もう遅い。俺のアーボックは、もうでめえのポケモンを捉えた」

避ける時間は無かつた。空高く飛び上がつたアーボックの体が、ヒーローへ、のしかかるように接触する。大ダメージとはいかないが、多少のダメージは免れない。

「アーボック！ そこから巻きついてやれ。一気に決めよ！」

のしかかつた状態のアーボックが、軟らかい体を器用に使って、ヒーローに巻きつき、苦しめる。

「どうしたよ？ やっぱりこんなもんなのか？ 楽しませろよ。ま

「まだ俺は燃えちゃいねえぜえ？」

「大丈夫。ヒーロならやれるよー。」

必死に励まし続けるタキ。

タキは励ましながら打開策を考える。しかし、中々打開策が浮かんでこない。焦る一方だ。

対するリュージは焦るどころか未だに笑い続ける余裕ぶり。状況の流れは見て分かるほどリュージが有利。

するとその時、ヒーロが精一杯の力を振り絞って立ち上がり、巻きつくるアーボックを振り払った。

「まさかの展開だ。不味いな……リザードは小さな身体の割に力は強い……見誤つたぜ。アーボックの巻きつくる力を振り払いやがったなんてよおー！」

初めてリュージの笑いが消えた。アーボックは身体の割に力はそれほど強くない。

その身体の差をヒーロは力で打ち破つたのだ。

「やつた！ いいぞヒーロ！ そこから思いつきり体当たりだ！」

巻きつきを振り払われて混乱しているアーボックに、ヒーロは体当たりを当てる。

体当たりを食らつたアーボックは、その衝撃でダメージを受けるが、衝撃により我に返る。

「やるじゃねえか。これでこそバトルだぜ。よし、アーボック。作

戦Cに変更だ」

「ヒーロー！ 間髪容れずに火炎放射だ！」

ヒーローが思いつきり火炎放射を放つ。

しかし、アーボックは身体の割に素早い。サッと横にかわされる。

「甘いぜえ？ そんなガムシャラに放つたところで当たんねえよ。  
学習しようぜ？」

リュージがタキを挑発する。

「ヒーロー！ 火炎放射が駄目なら体当たりだ！」

見事にタキはリュージの挑発にのつてしまつ。  
これもまたガムシャラな命令である。

だが、ヒーローはタキを信じて命令を素直に聞き体当たりの構え。  
しかし、それは見事に打ち崩される。アーボックの尻尾が的確に  
ヒーローを捉えたのだ。

「させねえよ。バトルはリズムだ。相手のリズムに合わせてたら勝  
てるもんも負けちまう。終始リズムは渡さねえ。これが大人のバト  
ルつてやつだ……ククク。まだまだ若いんだよてめえは！ 勢いだ  
けで勝てるなんて思つてんじゃねえぜえ？」

確かにタキの命令パターンは大体分かる。

それに対し、リュージは色々な手で攻め、相手を混乱させつつ徐々に追い詰めていくタイプ。どちらの戦い方が上手いかと言わいたら、リュージだと答えてしまうだろ？

「確かにそうだね。でも、僕は呑わせないよ。相手のリズムに呑わせたら負けなんだ。僕は、自分の思ひ通りに命令する。そりだよね！？」

タキはもう、リュージが悪い組織のロケット団の幹部だということを忘れている。

ただ、一人のポケモントレーナーと戦っているという感覚に陥っている。しかも、自分よりも戦いを熟知していて強い相手。

今はワクワクすべき時ではない。しかし、タキのワクワクは止まらない。ポケモンバトルという魔法に完璧にかかっているのだから。

「間違っちゃいない。正確な判断だ。でも、どうする！？ てめえは今、絶体絶命だ。さあ、どんな悪足掻きを見せてくれるんだあ！」

？

それはリュージも同じことなのかもしれない。

リュージも今、自分がロケット団の幹部だとこいつことを忘れているのかかもしれない。

真意は分からぬが、そうとしか見えない。

「ヒーロー、そこから一歩も動いちゃ駄目だ！」

タキがだした命令は動かずその場で待機しようとこいつ。この命令にはリュージもハテナ顔を見せる。

「僕がリズムを合わせるからいけないんだ。僕がリズムに呑わせなければリズムはとれない！」

自信満々にそう言いのけたタキ。

「馬鹿だなてめえ……マジで若いぜ。まいい。持久戦ならいつまでも付き合つてやる。なめんなよ糞野郎が！」

その後、しばらく時間が流れる。

一体はまったく動かず睨みあいを続ける。

しかし、ここで展開は動く。

「ヒーロー、ゆつくりと間合いを詰めるんだ！」

動いたのはタキ。持久戦に耐えられなくなつたのだろうか。

ジリジリと詰められていく間合い。

そして、ヒーローの足がアーボックの間合いに触れる。ここはもうアーボックの世界だ。

「結局、持久戦を制したのも俺だつたようだなあ！？ アーボック！ 一撃で仕留めてやれ。これで終いだぜえ！」

ヒュージがファニーシュトドウにような命令。

「ヒーロー、それを避けて全力で体当たり！ これで決めよう！」

すかさずタキもヒーローに命令を送る。

素早く伸びるアーボックの尻尾。

その尻尾はヒーローを確実に捉えたと思われた。

しかし、その尻尾はヒーローを掠めただけでダメージには至らない。

「まさかの事態だ……耐えろアーボック！ 根性見せやがれ！」

リュージの言つようにアーボックに体当たりをかわす時間はない。アーボックの尻尾は伸びきつており、アーボックの体に尻尾が戻るまで時間がかかる。そのロスは大きい。

尻尾が体に戻る前に、ヒーローの体当たりがアーボックにクリーンヒット。大ダメージは免れない。  
もしかすると……

「立て！ 立ちやがれアーボック！ 負けちゃなんねえ！」

必死にアーボックに呼びかけるリュージ。

しかし、その思いは届かない。アーボックは元壁に気を失う。

「やつた！ やつたよヒーロー！ 僕達の勝ちだ！」

「知らねえ。もう知らねえぜ？ 俺はもう抑えきれねえ」

バトルに勝つたタキ。

しかし、リュージがこのままおとなしくしているはずはない。まだ、本当の意味でのバトルは終わっていない。

## 第一十六回 サント・アンヌ号 ～狂氣～

ポケモンバトルに勝利したタキ。

これで終わるかと思われたこの事件。しかし、事件はまだ終わらない。

どうもリュージの様子がおかしい。さつきまでの余裕ぶりがまるで無かつたかのような苦しそうな顔でフルフル震えている。周りのロケット団員もビレッて震えているみたいだ。

「聞きやがれ……」写真を撮り、コルトとタキの写真をブラックリストとして報告しろ。作戦は失敗だ。全ては勝手な行動をしたリュージのせい。そう言えばお前らは助かるはずだ。もう一度言つや。写真を撮り早く逃げる。俺が壊れちまう前によー！」

リュージが言葉を喋るのも苦しそうに団員に命令を伝える。

その時、ロケット団員達の震えが止まった。リュージの言葉が心に伝わったのだろう。迅速にカメラを持つ。

「させへん！」

コルトが動く。

「邪魔すんな糞野郎があ！」

だが、リュージが邪魔をする。コルトもリュージ相手ではスムーズにはいかない。止めることは難しい。

そして、団員達が写真を撮り終えてしまつ。

その後、団員達は一斉に部屋の外へ逃げ出した。

「ヒヒヒ……危ねえ。ギリギリセーフだ。まさか、負けちまつとはなあ。だからポケモンつてやつは気にいらねえ。俺の思い通りにいきやしねえ。だから鍛えちまう。最終的に信じるのは自分の拳。ヒヤハハ。ヒヤハハハ！ さあ、一ラウンドを開始しよう。ゲームは簡単だ。勝利条件。俺を倒し捕らえている船員を救出する。敗北条件。俺に倒される。もしくは、誰も操縦者のいないこの船がどこかにぶつかり沈没し、全員死ぬ。どうだ！ 面白いだろ！？」

リュージの笑いはもう余裕の笑いじゃない。何かにとらつかれているかのような笑い。

確実に狂つてきている証拠だ。

「おもうこやないかい。お前だけは絶対に逃さへん。タキ。下がつとれ。一瞬で倒したる。それで、わいらの勝利にしたる！」

タキに下がるようになりコルト。  
しかし、タキは下がろうとしない。

「駄目だよ。コルトは船員達を助けに行つて。リュージは僕が何とかする」

「何言つとこねん！ タキには無理やー。おとなしく下がつとれー！」

無茶なことを言つタキに少しきつめに言葉を発するコルト。  
だが、やはりタキは下がろうとしない。

「駄目。そのまま倒しちゃつたら嘘のままで終わっちゃう。ポケモ

ントレーナーにはポケモントレーナーにしか分からない気持ちがあるんだ。だから譲れないよ」

「分かつた。でもな、あいつを倒さな先には進まれへん。タキにあいつを倒せるか？ 無理や。どうやってわいが部屋から出るんや？」

「大丈夫。僕に考えがあるから」

そう言つと、コルトに向か耳打ちするタキ。

「成功せんやろそれ……」

「大丈夫。信じて！」

成功すると言い張るタキ。

「分かつた。しゃーないなあもつ！ これで、みんなになんかあつたらわいはタキを許さんや？」

「任せて！」

タキの頼みを了承するコルト。

しかし、その表情は不安で一杯といった感じである。

「最後の作戦会議は終了か？ ジャあ行くぜえ？ ゲームスタートだ。暴れてやる。壊してやる。ヒヤハハハハ！」

ゆっくりと近づいてくるリュージ。

対して、リュージに全力で突っ込んでいくコルト。

先制攻撃はコルト。ハイキックでリュージの顔面を狙いにいく。

「遅すぎるぜえ？ 死ねやあ！」

リュージの拳の方が圧倒的にスピードが上。

コルトを完璧に捉えたと思われた拳。しかし、リュージの重心が大きく崩れ、地に倒れこむ。当然、拳は当たらない。

「ねつコルト！ 成功したでしょ！？」

そう。タキがリュージに思いつきタックルしたのだ。  
リュージからしてみれば戦う相手などコルトしか頭にない。タキの行動など気にもしなかったのだ。

「やつてみるもんやな！ タキ。絶対やぞ。約束やぞ！」

コルトは、そう言つと、部屋の外へと去つていった。

「てめえ。てめえもか。俺の邪魔をするやつは誰一人許さねえ」  
「自分が作つた嘘の自分で多くの人を巻き込むな！ そんなの最低だよ！」

タキがリュージの胸倉を掴みかかる。

タキが人の胸倉を掴むとき、それは怒つたときだけだ。

タキは今怒つている。これはポケモントレーナーにしか気づけな

い。  
そんな怒  
り。

## 第一一十七回 サント・アンヌ号 ～終結～

「嘘の自分？ 僕は僕だ。誰でもねえ。分かったような口で説教垂れてんじゃねえぞ糞野郎が！」

瞬時に胸倉を掴むタキの手を振りほどくリュージ。そして、タキの顔面田掛けて拳を振るつ。

リュージの拳を避けることなど出来るはずもないタキ。拳をモロに顔面に受け、地に倒れこむ。

「痛えか？ 痛えだろ？ 僕に説教垂れるとこつなんだ。分かったらおとなしくしどけ！」

「暴力に逃げるな！ 今、辛いでしょう？ それは自分から逃げてるからだよ」

ようよひと立ち上がりそう言い放つタキ。

この言葉に、リュージの怒りボルテージは更にヒートアップする。

「つるせえ！ てめえに俺の何が分かる？ 知ったような口聞いてんじゃねえよ」

リュージはまたタキの顔面を殴る。しかし、また立ち上がるタキ。

「てめえは相当、持久戦が好きらしいなあ？ ポケモンでは負けたが、これなら負ける気がしねえ。付き合つてやるぜ」

そう言つたリュージは、更にタキの顔面に殴りかかるうつと拳を構える。

その時、タキをかばうようつてタキの前に立つユリカの姿が、……

「もうやめて！ タキを殴るなら私を殴りなさい！」

「いいぜ。その願い叶えてやるよ」

タキをかばうユリカに殴りかかるうつとするリュージ。

しかし、タキをかばうユリカを更にかばうよつて、残る力を振り絞つてユリカの前に立つタキ。

当然、その拳はユリカではなくタキにヒットする。

「どうして……タキはボロボロなのよ？ これ以上殴られたら……私のことなら大丈夫。慣れてるから。だから、タキは安静に……」

涙を流しながらタキを心配するユリカ。

「僕は誰も傷つけたくないんだ。コルトとの約束も守れないしね。僕は大丈夫。だから、泣かないでよユリカ。僕まで悲しくなっちゃう」

二人が話している間、ずっとブツブツと怒っているリュージ。

「なんで倒れねえ……俺の拳は弱いか？ いや、弱いはずはねえ。じゃあ、なぜ倒れねえ？」

自分でブツブツ言つている間に、怒りは最高潮に。

「なんでなんだよ！俺の拳は痛えだろ？が？凄えだろ？が？なのになぜ倒れねえ？俺はてめえにポケモンでも勝てねえ。暴力でも勝てねえ……何にも勝てねえのかよお！？」

思わず、大声で叫んでしまうリュージ。

その顔は、怒りの叫びというより悲痛の叫びに聞こえた。

「勘違いしてんんだよ。だから自分から逃げてるんだ。勝負は勝ち負けだけじゃない。ポケモンもそうだよ。当然、勝ち負けもポケモントレーナーとして大事。でも、勝負を楽しみ、ポケモンを愛する心があれば、どれだけ負けても立派なポケモントレーナーだ。だから逃げないでよ。自分の気持ちからは逃げちゃ駄目だ！」

その言葉がリュージの耳に届いたとき、リュージの動きが止まつた。

リュージの心の思い出が甦り、心の整理を始める。

「ごめん。ポケモン持つてねえんだ。」「ごめんな……やつた。モンスターボールだ。これでみんなと遊べる……全然、捕まらない……やつた！捕まえたぞ！捕まってくれてありがとな。絶対大事にするからなアーボ……」

お前のアーボ弱すぎだろ。ああ、すまないすまない。アーボが弱いんじゃないな。トレーナーが弱いんだ……こんな弱い奴、相手に

してられねえよ。行こうぜ……

「めんなアーボ。俺が弱いせいで。でも、絶対強くなるから。そん時まで見捨てないでいてくれよ……

弱いな……弱いわ……弱い……弱い弱い弱い……

大丈夫だアーボ。どんな手を使つても強くなつてやる絶対な……

おめでとう。これで君もロケット団の一員だ。しつかり働いてくれたまえ……おめでとう。これで君も幹部に昇格だ。これは名誉なことだぞ？ まあ、君の場合、ポケモンバトルに関してはそれ程、期待してはいない。君自身の腕を見込んでの昇格だ。そのところを勘違いしないよつにな……

「ふるせえ。バトルが弱いことくらい知つてんだよ。だから俺は自分で鍛えた。それで幹部に昇格した。それだけじゃねえか。いらねえこと言つてんじやねえ……

どれだけ自分を鍛えても心が晴れねえ。やつぱり俺は……いや、そんなはずはねえ。俺は幹部だ。バトルは弱くても俺自身が強いからいいんだ。でも……

勝負を楽しみ、ポケモンを愛する心があれば、どれだけ負けても立派なポケモントレーナーだ……

「ふっせえ。餓鬼が一丁前に語つてんじやねえよ。でも、それが本当なら俺だつて……

リュージの心の整理が終わった。

「本当だな？ なら、俺みたいなバトルが弱い糞野郎でもやり直せ  
るんだな？ てめえの言つて、勝負を楽しみ、ポケモンを愛する心が  
あればよお？」

さつさまでの殺氣が無くなつたリュージ。冷静にタキに話しかけ  
る。

「当たり前だよ。それはどんな人にだつて持てる心だ。その心を隠  
す必要なんて無いんだよ！ それに、リュージは弱くなんかない。  
僕にはそう感じた」

嘘偽りない瞳でそつそつタキ。

「ケツ。お世辞なんていいくら言われても嬉しくないぜ。本当にそつ  
思つなら約束しろ。俺がまたここに帰つてきたらポケモンバトルだ。  
いいな？」

その時、コルトと、警察官のような格好をした女性と、その部下  
と思われる男達が、大勢部屋に入ってきた。

「みんな無事みたいやなー？ もう安心しい。ジュンサーさん呼ん  
だんやー！ わあ、観念しいや毒蛇！」

みんなが無事で安心するコルト。相当、走り回つたようで物凄い  
汗の量である。

「そうよ。観念しなさいーー。もう逃げ道は無いわ！」

ジュンサーがリュージにそういふ言ひへ。

もう捕まえる準備は万端だ。

「やあ。船が正常に動き出したのに帰つてくるのが遅いから逃げたのかと思つてたぜ。安心しりよ。おとなしく捕まつてやる。だが、もつれよつと待ちな。俺はまだ答えを聞いてねえ」

タキの方へ振り向き、そいつにリュージ。

「そんなの考へるまでもなくOKだよ。ただし、素直なリュージならだけだね！」

「ケツ。一言多いぜ。言われども約束は守る。さあ、連れて行きな。大サービスで抵抗しないでやるからよお」

「ついしてリュージはジュンサーによりヘリコプターで連行された。リュージはもう一度と同じ過ちを繰り返すことはないだろう。最後の最後に素直なポケモンに対する気持ちを取り戻したのだから……」

「ボロボロやなあタキ」

コルトがタキに近づき、笑いながらそいつに言ひへ。

「でしょ？ でも、みんな助かったんだ。そう考へると楽なもんだよ」

タキも同じように笑う。

「嘘つやないか。よつしや。みんな、助かった記念にこいつを胴上げやー！」

その言葉に部屋の中にいる客の全員が迷いひとりせなべタキの周りに集まつた。

そして、タキを抱え上げ、胴上げの開始である。

「わあ。初めてだよ胴上げー！」

みんな楽しそうにタキを胴上げする。タキも楽しそうに宙を舞つ。わいつれまでの恐怖が嘘のようだ。

少しだけ、サント・アンヌ号事件は幕を閉じた。船も軌道を修正し、長かった航海は、ようやくタマムシシティ前へと到着した。

## 第一十八回 ユリカ

タマムシシティ。町の中でも施設が多いことが特徴であり、その中でも、町の中心に建つタマムシティパートは知らない人はいないと、いうくらい有名。

当然、この町にもジムリーダーはいる。そして、ユリカの目的の場所もある。かなり重要な場所だと言えよう。

そんなタマムシシティにタキとユリカ。そして、コルトの三人が足を踏み入れる。

そう。コルトもタキ達と行動することにしたのだ。

コルトは、サント・アンヌ号の一件で一人のことを気に入つたらしい。断る理由もないのにタキ達は快く承諾した。だから一緒に行動しているということだ。

「これからどうないするん？ 早速バッヂ獲りつてのもおもういと思うけど」

三人の中で明らかに年上のコルトは、リーダーシップを取るかのように早速、二人に問い合わせてこれから行動を決めようと考える。

確かにその方法もある。しかし、ここはユリカの目的の場所。

タキがバッヂ獲得のためにジム戦に挑戦するより先にユリカの目的を優先するほうがいいんじゃないだろうか。

タキはコルトに、そう答えを返した。

「気にしなくていい。タマムシジムに行けば全てが分かるから……」

何やら緊迫した顔つきでそう言つコツカ。

どうやう、タマムシジムにゴリカの田的はありそつだ。

そんなゴリカが放つ空氣を察した一人は何も言わず頷き、タマムシジムへ足を進める。

タマムシジムの前に立つ三人。  
いつもならジムの前に立つとワクワクするタキ。しかし、タマムシジムの前に立つタキにワクワクはない。

それは、自分の側にタマムシジムを見ながら悲しい顔をしているゴリカがいるからだ。悲しい気分な人がいる中、自分だけワクワクするなんて出来ない。

こんなに暗い気分で挑むジム戦は、タキにとつて初めてだらう。むしる、ゴリカをこんな悲しい気分にさせるタマムシジムに密かな怒りすら覚えている。

タキは怒りに身を任せタマムシジムに足を踏み入れた。

タマムシジム。そこは、植物の香り漂う自然に囲まれたジム。そして、周囲に居るジムの関係者と思われる人達は、全員和服を着ている女性。

タキの想像とは違い、清潔感漂うタマムシジムに少し唚然とした。唚然として立ち止まつていると、ジムリーダーと思われる女性がタキ達に向かい歩いて来る。

「これはこれは。よくいらっしゃいました。私は、タマムシジム、ジムリーダーのゴリカと申します」

わたくし

とても丁寧にお辞儀をして挨拶をするエリカに、タキは思わずお辞儀で挨拶を返す。

「コルトは何もせず黙っている。ユリカは、やはり悲しそうな顔だ

……

お辞儀をして顔をあげたエリカは、タキの横にいるユリカの存在に気づく。

「あらあら、ユリカさんじやありませんか。お帰りなさいませ」

ユリカにもタキと同じように「撃てお辞儀をして挨拶するエリカ。

「ただいま帰りましたエリカお姉様……」

ユリカもエリカにお辞儀をして挨拶を返す。

しかし何を思ったのか、突然、エリカの表情が怒りの表情に変わりユリカの頬をビンタする。

「何も変わつてないじゃないですかユリカさん！　お辞儀のときは手は横じゃなくて前！　私が何のためにユリカさんを外に出したのか分かつてのことだ！？」

ユリカに怒鳴るエリカ。

それを見てクスクスと聞こえる周りからの笑い声。

表向きは感じる清潔感。しかし、時が流れ、内面が見え始めてくると、そこに清潔感はない。

タキの怒りは最高潮だ。すぐにでもエリカに怒鳴るんじゃないかといふくらいに……

しかしタキは動かない。タキよりも先にコルトが動いたのだ……

「わいりと出会つためや。完璧な理由やろ?」

いきなり話に割つて入るコルト。

「あなたには関係のないことですわ。ですが一つ言いたい事が……あなたもいい大人なんですから、人に対する言葉遣いに気をつけるべきでは?」

「そりゃ「じもつともや。でも、それ以上に心の言葉遣いは大事ぢやうか?」

正に一触即発。場の空気が固まる。

「いいのコルト……悪いのは私だから」

自分のせいでこんな事態になつていていることに責任を感じるユリカ。どうにか場をなだめようと言葉を発する。

そこにタキも割つて入る。

「ねえ。僕はジムリーダーのヒリカとポケモンバトルをしにきたんだ。ここは口論で争う場所じゃない。それに……口で言つて分からない人にはどれだけ言つても分からない」

少し、沈黙が続く中、コルトがタキの眼を見つめて言葉を発する。

「そやなあタキ。わいが馬鹿やつた。思いつきりぶつけたれ!」

「ルートが口論から引き下がる。

「うん。ぶつけるよ僕達の気持ち。ポケモンで！！」

タキがモンスター ボールを一つ取り出す。

「そうですね。失礼しました。しかし、今の私の気分は優れません。早期決着としたいので使用。ポケモンは一体としたいのですが、どうでしょうか？」

「いいよ。そのほうがいい」

氣分が優れないのはタキ達も同じだ。  
こんな氣分のジム戦はタキにとって初めてなのだから。

## 第一十九回。怒りのタマムシジムー ぶつけむ。みんなの思い！

コリカの出したポケモン。

タキにはそのポケモンに見覚えがあるように感じた。なんといつ  
か、コリカの持つウツドンにとてもよく似ているのだ。

その感じの正体はポケモン図鑑で調べてみると納得がいく。

名はウツボット。体長1・7m。体重15・5kg。ウツドンの  
進化系。大きな口から出る蜜の香りで獲物を呼び寄せる。

そう。ウツボットはウツドンの進化系なのだ。それは似てるわけ  
である。

そして、タキの出すポケモンは……

「タキ。ヒーロよ。ウツボットは草ポケモン。ヒーロは炎ポケモン。  
相性がいい」

タキにアドバイスするコリカ。  
しかし、タキは首を横に振る。

「どうして？ ヒーロを信じてー！」

説得するコリカ。

だが、タキはまた首を横に振る。そして……

「コリカのウツドンを使わせてくれない？」

タキのやうの一言で場は騒然となる。

「駄目……ヒーローの方が相性もいいし、実力もある」

当然のようすに断るユリカ。

ユリカの言うとおりで、ヒーローは炎ポケモンで相性もいい、タキの主力ポケモン。

対してユリカのウツドンはウツボットの進化前でタイプも同じ。この条件なら間違いなくヒーローの方が有利だ。

「それじゃ駄目だよ。言ったでしょ？ 僕達の気持ちをポケモンでぶつけるつて。だから一緒に戦おうよ。コルトも口で戦った。僕もトレーナーとして戦う。だからユリカもポケモンと一緒に戦おう？ ユリカに言えない」と。全部ポケモンで返しかねおうよ…。」

これはタキの率直な気持ちだ。

みんなで戦いたい。これはもう自分だけの問題じゃない。今から始めるポケモンバトル。みんなの気持ちを込めて戦いたい……

「でも……」

迷うユリカ。

確かに言いたいことはたくさんある。でも、ユリカは自分の姉。自分を叱ってきた思い出が甦る。簡単に反抗できるわけがない……

「悩むな姉ちゃん。そんな難しく考えんでええ。姉ちゃんが少しでもエリカに言つたりたいことあるんやつたらタキにポケモン預け。ないんやつたら預けんでええ。自分の心にちょっと聞いてみ？ すぐ答え見つかるわ」

「コルトがユリカに温かい言葉をかける。

そんな台詞を言うのはちよつとコルトも恥ずかしいようで照れ笑いだ。

しかし、そんな温かい言葉がユリカにとつて、とても助かるものとなつた。

落ち着いて自分に聞いてみると、どうしたものだろ。ユリカに言つてやりたい色々な言葉が浮かんでくる。もう……答えはでた。

「タキ！ 私……預ける！」

ユリカがタキにウツドンが入ったモンスター・ボールを投げ渡す。タキは、そのモンスター・ボールを受け取り、ユリカにニッコリと微笑んだ。

「いひちで勝手に話を進めたけど、別に反則じゃないよね？」

ジムリーダーであるユリカに確認を取るタキ。

「別によろしいですわ。それよりユリカさんは本当にお生意氣に……あらやだ。今、関係のないことですわね。それよりあなた。ユリカさんのウツドンちゃんと私のウツボットちゃんじゃ戦力に違いがあると思われますが本当によろしいのですね？」

ユリカは逆にその方が嬉しいよつで、満面の笑みを浮かべながらそう答える返す。

「うん。驚くよ。気持ちがいっぱい詰まってるからねー。」

そして、タキもウツドンを場に出す。この瞬間。ポケモンバトルスタートの合図がだされた。

ウツドンとウツボット。進化前と進化後。これだけでもかなりの戦力差がある。

なのに、相手はジムリーダー。これはタキにとつて大変なバトルとなりそうだ。

しかし、タキにはみんなの気持ちがついている。これはタキにとって最高の原動力であり、最高の戦力だ。

「ウツボットさん。軽く様子見とこきまじょ。つるのムチです」

ウツボットの頭につけてくるつるでウツドンを攻撃する。

冷静につるのムチをかわすウツドン。そして、ウツドンも同じようにつるのムチで反撃。

「待っていましたわ」

軽く微笑むエリカ。

なんと、ウツドンが伸ばしたつるにウツボットのつるを絡ませたのだ。

「あなたは進化を甘くみていますわ。進化前と進化後……力の差は歴然ですわよ！」

ウツボットがウツドンを空高く持ち上げ力任せに振り回す。

タマムシジムの落ち着いた雰囲気と相反してウツボットの繰り出す技はとても強引で力強い。

そして、力任せにウツドンを壁に掛け思いつきり振り投げる。

「ウツドンー、つるで、生えている植物につかまるんだ！」

命令を聞いたウツドンは、ジムの中に生えている木の幹につるを絡ませ、勢いを殺す。

そして、逆に木の幹を使い勢いをつけ、ウツボットに向かい自分自身を飛ばす。

思わず攻撃にウツボットは対応することが出来ず、勢いのついたウツドンと衝突。大きなダメージを負いつ。

「あら……中々考えますことね」

少し思い描いていた展開と違い、あまり面白くない様子のエリカ。

「言つたでしょ？ 気持ちがいっぱい詰まつてゐつて。絶対負けないー！」

しかし、これで終わるエリカではない。エリカはジムリーダーだ。ポケモンに関して長く精通しているベテラントレーナーだ。

「勝負はここからですわ。見せてあげましょ。ジムリーダーの戦い方をー！」

そう言つたエリカがウツボットに命令した技はねむりごな。技の名前から効果は推測できる。

ウツボットの大きな口から出る。その霧状の粉を見て、タキはウツドンとドガースの試合を思い出す。

あのとき、ウツドンはドガースの放った毒ガスを吸い込んだ。

なのでタキは、あの時と同じ「むづ」なも吸い込んでしまえばいいと考えた。

しかし……

「タキ。吸い込んではいけない。眠ってしまう。やつなると……」

「コリカはタキの考えを読んだのか、慌ただしくアドバイスする。

「やうなの？ 危なかつたあ。ありがと、コリカ！」

急いで自分の考えを改めるタキ。

ウツдинは粉を吸わないように息を止める。  
だが、これがエリカの作戦だった。

「まあ、こつまでもつでしよう。限界まで苦しめておやりなセーヴ  
ツボットセー！」

その声と同時にウツボットからハッパカッターが繰り出される。  
ねむりごなを吐き続けながらのハッパカッター。これは、エリカの  
ウツボットだからこそ出来る芸当だろう。

ウツдинは息を止めながら行動しているので、避けるので精一杯。  
とても苦しそうだ。

「のままじや敗れるのは時間の問題。タキは考える。  
もう時間がない。どうすれば勝てるのか。考えて考える。

すると、一つの案が思いついた。しかし、「れはとても危険な賭け。

しかし、やるしかない。それ以外にウツボットに勝つ策が見つからない。

「ウツドンー ウツボットの大きな口に飛び込め！」

タキの命令は誰もが予想していなかった。

「自分から倒されに来るとは……諦めましたわね！」

ヒリカは勝利を確信した。

「タキ……私も一緒に戦ってる。でも、私は声をかけてあげられるくらいしかない。頑張って……ヒリカお姉様を倒して！」

ヒリカはタキの勝利を願う。

ウツボットはウツドンが口の中に侵入するのを受け入れた。  
それはそうだ。ウツボットの口の中は溶解液が……当然、ポケモンバトルで死亡は厳禁なので、溶けない程度に制御することを義務付けをされているが、触れれば最後、一撃で終了であろう。

そんな口の中にタキは自ら飛び込ませた。

その訳には、ウツドンしか実現できやうのない。タキオリジナルの必殺技を思いついたからなのだ。

「ウツドンー ウツボットの口の間に鋭い葉っぱを食い込ませるんだ！」

タキはウツドンのもう一つの特性を思い出していた。

ウツドンの体の横についている葉っぱはとても鋭いのだ。

体当たりを防ぎ、逆にダメージを『えるほど』の鋭さ、 もつ、これしかないと考えた。

当然、ウツボットは苦しそうな表情を浮かべる。

「ウツドンー、そのまま回転して上昇ー。」

タキはさらに追い討ちをかけるようにウツドンに命令。ウツドンは息絶える覚悟で回転する。ずっと息を止めている状況だ。とてもきつい。これはもう体力勝負だ。

「頑張れウツドンー、ゴリカが待ってる。僕達が待ってる。君の勝利を僕達の気持ちが待ってるー。」

タキは精一杯ウツドンを励ます。

すると、ウツドンがウツボットの大きな口から飛び出しついた。口の中を鋭い葉っぱに切られまくったウツボットは戦闘不能。そして、耐え切ったウツドンは……

「IJの勝負……引き分けですわね……」

息がもたなかつた。田を回して氣絶している。

「ウツドン、よく頑張ったわ。エリカお姉様のウツボットと引き分ける……凄いこと」

ゴリカがウツドンの下に駆け寄り、氣絶しているウツドンに声をかける。

「これって……どうなるの……？」

### タキの素朴な疑問。

「おほん。本来なら再試合となるのですが、この試合、私の負けですわ。今まで数々の人とバトルしてきましたが、ウツドンさんにウツボットさんが引き分けるなんて初めてのこと。それもユリカさんのウツドンさん……本当に初めてづくりですわ」

ユリカの主張は、自分の負け宣言。つまり、タキの勝ちどころになる。

「ねえ。それって、ユリカのウツドンだから? なら、納得いかない。再試合だよ」

### 理由に納得のいかないタキ。

「あらあら。誤解なさらぬよう!」私は驚いているのですわ。まさか、ユリカさんがこんなに私に反抗的な行動をとるなんて……決まりには私を倒してとおっしゃるもの。本当に驚きですわ」

更に語り続けるユリカ。その顔はなぜか嬉しそうだ。

「それを物語るようなウツドンさんの粘り。本当に似るとまく言つたもので、ウツドンさんまで生意気になつてしまつて……本当に悪い子達ですか」

「なつ? わいわいと出でて正解やつたやつ?」

「コルトがエリカに対し笑顔で接する。ビリーフの変わりようだらうか。

「おほん。とにかく……」この試合は私の負けです。あなた方の気持ちの勝利ですわ

「僕は……僕自身は勝つたと思つてないから……またいつかバトルしようね！」

「ええ。もちろんですわ」

こうして、タキはレインボーバッヂを手に入れた。  
次はセキチクシティにジムがあるらしい。コルトがそこには面白い場所がたくさんあると言つて張り切つている。タキにとって最高の町なのだそうだ。

そして……

「タキ……コルト……私達。ここでお別れ。私、エリカお姉様の下でまたポケモンマスターを目指す。いつも思えたのも全てタキとコルトのおかげ。本当にありがとうございました」

言ひだすのが辛かつたのだろう。涙を流しながらそう告げた。

「泣かないでよユリカ。僕達はお別れじゃない。ちょっととの間、離れるだけ。ポケモントレーナーを続けていれば絶対会えるよ。だから……笑おうよ。僕まで悲しくなっちゃう。ほら、コルトも泣かないで！」

タキは精一杯の笑顔でユリカに言葉を返す。

「ユリカもそんなタキの笑顔に精一杯の笑顔で返す。

「そんなこと言われてもあかん。」うこうのはホンマに弱いねんわ  
い……短い間やつたけど泣いてまうわ。分かつとるなエリカ。こん  
な純粋な子、今度悲しませたりしよつたら……」

ユリカとの付き合いが一番短いコルトが最も泣いてしまっている。  
三十歳の大人とは思えない……

「承知しております。もう、私じやどりにも出来そうもありません  
もの」

エリカもそう約束した。

こうして、ユリカと別れたタキ達。またいつか会うのだう。タキがユリカがポケモントレーナーとしてポケモンマスターを目指している限り、それは必然的に……

だからタキは笑った。笑顔でユリカと別れた。いや、一時的に離れたのだ。  
しかし……

「うんうん。よう頑張ったなあタキ。ここならもう大丈夫や……姉ちゃんにはバレへんよ」

「うん……」

タキは涙をこらえていた。タマムシジムから離れたタキは涙を流した。

コルトと一緒に涙を流し続けた。

端から見れば男二人で泣き崩れている変な光景。でも、一人の流す涙は何よりも純粹な涙だ。それは知る人しか分からない、友情に溢れた涙だ。

## 第三十回。凄いぞ！ セキチクシティ！

「ユリカと離れ、涙も引いた頃、一人はまた歩き出す。  
その一步はユリカと離れた悲しみを乗り越えた証拠だ。

一人が向かうセキチクシティ。前にも言つたが、セキチクシティ  
はタキにとって最高の町というコルト。  
どうやらその噂は本当であつたようだ。

セキチクシティ。そこはあらゆる町の中で最も施設の整う町。い  
や、それはタマムシシティには及ばない。言い換えよう。セキチク  
シティ。そこは……ポケモントレーナーにとつての登竜門……

二人は、そんな町に足を踏み入れた。  
いつにもましてコルトが一コ二コとしている。それは、タキの喜  
ぶ顔が見れる確信があるからだ。

「タキ。あれを見てみい」

コルトは新たな町に興奮してキヨロキヨロするタキに対し、一つ  
の建物を指差した。

「ん？ 何！？」

タキはその指差された建物を見るだけではピンと来ない。だが、  
これだけコルトが自信を持つて勧める町なのだ。当然期待する。

「聞いて驚くなや。そこはポケモントレーナーが通らなあかんとま  
で言われるポケモンマスターへの入り口。その名もマスター・ゲート

！ ポケモンマスター田嶋すトレーナーは間違になくなぐる大会や。じつや。凄いやうー。」

タキはそのままネーミングはじめだりつかと頭にチラシと浮かんだ。しかし、それ以上にタキは大会とこいつ言葉に心震えた。

タキは願う。今すぐその大会に出たいと。しかし、それはコルトの一言で打ち崩される。

「無理や。まずバッヂは五個必要」

「なら、今すぐ取りに行へよ。僕はたくさんポケモンバトルがしたいんだ！」

食い下がるタキ。

「タキならじきひやうな想つたわ。でもな無理なもんは無理や」

冷たくやう言ひ放つコルト。

「なんだー？ コルトはなんぞやうの？」

タキは納得できなー。

「そんなムキなんや。マスターゲートはまだまだ先や。どう考えても無理やう？」

タキはホッとした。なんだそんな理由か。そう想つて安心した。しかし、その安堵感もまたコルトの一言こよつて潰されるとなる。

「後な。上には上がおる。タキの田指すポケモンマスター。ポケモン持つてへんわいが言つのは変やけど、ポケモンバトルがしたいだけやつたらなれんで?」

タキは何も言い返さない。いや、言い返せない。これだけはつくりと言われてしまつたのだ。言い返す言葉がない。

よく考えてみれば、タキは人からはつきりとしたアドバイスをしてもううじが多い。そして、その度にタキは成長する。

「とまあ、ここまでがマスターゲートの話や。ちよつとへこんだやろ? それはそれで終わりとして、今からは嬉しい話や。修行やで修行。意味分かるやう?」

「コルトから笑みがこぼれる。ビリヤリマスターゲートへの秘策のようだ。」

「うふ。意味は分かるけど……どうでやるの?」

「それはわいに着いてき。これでタキはまだまだ強くなる。マスターがまだまだ先でよかつたわ。これで優勝に手が届く!」

意氣揚々とそう語るコルト。その言葉は自信に満ちている。

「そんなに凄いんだ……、うん。期待できるー。」

タキもようやくその気になつたようで、急ぎ足でコルトの後を追う。

「コルトの秘策とはいつたい何なのか。それはコルトにしか分から

な  
い。

## 第三十一回 ロルトの思惑

「ロルトが向かつた場所。そこはセキチクシティにある一つの施設。施設の前に大きく掲げられてある『マサヤ道場』と書かれた看板。それを見て推測するからに、どうやらポケモン道場のようだ。バル等も教えてくれるのである!」……

「なんだか凄そうな場所だね……」

その大きな看板に書かれてある力強い文字を見て、そう感じるタキ。

「凄そうやない。凄いんや」

タキの言葉に対し、力強く断言するロルト。

「じゃあ、行こか」

道場の中に足を踏み入れる一人。

そこは、ジムのような作りで、様々なフィールドが用意。そして、たくさんの人の数。

そのたくさんの人の目が全て一人に向けられる。

少しビビるタキ。そして、そんなタキを見て意地悪く微笑むロルト。

すると、恐らく道場の師範である男が一人、二人に近づいてくる。

「なんや、われ等道場破り…… ロルトはん?」

その男。一人の前に立つてこななり喧嘩を売るよつにメンチを切る。

見た田もコルトより若く、ざつやう血の氣が有り余つていいようである。

しかし、コルトがいると確認した途端、一步引いた。

「相変わらず態度悪いのマサヤ」

呆れたようにコルトが呟く。

「誰に似た思てはるんですか。でつ、餓鬼連れて何用やコルトはん。もしかして、入門希望ですか？」

明らかに偉そうな男。タキは、心の中でふつふつと怒りに燃えていた。

全く話についていけないので、死んでも言葉には出せないのであるが……

「そのもしかしてや。マスター�ートが始まるまでええ。優勝できるレベルまで鍛えたつてくれや」

その言葉にマサヤの眼の色が変わる。

「こくらコルトはんでも冗談はいけまへん。その餓鬼、そんな強いんでつか？」

「いや、まだまだ。でもな、素質はある」

まだまだと言わたときは、もつまご返してやれうと考えたタキ

だが、素質はあるところに言葉に少し満足してしまって、言葉を発しようと口を閉じた。

「コルトはんにそこまで言わせるんなら相当やな……分かりましたわ。じゃあ、わての道場の誰か一人に勝てば入門許しましょう」

明りかに上から優位にコロコロ笑い言葉を発するマサヤ。タキは心の中で思う。絶対に入門してマサヤを倒してやるヒ。

しかし、マサヤのそんな笑顔はコルトの一言によって吹き飛ばされる。

「それじゃあかん。マサヤ。お前がやれ」

自信満々にセリフを口にするコルト。

タキは「はい」の時、心の中でコルトを祝福した。

「コルトはん……本気でつか？ 素質あるんでしね。将来棒に振りまっせ？」

この時のマサヤの顔は緊迫していた。  
どうしてこう表情をしてこられるのか……それはタキには理解できなかつた。

「振らへんよ。むしろ、そつからタキは伸びる。ステップ一はそつからなんや」

コルトの思惑はよく分からぬ。マサヤの素性・実力はよく分からぬ。

しかし、そんなタキにも分かることがある。

「ねえ。二人の話からじて、僕はマサヤに負けるの？」

キツと睨みながらそう言つタキ。

マサヤはその言葉に少し困惑の表情を見せる。

「わうや。わてには勝てんよ。しかも、ボコボコされるわ。だからこや。だからこそ分からんねん。コルトはこの言つてる意味が……餓鬼……あんさんの何が凄いんや？」

「何が凄いかなんて分からないよ。でも、一つ言えることがある。僕の名前は餓鬼じゃない。タキだ」

はつきりとそう言い返すタキ。

マサヤはその言葉に対し、困惑が吹き飛んだような笑いを見せる。

「ハッ！ 言つてくれるやんけタキはん。分かりましたわコルトはん。のつたりましょ。でも、どうなつても知りまへんで……」

マサヤは道場の門下生に大きな声で声を掛ける。

「ええなあお前等！ 今から久しぶりにわてのバトル見せたるわ。よう勉強しいや。でも、もしバトル中に下衆な笑いや私語が聞こえてきてみい。即、この場から消えてもらうで。永遠になあ

トルを愛しているかということが分かる一言だ。

その言葉は、とても厳しい言葉に見えるが、どれだけポケモンバトルを愛しているかということが分かる一言だ。

「じゃあ、始めましょかタキはん。使用ポケモンは一体。これで全てが分かりますわ」

タキは静かに頷いた。

タキは負ける気など更々ない。タキには勝つて場をアツと言わせることしか頭にない。

そのはずだった。そのはずだったのだ。しかし、タキは圧倒的に敗れた。

タキのヒーローが、無残にも地に倒れているのだ。マサヤのバリヤードというポケモンによつて……

コルトは頭の中で一人の差を分析する。

マサヤの戦術は理論的でありながら勢いもある。最も、ポケモンマスター向けな戦術。しかし、それはポケモンを愛する戦術とはいえない。ポケモンバトルを愛する戦術なのだと。

タキのバトル戦術はポケモンと共に戦う戦術。確かにタキはポケモンを愛している。ポケモンバトルを愛している。しかし、それはポケモンを愛しているからポケモンバトルを愛しているのだ。それは悪いことではない。しかし、ポケモンマスター向けのバトルではない……それだけではいけない。

「どうやタキはん。宣言通りやつたやろ」

自信満々にそつぱりマサヤ。

しかし、そんなマサヤの言葉にタキは何も言わない。

それ程、マサヤとのバトルは圧倒的だつた。正直、タキはマサヤのバトルで何もできなかつた。何も残せなかつた……

「答えろやタキはん…… 答えろやタキ！ なんでもええから答えんかい！」

マサヤはタキに大きな声で問いかける。

「マサヤ……」

タキが小さく咳く。

「なんや？ もうじデカイ声で言えやー わてに云わぬへりに大きな声で叫ばんかい！」

「僕……強くなれるかな！？ 今以上に……なんでだらう。負けたのに……心の中ではマサヤに勝つ気持ちで挑んで負けたのに……まだポケモンバトルがしたい。今まで以上にポケモンバトルがしたい。この先でも通用するくらい、僕は強くなれるかな！？」

タキはマサヤよりも更に大きな声で叫んだ。

その言葉に、マサヤは大きく微笑んだ。

「何言ひてはりますねん。わてやぞ……」このマサヤ様やぞ。強くなれるわ。任せとけ。マスター�ート優勝やるー？ 楽勝や。タキはん。あんさんなら楽勝やー！」

その言葉に、さつきまで啞然とした顔で見ていたマサヤの門下生達が総立ちで拍手した。

当然それは、タキに向けての拍手だ。

「見てみに。わての門下生も祝福しとるわ。ほなタキさん。行くで  
ー。」

「この瞬間。タキはマサヤに認められた。

「マサヤ。どうせタキは？」

コルトのその質問はもつ、確信に満ち溢れていた。

「お詫び通りの返答ですとまへん。最高やー。確かにええ素質もつ  
つる」

「お前はそれに気づいた。流石やなー。お前も最高やー。」

コルトの、マサヤのトーン・ションは最高潮。

「コルトもさすがに予想されたら思われますわ。では、コルトさんはが認めた  
素質……このマサヤが預からせてもらいますー。」

マサヤがコルトに深々と頭を下げる。

「うむ。お詫びして頬むー。」

コルトもマサヤに對し深々と頭を下げる。  
やして……

「コルト。こ連れで来てくれてありがと。そしてマサヤ。  
みじくお願いしますー。」

タキも深々と頭を下げる。

そしてこれから、マサヤによるポケモン修行が始まる。

## 第三十一回 セキチクジム 不思議な違和感

時は流れ、マスター「ゲート」口前。

これでタキの修行は終わり。そのため、コルトがタキを迎えて来る。

コルトは楽しみだつた。タキがどれ程強くなつてゐるのか。いや、コルトの楽しみはそれもあるがもう一つある。それはとても残酷であり、成長への最大の第一歩……

「あつ。コルトー。」

タキが道場に入つてきたコルトに氣づき恭み寄る。

「おひ。久しふりやなあ。どうや調子は?」

笑顔でタキを迎えるコルト。

「完璧や。思つた以上や。安心してもらつてえでっせコルトはん。タキはんは殲破りますわ」

「ほんまか。そりやええ」と聞いたわ」

二人の会話にやつぱりついていけないタキ。

しかし、内容的に褒められていて感じたので嬉しそうだ。

「じゃあ、わいら行くわ。五個田のバッヂとらなあかんからな」

コルトがマサヤの下を去り立つ。

しかし、それをマサヤは止める。

「ちゅうと待ちちなコルトはん。一つだけ宣言させてもらいますわ。わては今回のマスターリーグ出場しようと決めたんですわ」

「の瞬間。コルトの、タキの眼がマサヤに向く。

「本当ー? じゃあ、僕はまたマサヤとバトルできるのー?」

喜ぶタキ。

「それほどひこう風の吹き回しやマサヤ」

緊迫するコルト。

「単純な理由ですね。ポケモンバトルがやりたなった。これ以上の理由はないでしょ?」

この言葉にタキは笑った。コルトが笑った。自分自身で言葉を発したマサヤも笑った。

その言葉は本当にその通りで、ポケモンバトルがしたいからポケモンバトルの大会に出場する。言い返せるはずがない。

「ほなうタキはん。マスター ゲートで会いましょ! 早く戦いたい もんですか?」

「うん! 次は負けないから!」

「ハツ! 期待してますわ。そつや、忘れたらあかんがな。タキはんに渡したいもんあんねん!」

マサヤがタキにモンスター・ボールを一つ手渡す。

「これは？」

いきなりモンスター・ボールを手渡されてもどうしたらいいか分からぬタキ。

「わての道場の卒業記念や！」このモンスター・ボールにはナッシーつていうモンスターが入つとる。使つたつてくれ」

「うん！ 大切にするよ。ありがと！」マサヤー

タキとマサヤはガツチリと握手して別れた。  
そしてまた、タキのポケモンが増えた。

しかし、そのためにはセキチクジムのジムリーダーを倒して五個目のバッヂを手に入れなければいけない。二人は早速、セキチクジムへと向かった。

ちなみに、タキは修行によりヒーロ（リザード）がリザードンに、ロツキー（イシツブテ）がゴローンに。そして、ナッシーの名前は、名前 자체があだ名っぽいのでナッシーのままとなつた。

セキチクジム戦。タキは驚いた。これ程自分が強くなつていてるなんて。

こんなジム戦は初めてだ。これ程までに圧倒的なジム戦は初めてだつたのだ。

タキは五個目のバッヂ、ピンクバッヂを手に入れた。

しかし、いつもならとても嬉しいはずなのにタキはどうもじつくりとこない。

いつもなら楽しいはずのポケモンバトルがなぜか楽しくない。自分とポケモンが繋がっている気がしない。今までこんな気持ちにはならなかつたのに……

なぜなのだろう。自分は絶対に強くなっているはずなのに……タキの頭が疑問と困惑でいっぱいになる。

しかし、こんなにタキが困っているのに、コルトはニヤニヤとした表情を見せる。

いつたいコルトの思惑は何なのか。それはまだ分からない……

そして、タキがこんな状況の中、マスター�ートが行われる会場へ向かわなければならない。マスター�ートはもう始まってしまうのだ。タキの疑問と困惑が吹き飛ぶまで待つてなどくれない。

## 第三十二回。マスター・ゲート開幕直前！

マスター・ゲート。それは、Aブロック会場。Bブロック会場。そして、決勝会場の三つの会場で構成される大会。

出場者は、一回大会が開催される毎に五十名以上になるといわれ、予選により十六名に絞られる。

Aブロック八名。Bブロック八名。そして、決勝会場でAブロックの優勝者とBブロックの優勝者でバトルするのだ。

タキは現在予選を終えたところだ。

ちなみに、マスター・ゲート出場の判定を行うのはポケモンマスターへの最後の壁といわれる四天王四人。ジムリーダー八人の計十二人。

その十二人の判定でタキの運命が決まる。

五十名以上の人数が参加する中、選ばれる十六名。もう既に戦いは始まっているのだ。

「どうやったタキ？」

予選を終えたタキを出迎えるコルト。

「うん……なんとか……」

セキチクジム戦以来、元気のないタキ。

当然、コルトへの返事にも元気が見えない。

「元気だせやタキ。とりあえず予選の結果はすぐにはでえへん。気持ち落ち着かせてゆつくり待とうや」

タキを元気付けようとすると「トルト。

しかし、そんな言葉を発するトルトだが、やはり表情は一ヤーヤ  
した笑みに満ちていた。

その頃、予選の結果を記録したテープが審査員十一名の下に送ら  
れる。

当然、ポケモンを愛し、ポケモンバトルを愛し、楽しさに満ちて  
いたタキとバトルしたジムリーダーにも、そのテープは送られる。

「何があつたんだタキ。あのときのような熱さを感じられない……  
だが……」

「確かに凄く強くなってる。でも、今のタキになら私は負ける気が  
しない……」

「オー。ボーアイはスランプみたいね。でも、ミーには見えるね。ボ  
ーイはまだまだ輝いてるネ」

「本当に強い。ですが、少し説教が必要のようですね」

中にはタキを外そと考へる者もいた。しかし、タキは強かつた。  
四人のジムリーダー……いや、十一人の審査員の眼から見てもタキ  
には可能性があつた。その可能性を……

「タキ！ 合格や！ 本選出場や！」

声を弾ませてタキの下に走り寄るトルト。

その可能性に十一人の審査員は賭けた。そして、四人のジムリー

ダーは知っているのだ。ポケモンを愛し、ポケモンバトルを愛し、楽しむタキの姿を。

とにかく一つの事実が確定した。  
タキ。マスター・ゲート出場決定！

## 第三十四回。マスター・ゲート開幕！

マスター・ゲート出場が決定したタキ。

タキはAブロック会場にてバトルすることとなる。

ちなみに、マサヤはBブロック会場にてバトルすることとなつたようだ。一人が戦うとすれば決勝会場での優勝決定戦。とてもドラマチックである。

だが、マスター・ゲート出場が決まり、会場へ足を運んだ今でもタキのテンションは上がらない。

そして、その状態のまま第一回戦へ進むこととなる。

「無理せんと頑張つてきい。わいはタキに笑顔が戻ること信じじとるで」

「うん。ありがと……」

コルトが優しい言葉でタキをバトルフィールドへ送り出す。

しかし、やはりコルトは不思議なニヤニヤとした表情だ。言葉では信じていると発言しているコルトだが、内心では確信していると思つてゐるとみて間違はないだろう。ただ、根拠は分からぬ……

バトルフィールドに移動するタキ。

タキの移動するバトルフィールドはAブロック会場のバトルフィールド。バトルフィールドは四まである。

ただし、バトルフィールド自体には何の変化もなく、Aブロック中の第四ブロックまでの区別づけのためにそう称してゐるのだ。つまり、タキは第一回戦の第一ブロックなのである。

「それでは第一回戦、第一ブロック。バッヂ数五！ タキ選手の入場です！」

実況アナウンスにより入場を告げられるタキ。生まれて初めての経験だ。

実況アナウンスの後、バトルフィールドーに入場したタキは、あまりの雰囲気に呑まれそうになる。

タキ達はイベントのメイン。タキ達、ポケモントレーナーの試合を見るために会場に足を運ぶたくさんの客達。

タキが入場するだけで歓声を上げる客達。当然、こんなことは初めてのこと。

いつもは有名人を会場、もしくはテレビで見てている存在だったのに、急に自分が有名人になり、自分は見られる存在になった。そんな感覚に陥っている。

バトルフィールドに入り、トレーナーゾーン。つまり、ポケモントレーナーの立ち位置。

そこに移動する足が重い。目の先に見えるのにすごく遠い。やつとの思いで辿りついたと思つたらまた歓声が上がる。

こんなことで大丈夫なのだろうか。落ち込んでいた心が更に落ち込む。

「続いて、バッヂ数六！ マツリ選手の入場です！」

……どういうことなのだろう。実況アナウンスの声が響き数分。マツリが入場していく気配がない。会場全体の歓声がざわめきに変

わる。

「Jの場合、入場のアナウンスが告げられて五分以内に入場しないと試合放棄とみなしう格になる。会場全体。そして、タキ自身としても、この勝ち方は望ましくない。」

更に時は流れ、失格まで残り一分となつた頃のことだ。

「ん！？ 一人……いや、二人です。一人入場してきますー！」

「うおおおおおい！ すまねえ。おぐれちまつたがあー！」

大きな声と共に入場する驚くほどがたいのいい男。そして、それを止めるように入場する女性。

恐らく……いや、間違いなく男はマツリである。〔冗談でこれほどの入場はできない……〕

マツリと共に現れた女性は案内役のお姉さん。

お姉さんは必死でマツリのとる行動を止めている。それは、とてもまともな判断であろう。

なんと、マツリは自分より遙かに大きな岩を抱えて入場してきたのだ。

いったい会場に何をしにきたのか分からぬ入場で、会場は違う意味で盛り上がりを見せる。

「マツリ選手！ Jは一体！？」

不思議に思つた実況がマツリに大きな岩の意味を問う。

「これがあ？ 普通の入場じゃ、まんねえと思つでなあ。それより、遅れですまんがつた！」

マツリが会場全体に深々と頭を下げる。

行動の割に礼儀はしつかりとしているようだ。

「色々とずまねえなあ。『』は一つ、おらあのパフォーマンスで言いつしなしにしてぐれると嬉じい」

大きな岩を抱えて入場することがパフォーマンスだと思っていたタキは、まだあるんだと苦笑いになる。確かに、自分よりも遥かに大きな岩を抱えてくるだけで十分パフォーマンスだ……

「それじゃあ行ぐぞお！ カイリキー！」

マツリが出した新しいポケモン。タキは急いでポケモン図鑑を取り出す。

名はカイリキー。体長1・6m。体重130・0kg。四本の腕から繰り出される一撃は、どんな相手でも瀕死に追い込むといわれている。考えるよりも先に手が出るようだ。

マツリはカイリキーを場に出し、大きな岩を思いつきり上に振り投げる。

その振り上げられた岩が落ちてくるその一瞬の間に、カイリキーの四本の腕が激しく岩にぶちかまされる。

なんと、そのぶちかましで粉々に碎けたのだ。カイリキーよりも大きなかましを……振り上げられて落ちてくるその一瞬の間に粉

々に碎いたのだ。

これには、会場からも熱い声援がおへりれる。

「どうもありがとう… どうもありがとう…」

マツリも満足気に声援に答える。

「この人……凄い！」

このパフォーマンスに、落ち込んでいたタキも徐々に元気が回復してきた。

いくら落ち込んでいても燃えてしまつのだ。今のパフォーマンスを見ても、マツリというトレーナーは間違いなく強い。そんなマツリと今から戦うとなるといやでも燃えてきてしまつ。

「すまねえすまねえ。待たせじまつだなあ。おらあマツリ。よろしく頼みばす！」

丁寧に挨拶するマツリ。

「ううん。いいパフォーマンスだったよー。僕はタキ。こちから」  
よろしくね！

「そりゃ嬉しい。わざわざ持つてきだ甲斐があつだつでもんだ！」

ガッチリと握手を交わす二人。

そしてこよによ……

「さて！ 色々ありましたが、第一回戦、第一ブロック。いよいよバトル開始です！」

実況アナウンスの声と共にタキッシュマジックのバトルが開始された。

## 第三十四回 マスター・ゲート開幕！（後書き）

ドラゴンボールの天下一武道会に憧れた。幽遊白書の暗黒武術会に憧れた。月下の棋士のA級順位戦に憧れた。

だから自分も何かしら大会を開催しようと想い、作品を考えた。つまり、このマスター・ゲートがこの作品の原点です。ようやく開幕！

## 第二十五回 マスター・ゲート第一回戦 タキタマツリvsマツリ

マスター・ゲートの試合形式。使用ポケモンは三体。一つの決着がつぐじとのポケモン交代は可。先に三体のポケモンを倒したトレー・ナーの勝利。

バトル開始の合図とともに一人はポケモンを場に出す。タキの出したポケモンはロッキー。マツリの出したポケモンは、長い足が目立つポケモンだ。

早速タキはポケモン図鑑で、その足の長いポケモンを調べる。

名はサワムラー。体長1.5m。体重49kg。長い足はバネのように伸縮し、最大一倍の長さまで伸びる。

どうやら、サワムラーは足技重視のポケモンのようだ。

「それでは、ゴローンvsサワムラー。バトル開始！」

審判の声とともに動き出すトレーナーとポケモン達。まず攻撃を仕掛けたのはサワムラー。

「ザワムラー！ 思いつきり跳り上上げろお！」

サワムラーが勢いよく繰りだす長い足がロッキーに向けて飛び。

「ロッキー。冷静に避けて」

サワムラーが繰り出す蹴りを冷静に避けるロッキー。そして……  
「やるなあ。もうこいつちょっとしてみよつ!」

もう一度同じ蹴りを指示するマツリ。  
だが、これをタキは待っていた。

「ロッキー。サワムラーが足を上げる瞬間に転がる」

タキはマサヤとの修行で、ポケモンの弱点を見つけたことが上手くなつた。

サワムラーの場合、その一倍に伸びる足がそつだ。  
確かに足が一倍に伸びるのは強力だが、その分自分の隙も大きくなる。タキはその一瞬を狙つたのだ。

タキの指示でロッキーが勢いよくサワムラーに向か転がる。  
だが……

「甘え甘え! ザワムラー! 軸足じくおきを利用してバネのよう飛び上  
がれえ!」

指示を受けたサワムラーが軸足をバネにして空へ飛び上がる。  
無常にも転がるロッキーは、サワムラーの真下を潜り抜けていく。

「ザワムラー! 着地ちやくちと同時に飛び蹴り!」

サワムラーは、着地と同時にそのバネを利用して大きく飛び上がる

り、ロッキーに向け飛び蹴りを放つ。

これには、転がり終わりの反動が残るロッキーは反応できず、サワムラーの飛び蹴りをヒロロヒテ受けた。これは大ダメージ。

更にサワムラーが追撃しようとしたその時だ。

「攻撃止めだあ！」とマジックの声が響き渡る。

こきなつのこの言葉に騒然とする会場。

「どうこうしてしまったマジック選手… バトル中に攻撃を放棄したあー。」

当然、こんなこと前代未聞である。もしもこれが情から行動だとしたら、それはお門違いで、それほどまでに無様で侮辱的な行動はない。

「タキ。おめえ、無理なんであるな。トレーナーが苦しい時は、ポケモンだって苦しい。苦しい時は元気もでねえ」

マツリは少々怒り口調でそう語る。

しかし、会場の観客は、なぜマツリが怒っているのかマイチ分からなかつた。

いい戦いではないか。どちらも全力でバトルしているいい戦いではないか。会場はそういう空氣に満ちていた。

だが、その空氣はマツリの一喝で吹き飛ぶ。

「ポケモンが泣いてる。泣がせちゃいげねえよ。トレーナーとして、ポケモンは泣がせちゃいげねえ」

会場が一気に静まる。

ポケモンを知る者にとって、この言葉はとても重く大きい。……

「タキ。おいらはおめえの事を何にも知らねえ。でも言わせてくれ。  
タキはタキのやりだいようにやれ。それが最善じゃないどしども…  
…<sup>だの</sup>楽しくなぐつちや苦しい…自分自身もポケモンも…絶対苦し  
い」

静まり返る会場に、マツリの思いが響き渡る。  
その思いにタキは……

「僕が元気になつたら……僕のポケモン達はまた笑つてくれるかな  
……？」

マツリの精一杯の思いに答えるよひに、タキもまた精一杯の思い  
で答えを返す。

「ああ。間違まちがいねえ」

さつきまで怒り口調だったマツリが、優しく微笑みながらそう言  
う。

この言葉により、タキの心は完全に晴れた。  
何だか凄くいい気分だ。さつきまでは自分でもビックリするくらい  
自分の体は重かった。

なのに、今は凄く軽い。ビュンビュン走れ回れそつなくらい軽い。  
自然と溢れ出てくる笑顔と共に走り回るととも気持ちいいことだ  
ら。

そんな気持ちをバトルで燃やす……タキ。完全復活！

「『』めんマサヤー！ マサヤとの修行……無駄になつちやうかもしけ

ない。でも、それでも僕は僕の好きなようにバトルする。だって……  
「それが一番楽しいから！」

タキが抑えきれないような声で叫ぶ。

そうだ。タキにはポケモンの弱点を見つける目なんて、自分だけで全てを考えて行動する頭なんていらない。

タキには、ポケモンを信じ、ポケモンを愛し、ポケモンと共に行動しバトルする。そんな心があればそれでいい。

「いい笑顔だ。ポケモンも笑つでる。となれば仕切り直し……いや、バトル開始だ。さあ、バトル開始の声をあげてくれえ！」

マツリもひときたようで、さっきまでの怒り口調が嘘のような笑顔だ。

それと同時に、会場の興奮も最高潮。バトル再開……いや、バトル開始には絶好の空気である。

「ゴローン▽▽サワムラー。バトル開始！」

審判も興奮してきたのか、自ずと声も大きくなる。

タキはとても嬉しかった。楽しかった。

久しぶりに自分とポケモンが繋がっているような感覚がした。

バトルが楽しい。ポケモンバトルが凄く楽しい。  
やつぱりこうでなければ。もし、この選択が間違いだとしても、  
そう感じなければ……

「サワムラー。戦闘不能！」

タキのロッキーがマツリのサワムラーに打ち勝つた。

「この瞬間。圧倒的不利だったこのバトルが、一気に有利に変わった。

「きよつた。一回戦からきよつた。ラッキー や。一回戦からこんなトレーナーと当たれるとは思わんかった」

観客としてタキを見守るコルトが思わずそつ噛く。

「タキはもう立派なトレーナーや。自分のスタイルを完璧に崩されても、そつから自分自身のスタイルを完璧に見つけた。こうなつたら強いでえ。もう何事にも迷わへん。それだけの自信が生まれたはずや……でもなあ……」

人の目も気にしないくらいに興奮して一人でブツブツと喋つているコルトだが、一つ大きな不安があつた。

「問題はマツリに勝てるかどうかやな……」

「タキ選手。ポケモンの交代を行いますか?」

この勝負は一つの決着がつぐ」とに交代ができる。つまり、タキは傷ついているロツキーを一時的にモンスター・ボルの中で休ませることができるのだ。

ロツキーはサワムラードとのバトルでボロボロに傷ついている。当然、交代を選択する。

するとそのときだ。

(タキ。 おかえり! )

タキがロツキーをモンスター・ボールに戻そうとモンスター・ボールを取り出したとき、タキの耳に聞こえたその言葉。

それは、幻聴かもしないし気持ちの問題かもしれない。だが、これが自分のポケモン達の声だと思うと自然と笑顔が溢れてくる。元気が出てくる。

タキは改めて感じた。自分はこれだけポケモン達に元気をもらつてゐるんだから、自分もポケモン達に精一杯の元気をあげないといけないと。

そのためにはもつともつとポケモンを愛そつ。タキは、そう心に誓つた。

第三十六回。熱く楽しくバトルバトル！

タキのポケモン交代で出したポケモンは、マサヤから貰ったナツ  
シ一。

対して、マツリが出したポケモンは、何やら豚のよつた猿のよつた……区別しにくいポケモンだ。

名はオコリザル。体長1・0m。体重32・0kg 常に額に血  
管が浮き出しており、名前の通り、よく怒るポケモン。

「ナツシーヴスオコリザル。バトル開始！」

た。……動かない。ロッキーとサワムラーの試合の時はよく動いていた。

「行くんだナッシュ！」

「ナーナシ~~~~」

ケタケタと不気味な笑みを見せて動かないナッシー。タキの命令など糞食らえといった様子だ。

「やめや～～！  
全く……いびになつだら素直になつでくれんだ？」  
まつだ

「ブキー！ ブキー！」

マツリ側のオーラザルも命令など糞食うえといった様子で、意味

の分からぬ暴れまわりを見せている。

すると、実のよくな三つ顔のあるナッキーの一つが、口から種をオコリザルに向けて放つ。

その種は、オコリザルの目の前で爆発。驚くオコリザルを見て、またケタケタと不気味な笑みを見せるナッキー。どうやら、かなりのイタズラ好きのようだ。

「ブ……ブキー！」

オコリザルの標的は決まった。  
常に体に溜めているストレスを爆発させる標的……それは、ナッキー！

ブンブン腕を振り回して向かってくるオコリザルに対し、ナッキーは、そのやしの木のような体とは思えないほどのジャンプを見せ、オコリザルを踏みつけにかかる。

だが、予想通り身軽なオコリザル。ナッキーの踏みつけを軽々と返し、さっきのお返しにとナッキーの顔の一つに怒りのパンチを浴びせる。

「ナッ……ナ——ーッキー——！」

さつきまでのケタケタ顔が消え、怒りの顔に変わるナッキー。  
そして、この一体のポケモンは大暴れのバトルに……まるでチンピラの喧嘩である。

「懐かしいなあ。昔のヒーロみたいで」

今のナッシーの暴れっぷりを見て、全く命令を聞かなかつた頃のヒーロを思い出し懐かしむタキ。

「どうじたタキ。寂しいが？」

「ううん。それがそうでもないんだ。この試合を見てたら、どうちのポケモンも凄い活き活きして……」いつまで燃えてきちやうー。

その言葉にクスッと笑いつマツリ。

「だよなあ。おらあもうう思つ。じつこう暴れん坊がいでぐれないと、トレーナーとしてなんだが寂しくなるつでもんだ」

会話を交わしながら一体の試合を見守る一人。

戦いに指示を出すのもトレーナーの仕事だが、指示を聞こうといふポケモンを温かく見守ることも同じくトレーナーの仕事だ。

そして……

「おつとー 倒れましたナッシー！ もつ起き上がれないかー！？」

地に倒れこむナッシー。

どうやら、大暴れのチンピラの喧嘩に勝つたのはオコロザルのようだ。

いや……

「ナ……ッシシシシシ！」

とても奇妙。地に倒れこむナッシーが不気味な笑いを見せる。

それはもう、会場全体が最後の悪あがきだと思った。最後まで不気味で意地悪いポケモンだと思った。だが、ナッシーはそれだけじや終わらない。

「こ……これは……大爆発！？」

不気味な笑いを見せたナッシーの周りが爆発に包まれる。当然、その爆発はオコリザルを巻き込み、オコリザルは目をクルクル回しながら地に倒れる。完全に戦闘不能だ。爆発を起こしたナッシー本人も爆発に巻き込まれる。そして、オコリザルと同様に目をクルクル回し戦闘不能。

大爆発。それは、自分を犠牲にし、相手に攻撃する最終手段のようなもの。

「なんでいう負けず嫌い…………いいポケモンだなあ！」

マツリが拍手で、敗北が確定したと思われた最後の最後で大爆発を使用したナッシーを褒め称えた。

ナッシーの不気味な意地悪さは最後の最後に大きな評価を得た。これはある意味大きな武器である。

「ナッシー。オコリザル。共に戦闘不能！」

これでタキの残りは手負いのロツキーとヒーロ。マツリは残り一体となつた。

手負いのロツキーを使っても勝てるとは思えない。実質上、一体同士の対決。

そんな状況もあり、タキはヒーロを場に出す。

マツリは当然……

「いぐぞカイリキー！ おらあ達ならいげる！」

あの大きな岩を一瞬で粉々に砕いたカイリキーを場に出す。これこそ正にエース対決である。

「いぐよヒーロー……勝つよヒーロー！」

トレーナーとポケモンが放つ、独特な緊張感に包まれる会場。そして……

「リザードン▽△カイリキー。バトル開始！」

まず先手を仕掛けるのはヒーロー。

リザードから進化して生えた大きな羽を利用して空中へ飛び、火炎放射を放つ。

その火炎放射はとても強力な炎で、目で見ても、リザードの火炎放射よりも威力があることが分かる。

だが……カイリキーには通用しない。

カイリキーは、その四本の腕を素早く器用に動かし、自分の腕の周りに風を作る。

そして、その風を利用して火炎放射を受け流し……ダメージは無し！

「効がねえなあ。今度は『じつぢからいぐぞ…』」

そう言つと、地面を殴るカイリキー。

そして、そこから生まれた、割れた地面の一つの塊をヒーローに向けて、ぶん投げる。

「そんなの当たらなによー。」

ヒーローは軽く、カイリキーが投げた塊を交わす。  
だが……

「そんな」と分がつでる。むしろ……それが狙いだあー。」

そう。そこまでは全てマツコの計算通り。

「タキ。ここの勝負もりつだ。もつ、ヒーローはカイリキーの間合この中だ！」

マツリは一瞬の隙が欲しかった。

ヒーローに近づける一瞬の隙を。それさえあれば……

「離れろヒーローー。」

慌てて命令するタキ。

「無駄だ。カイリキー。ぶちかませー。」

離れようとするヒーローに向かい、カイリキーの拳がぶちかまされる。

そのスピードは離れようとするヒーローを確実に捉える。

その拳の実力はもう知つての通り。

大ダメージは避けられない。

地に倒れこむヒーロ。

「終わりだ。おらあのカイリキーの拳こぶし食くりつけやあ立てねえよ」

フィニッシュ宣言するマツリ。

「立つんだヒーロー！ ヒーローの力はこんなもんじゃない。それは僕が一番知ってる！」

それでも諦めないタキ。

「グ……グオオオオ！」

突然、大声で声を上げるヒーロ。  
そして……

「いいねえ。久しぶりに立ちあがつ立あがつだ奴やつを見だ！」

自分のカイリキーの拳を受け、立ち上がったヒーローに、何故か嬉しそうなマツリ。

「カイリキー！ もう、終わりの時間じがんだ！ 決めでやれええ！」

マツリはカイリキーにもう一度、拳をぶつかますように命令する。  
それに対しタキは……

「もう避けようとしちゃ駄目だ！ 受けきらなくちゃ……避けてちや勝利は見えてこない！」

避けずに受けとれと命令する。

タキもヒーロも……覚悟を決める！

ぶちかまされるカイリキーの拳。

そして、それを避けずに全て体で受け止めるヒーロ。

カイリキーの拳が止まった瞬間。マツリは勝利を確信した。マツリは自分のカイリキーの力に絶対の自信を持つ。それを一発も受けきれるポケモンなんて……

「そんなポケモンいるつでのか？ いや、そんなはずねえ！ 倒れろヒーロー！」

必死にそう叫ぶマツリ。ヒーロは軽く微笑んだ。  
いや、マツリにはそう感じた。

そして、カイリキーを掴み、上空へ飛び去っていくヒーロ。ヒーロが何をしようとしているのか、タキにも分からぬ。

「ハハ！ そうが。そうがヒーロー！ そうだよなあ！ 受げきらなぐちゃいげねえもんなあ！ 勝利が見えでごねえもんなあ！ こりやあ、おらあの負けだあ！ タキヒーロ。おらあ。感動しだ！」

大声でそんな言葉を放つマツリだが、タキは返答しようとしている。タキは見守る。ヒーロが何をしようとしているのか。それは分からぬ。

だが、自分が見守ることが少しでもヒーロの力になれば。そんな気持ちでヒーロを見守る。

その頃、ヒーロは遙か上空でピタッと止まつた。

そして、カイリキーを掴みながらグルグルと回転しだした。

「う……これは。地球投げ！？ 地球投げです。皆さんには見えてこないでしょ？ リザードンがグルグル回るその合間に見える球体を。そして、その球体が美しく綺麗な地球に！ 皆さんにも見えるでしょ？」

興奮する実況。それほどまでに美しい技なのだ。

言い忘れていたが、このポケモンの世界の惑星的名称も地球である。

地球投げ。グルグルと回った遠心力で急降下。

遥か上空から急降下で地面に叩きつけるその技は、まさに超必殺技！

「カイリキー戦闘不能！ マツリ選手の手持ちポケモン。これにより、勝者。タキ選手！」

タキ。第一回戦進出決定！

「いやあ。感動しだ！ 楽しいバトルをありがどなー！」

マツリがタキに握手を求める。

「ありがと！ マツリは最高のトレーナーだった。僕はマツリのお陰で元気になれた。そして、これだけ熱くて楽しいバトルができた！」

「！」

タキも喜んでマツリの握手に応じる。

その瞬間。会場からは大きな拍手と声援が送られる。

タキとマツリの熱くて楽しいバトル。それは、会場にも伝わった。

「そうだ。タキ。これを受け取<sup>と</sup>で欲しい」

マツリはタキにモンスター ポールを一つ手渡す。

「…これは？」

タキはつい最近同じような経験をしたので薄々は感じている。

「おらあのポケモンだ。エビワラーっていうポケモンが入つて使うでやつてくれ」

確かに嬉しい願いだ。だが、そんな簡単には受け取れない。

「受け取つてくれよ。おらあのエビワラーがそう望んでんだ。さつきのバトルを見でな。ポケモンと別れるのはトレーナーとして辛いことだけど、ポケモンがそう望んでる以上、ポケモンの望みを優先してやりでえ。トレーナーとしでな」

そう言われると受け取らないわけにはいかない。

タキは嬉しかった。またポケモンが増える。自分の愛せるポケモンがまた……

「ありがとマツリ！ 大切に使わせてもらつよー。」

モンスター ポールを受け取るタキ。

「ああ。まだバトルしようつな。タキとのバトル。

最高に乐しがつた。（れいじょう）

おりあ。満足だ！」

「うふー。またしょ、うー。」

「うつと笑う一人。

その一人の笑顔は、ポケモンバトルを体感しないと味わえない。

そんな笑顔だつた。

ひつしてマスター ゲート第一回戦。終了！

## 第三十七回 懐かしき再開 ～もう一つの第一回戦～

タキがマツリと出合つ一度その時まで時間は遡る。さかのぼる。

マスター・ゲートのルール上、第一回戦、第四ブロックまであるこの戦いは、全て同時に行われる。

その内の第一ブロック。すなわち、第一回戦でのタキとの対戦相手になる一人の対決。ここでドラマは生まれた。

「第一回戦、第二ブロック。バッヂ数五。ユリカ選手の入場です」

実況アナウンスにより入場を告げられたのはユリカ。

ユリカはエリカの下で一生懸命に修行した。それは、タキ達のお陰でポケモンマスターになろうと火がついたから。そして、エリカを超えたという思いから、まあ、この思いは前々からだったのであるが……

そして、ユリカは、自分の思いを超えた。ユリカはエリカを超えたのだ。

前々から持っていた四つのバッヂと、エリカの持つレインボーバッヂを合わせると五つ。マスター・ゲートに出場する資格。そして実力は十分にある。

「続いて、こちらもバッヂ数五。カケオ選手の入場です」

カケオ。覚えているだろうか。一ビシティからハナダシティを繋ぐオツキミ山の中で通路を遮るように座り、タキとユリカを困らせたあのカケオである。

カケオは、あのバトルの後から初心に戻り、何の文句も言わずポケモンと触れ合い、ポケモンバトルを繰り返してきた。

そして遂に、カケオは五つ目のバッヂを手に入れ、マスターべトへ挑戦した。

だが、その時の審査。正直、マスターべト本選へ進める実力ではないと皆が判断した。だが、それと同時に皆は同じ感覚を感じ取った。

実力ではない何かにとりつかれている。カケオはきっといい意味でのダークホースになる。審査員達はその思いでカケオの本選出場を決めた。

そして、カケオがここまでこれたのもユリカのお陰だ。あの時、カケオの心はパンクしていた。惨め、無力。そんな言葉で埋め尽くされていた。

だが、そんなパンクしていた心を全てリセットしてくれたのはユリカ。カケオはユリカに救われたのだ。少なくともカケオはそう思っている。

だからこそ嬉しかった。ここでユリカとバトル出来る事に幸福を感じていた。

「やあ。俺のことを見えているか?」

カケオは自分自身を指差しながらそう質問する。

「失礼だけど…………分からない」

ユリカは本気で覚えていない様子だ。

「ふつ……無理もない。覚えているつて方が無理な話だ。でも、俺は覚えている。ユリカ。お前の名前はユリカだろ?」

名前を言い当てられて驚くユリカ。

これは出会ったことのある男だと……自分の記憶をフル回転させる。

すると、記憶の片隅で一つの思い出が甦る。そう、この男は……

「もしかして力ケオか!?」

「よかつた。俺の名を頭の隅のほうには置いといてくれたんだな。そして、これからユリカとまたバトルができる。二重の幸福だ」

力ケオが試合前の握手にと、片手をユリカに向けて伸ばす。

「私もまたバトルが出来て嬉しく思う。私が言つのも失礼なのだが……成長したな。トレーナーとして」

「お陰様で」

ガツチリと握手を交わす二人。

そして……

「それでは、第一回戦。第一ブロック。バトル開始!」

実況アナウンスの声と共に、ユリカVS力ケオ。バトル開始!

## 第三十七回 懐かしき再開 ～もつ一つの第一回戦～（後編）

カケオ。何故「」で登場させたかと云ふと、単純にコロカと再戦させたから。やむつ「」の理由が汲めます。

ちなみに、カケオは第十五回で登場しております。

## 第三十八回 感情精神

「ユリカとカケオ。両者一步も譲らないバトルを見せる。見て分かるほどに成長している両者。会場も歓声を上げて、息を呑み、魅せられて……申し分ないバトル内容だ。

そして、両者のポケモンが一体づつになつた後のポケモン交代。その時、ユリカはカケオの様子がおかしいことに気づく。

「気分でも悪いのか？」

ユリカが心配して、そう声をかけるのも無理はない。カケオの額からは明らかに気温のものではない汗が流れ、体は震えている。

「いや、大丈夫さ……バトルを続けよう

明らかに大丈夫では無さそうなカケオ。  
ユリカはもう一度心配の声をかける。

「ユリカにはこのバトルがどう映る？」

突然的外れな質問をするカケオ。何か意味があるのだろうか……

「とてもいいバトル。バトルしてるっていう実感が湧くいいバトル」

率直な気持ちをそのままカケオに伝えるユリカ。  
カケオは、そんなユリカの言葉にクスッと笑みを見せる。

「その通りだ。でもよ、いいバトル過ぎて自分の精神がどつか遠くにいつちまつたことあるか？」

「どうこうことだ？」

カケオの言うことがよく理解できないユリカ。  
返す言葉が見つからず、カケオに説明を求める。

「俺にもよくわかんねえ。よくわかんねえけど時々あるんだよ。このバトルとかジムリーダーとのバトルとか……とにかく最高のバトルの時によお、自分が自分でなくなっちゃう気がして、何者かが俺をどこかに連れてつてる気がして……それが恐いんだ」

真剣にそう語るカケオに、珍しくフフッと笑うユリカ。  
そして、カケオを優しく包み込むような笑顔で言葉を返す。

「深く考えすぎ。カケオにとつて最高のバトルなのだろう？　ならいいじゃない。最高のバトルだから自分を見失うほど熱中してそう感じてるだけ。私からすれば正直羨ましい。恐がる必要はない。素直に自分の感情を受け止めればいい」

ひとつ大きく呼吸をするカケオ。

「……ありがとう。俺はまた救われたようだ。そうだな。俺はどこまでも連れて行つてもらうことにするよ」

カケオは自分に行き詰ったとき必ずユリカに会う。そして、必ず自分を救ってくれる。これは運命なのだろうか。カケオの心はまた一つ成長した。カケオのポケモントレーナーとしてのレベル。いや、人生でもユリカに救つてもらっている。

その結果。カケオの口から初めに出た言葉はありがとう。これ程までに素直に出てくるありがとうはない。カケオが言葉に言い表せないほどの感謝の全てが詰まつたありがとうだ。

「そう。それでいい」

温かい返事を返すユリカ。

それに対し、一つ頷くカケオ。

「……ありがとう。じゃあ、そろそろバトルに戻るとしてよう。これ以上中断すると、会場の観客にも悪いしな」

「そうだな。では、最後までよろしく頼む

トレーナーボードに戻る一人。バトル再開である。

「では……ウツボットvsマタドガス。バトル開始」

ユリカが出したポケモンは、ユリカの持っていたポケモンでもあるウツボット。ユリカのウツボットが進化したのだ。

カケオの場にいたポケモンは、マタドガスという名のポケモン。ドガースが二つくつついたようなポケモンなので恐らく進化したのだろう。

熱戦を繰り広げる二人。

恐らく、感情の肩の荷が下りたからであろう。先程よりも楽しそうにバトルを繰り広げている。

「お前は俺をどこまで連れて行ってくれるんだ!? 楽しそうねえか。我を忘れちまうぜ!」

熱が入りすぎて思わずそんな言葉を発してしまった。

そんなカケオに、ユリカはまた笑みを見せる。

「私が連れて行けるところまでどこまでも連れて行ってあげるわ。だけど……最終的には私が超える！」

ウツボットVSマタドガス。両者ポケモン一匹ずつのそのバトルは、正に勝利への対決。すなわち、最終戦に相応しい一匹のバトルであった。

しかし、どんなバトルにも勝者と敗者といつものがある。  
どちらかが勝利し、どちらかが敗北する……

「ウツボット。戦闘不能。ユリカ選手の手持ちポケモンが〇となつたため、勝者。カケオ選手」

カケオ。第一回戦進出決定！ カケオもタキもまだ知らないことだが、次のバトルはカケオVSタキということとなつた。

だが、正直このバトルの勝者がユリカになつていても違和感はない。正にギリギリのバトルだったというわけだ。

「成長したなカケオ。とうとう私も超えられてしまった」

敗北はしたが、納得の表情を浮かべるユリカ。

「俺は超えたなんて思っちゃいないね。ポケモンバトルは無限大だ。今回のバトルはたまたま俺が勝つただけだ。だから……またバトルしよう」

「これからお願いしたいくらい。でも、次は私が勝つわ。カケオの言つとおり、今回のバトルはたまたま負けただもの」

そんな言葉に一人は笑顔になる。

ポケモンバトルが終わつた後には、笑顔でポケモンバトルを語り合い握手で終わる。これがポケモンバトルのあるべき姿だ。この二人のバトルは正にそれを物語るバトルであった。

だが、ユリカには一つカケオに言わなければならぬことがあるつた。

「カケオ。一つ頼まれてくれるか?」

喜んでと頷くカケオ。

「もしこの先、タキというトレーナーに会つたら伝えておいてくれ。ユリカは一步踏み出しだと」

そう。この大会はユリカのポケモンマスターへの第一歩。ユリカはその第一歩を踏み出したのだ。それもタキとの出会い。タキとの旅のお陰。だから、ユリカはカケオにその気持ちを伝えてくれと伝えた。

「タキ……覚えてるぞ。あの時、一緒にいた男だろ？ 今は一緒にいないのか？」

カケオはタキのことも覚えていた。

それ程あの時の出来事を鮮明に覚えているのだ。

「ああ。私とタキは同じポケモンマスターを目指すトレーナー。つまりライバル。ライバルと一緒に旅するのはおかしいでしょ？」

「確かに。でもその条件だと俺からしてもライバルってわけだよな……分かった。そのライバル君に出会ったら必ず伝えておく」

その後、二人は握手をしてその場を去った。

恐らく、一人はまだどこかで出会い、どこかでバトルするのだろう。そんな気がしてならない二人のバトルの一つが終わった。

## 第三十九回 マスター・ゲート第一回戦 タキ VS カケオ

第一回戦終了から一時間程、ポケモンセンターでのポケモンの体力回復も十分になつた頃、第一回戦を勝ち抜いた四人による第二回戦が始まる。

その、第一回戦、第一ブロック・第二ブロックを勝ち抜いたタキとカケオが第二回戦、第一ブロックのバトルフィールドへ入場する。バトルフィールドへ入場した一人に会場の観客が大きな声援をおく。第一回戦以上に熱気のこもつた声援に会場全体が盛り上がる。

丁度そのとき、観客席でタキを見守るコルトの下に現れる女性。

「横いいかしら？」

そう。ユリカだ。ユリカは自分を倒したカケオのバトルを観戦に来た。

だが、そのカケオの相手がタキだということに驚いたユリカは、驚きながらも冷静に考えた。

タキが試合に出ているということはコルトもどこかでバトルを観戦しているんじゃないかと……そういう考えで会場を探していたところ、コルトを発見したのだ。

「おお！ ユリカやないか。ユリカも見に来ててんなあ」

久しぶりにユリカに再開できたこと、一人で見ているのも寂しかったと思っていたこと。一つの意味でコルトはユリカの登場を喜んだ。

「いいえ。私は出場したわ。負けてしまつたけど」

「ん？ 出場者は観客席に入場したらあかんのぢやつかつたつけ？」

マスター・ゲートは、出場者に他の出場者の情報を一切教えてはならない。だから、出場者は基本的に部屋の中で待機だし、敗れた出場者は速やかにマスター・ゲートから退場しなければならなかつたはずなのだ。

「負けた出場者は観客席で観戦するのはよくなつたはずだ。最近は、出場者のマナーもよくなり、観客席からバトル相手の情報を叫ばなくなつたからな」

「ホンマか。そりやええ話やなあ」

ほのぼのと話す一人。

しかし、コルトには一つ気になつた点があった。なので、空気が変わることを覚悟でユリカに質問する。

「ユリカは誰に負けてん？ ユリカ程の実力があれば簡単に負けはせんやろ？」

コルトに質問されたユリカは静かにカケオを指差した。

「『ビンゴ』でタキの対戦相手やないけ……」

ユリカは言う。カケオの勢いはタキ以上かもしれない……それ程、カケオは成長した。そして、その成長はポケモンバトルにも十分に繋がると。

そして、コルトとユリカは話すのをやめ、目線をタキとカケオに

向ける。

タキとカケオ……マスター・ゲートの中でも最も勢いのある一人のバトルである。

「おお。驚いた。お前タキだろ？」

驚いた顔でそう言うカケオ。

「僕も驚いてるよ。カケオでしょ！？」

タキはカケオのことを覚えていた。常に記憶の片隅にカケオを残しておいたのだ。

そんなタキにカケオは拍手を送った。

「嬉しいな。俺を見ただけで分かつてくれるとは……これはスッキリとしたバトルの幕開けだ。いいバトルにしようぜタキ」

「うん！ 絶対にいいバトルになるよー よろしくね！」

そして、両者スッキリとした気持ちで第一回戦、第一ブロック。タキVSカケオ。バトル開始！

## 第四十回。素敵な馬鹿

「ナッシー 戦闘不能！」

これで両者ポケモンが一體ずつ。カケオは、タキ相手にも必死で食らいつく。

カケオはタキに全く負けていない。むしろ、気持ちでは押しているのではないだろうか。

だからこそ、カケオのテンションはユリカ戦のあの時の状態へと。ポケモンバトルにのめり込み、我を忘れている。

タキが繰り出したポケモンはヒーロ。

カケオの場にいるポケモンはマタドガス。またもやエース対決。やはり、自分が最も信頼しているポケモンは最後の切り札なのだ。

「リザードン、マタドガス。バトル開始！」

エース対決が始まった。

まず、先手を仕掛けるのはヒーロ……かと思われた。

しかし、予想外に先手を仕掛けてきたのはマタドガス。ヒーロに向かつて、捨て身の体当たりを繰り出す。

普通なら当たるはずも無い無謀な捨て身。しかし、ヒーロの取ろうとした行動は空中からの火炎放射。その、空中へ飛ぶ瞬間を狙われたのだ。この捨て身の体当たりを反撃することもかわすことも出来ず、クリーンヒット。あの大きな体格をしたヒーロが大きく吹っ飛ぶ。

「気持ちを先行させるのも悪くないもんだな」

カケオが、指をぱちんと鳴らしながら嬉しそうにうなづいた。

「カケオ……油断禁物だよ！」

そう叫ぶタキの言葉にハツと反応するカケオ。すると、そこにはマタドガスに向けてひっかくを繰り出そうとしているヒーローの姿が。

「何！ 嘘だろおい……全力で避けろマタドガス！」

カケオは驚いた。

あの体格の大きなヒーローが、一瞬の内にマタドガスの間合いに入つて攻撃を繰り出そうとしていたのだ。驚くのも無理は無い。そして、驚きと同時に、少しでも油断してしまった自分を恥じた。

間一髪でかわすマタドガス。

しかし、ヒーローの攻撃はそれでは終わらない。かわされてもかわされてもヒーローはひっかくを繰り出す。それを間一髪でかわし続けるマタドガス。

確かにひっかくは当たっていない。しかしその状況は、誰がどう見ても攻守逆転。

精神的にヒーローがマタドガスを上回る。

「くっ。マタドガス。煙幕！」

勢いよく煙幕を噴射するマタドガス。これにより周りの視界が見えなくなり、リザードンはひっかく攻撃の連打が出来ない。カケオ。

ピンチを切り抜ける。

しかし、これでピンチの全てを切り抜けたわけではない。タキもいなくなることは想定済み、すぐにヒーローに、羽をバタバタさせて風を作り、煙幕を吹き飛ばすように命令。

その命令はピシャリと当たり、風により煙幕は吹き飛ばされた。これでまたヒーローのベースに……いや、これがカケオの狙い。

「えつ？ どういってー？」

煙幕を吹き飛ばした次の出来事に、タキは驚きを隠せない。

それもそのはず、煙幕を吹き飛ばした次の光景……目の周りがヘドロだらけになり、暴れまわるヒーローがタキの目に入ったのだから

……

「これだからポケモンバトルは止められねえよな。自分の油断から始まるトレーナー同士の読み合い。当然、俺は不利な状況から読みが始まる。だけど、そんな不利な読み合いに読み勝つちまたときなんかよお……絶対に止められねえよ」

カケオが声を震わせ、体を震わせながらそう言つ。

カケオはヒーローが煙幕を吹き飛ばしてくれるのを願つていた。

そうでなければ、もし、吹き飛ばし以外の方法で、この状況を打破されていたらば、間違いなくカケオの作戦は成功しなかつた。だからこそ、読み合いは難しい。そして楽しい……

ヒーローが羽をバタバタさせて煙幕を吹き飛ばす。

その間に必ず無防備の時間が出来る。つまり、隙だらけとなる。そこにカケオは仕掛けたのだ。煙幕と同じ色のヘドロを……普段

は当てることが難しいヘドロ攻撃を……いくら当てることが難しいヘドロ攻撃も、無防備の相手なら必ず当てる事が出来る。

「ヘドロで田をやられても、更に無防備の時間が作れる。俺のマタドガスは、攻撃力自体は低い。でも、一回も体当たりをクリーンヒットさせられたら……考えるだけで興奮してくるぜ」

カケオはマタドガスに体当たりを命令。

当然、マタドガスの体当たりはヒーローにクリーンヒット。

攻撃の一回のクリーンヒット。これはもう、どれだけ非力なポケモンでも確実な致命傷を与えるといつてもおかしくない。

ヒーロー。マタドガスの体当たりによりダウン。……この時カケオは、勝利を確信した。

「楽しかったぜタキ。最高だつ……」

「まだ終わってないよ……ヒーローはまだ諦めてない。だから僕も諦めない！」

カケオの言葉がタキの声に遮られる。

その時、カケオは見てしまった。自分がポケモンバトルにのめり込み、我を忘了精神世界。カケオはコリカとのバトル、そして、このタキとのバトルで、カケオの精神は更に上へ上へと昇る。そして、カケオは見てしまった。

その時、会場がワーッと沸く。ヒーローが大きな声を上げながら立ち上がった。

しかし、カケオには聞こえない。

「……馬鹿だぜ。もつと馬鹿になんねえと……俺はまだまだポケモン馬鹿になれり……」

カケオは見てしまった。辿りついたその先に……いや、もつと上の上に、タキの姿が見えた。これは幻覚かもしない。でも、カケオは感じた。自分はあの時、勝利を確信してしまった。だが、タキはそれでも諦めなかつた。この時点でタキは自分よりも上にいる。そう感じてしまった。

「マタドガス。戦闘不能！ カケオ選手の手持ちポケモンが0となつたため、勝者。タキ選手！」

カケオはあの後、タキヒーローの気合の猛攻で逆転されて敗北した。

カケオはタキの精神力に押されてしまったのだ。それが一番の敗因である。

「タキ！」

試合終了後。カケオがタキに話しかける。

「お前馬鹿だな！」

タキの肩をポンッと叩き、笑顔でタキに馬鹿と言つカケオ。普通に考えると、これ程、礼儀の無い挨拶は無い。

「馬鹿つて……」

タキも引き笑いしながら反応する。

「そんな顔すんなよ。馬鹿は馬鹿でも素敵な馬鹿つてことだ。褒め言葉さ。こんな素敵な馬鹿と出会ったからこそ、ユリカは一步踏み出せたんだろ？」「

「馬鹿に素敵なんてあるのかなあ……それより、ユリカとどこかで会ったの！？　ユリカ元気にしてた！？」

「ユリカとついで前に過剰反応するタキ。  
これには、少しカケオが引き笑いになる。

「ああ。元気にしてた。お前に感謝してたぜ」

カケオは、ユリカの気持ちを全てタキに説明した。  
タキはその説明に一悶々と笑った。素直に嬉しかったから。

「じゃあ、そろそろ握手して解散といきましょっか馬鹿野郎」「

「……馬鹿野郎はないんじゃないかなあ……まあいいや！　楽しかったよ馬鹿野郎！」

「お前より馬鹿じゃねえよ！　まつ、いつかお前よりも馬鹿野郎になる予定だからまあいいか！」

二人の馬鹿野郎は、馬鹿みたいな笑顔で握手をかわし、その場を去つた。

タキ。Aブロック決勝戦進出！

## 第四十一回。マスターゲートAブロック決勝戦開始直前

Aブロック決勝が始まるちょっと前。

観客席にざわめきが起こつた。それもそのはず、コリカ。カケオ。マツリ。このマスター・ゲートAブロックで名勝負を繰り広げてきたトレーナー三人が、一人の男の周りに集まっているのだ。

「なんや……恥ずかしなってきたわ……」

当然、一人の男とはコルトのこと。周りの観客がコルトを見て、何者なんだあいつは！ とざわついていているのが少々恥ずかしいようである。

こんなことになつたのは簡単な話。コルトとユリカの二人で試合観戦していたところに、カケオがユリカを発見し、会流する。そして、マツリはタキとカケオの試合をチェックしていたので、カケオを見つけたマツリがカケオに話しかけ、結果的に会流……なんだか、奇妙な話である。

初めて出会つた組み合わせも当然あるが、そこはやはりポケモントレーナー同士、すぐに打ち解け仲良く会話する。コルトはポケモンを持つていないが、ポケモンに関する知識はあるので、全然話題にもついていけているようだ。

程よくポケモンの会話を話した後、話はAブロック決勝の話へ移行する。

つまり、タキの話だ。

「いよいよだなあ。だの 楽じみだあ」

話を切り出したのはマツリ。まるで次は自分が決勝戦に出るかのよつとワクワクしている。

「ホンマ楽しみやわ。マツリ、カケオと一試合一試合成長しとるからなアイシは。マツリと一回戦で当たつたらんかったらタキはカケオには勝てんかった。やけど、カケオはユリカと当たらんかったら一回戦へ進めんくてタキとバトル出来んかったやろな。凄い話や」

「ニヤニヤしながら言葉を返すコルト。その顔は、我が子の成長を見守る親のようだ。

しかし、そんなコルトの言葉に、挑発するようなニヤケ顔で言葉を返す人物が……

「おじさん。一つ抜けてるぜ。タキが自分と出会わなければ、タキはマスター�ートに出場出来なかつた。だろ?」

「おじさん、おじさんって……これでも、年の割にお若いです。ねつて言われんねんぞ! でも、上手に」と言ひながら。おじさん発言キャラにしたるー!」

「あっがとう! わこます。おじさん」

「一回も無いよつた……一回はあかんぞ! 一回はよー!」

年下のカケオが年上のコルトで遊んでいると、ユリカは遠くを見つめてタキと出合つたときの事を考えていた。

初めてタキと出合つたとき、タキはまだまだポケモントレーナー

として知らないことが多く、未熟だった。だから、タキに色々教えてあげようと、タキのお姉さんのような気分だった。

だけど、タキはもう未熟じゃない。むしろ、ポケモントレーナーとこう点では自分が未熟だ。だから、今はタキが自分のお兄さんのように見える。

どんどん立派になつていくタキ。もつ、自分なんて必要は無いのだろう。

嬉しいことだけど、とても悲しい。自分と手を繋いで歩いていたのに、気づけばそこにタキはない。自分の下からどんどん離れていく気がして……

「強くなつたなタキ。私なんて追い抜いてしまった。もう、私なんて必要ない。それは分かっている。でも、なんだか寂しいぞ。タキ……」

思わずもう齒くヨリカ。

その瞳はウルウルしている。

そんなヨリカの呴きを聞いてしまったマツリ。

カケオとコルトのじゃれあいを見て笑っていたマツリだが、ヨリカの呴きを聞いた途端、笑いがピタッと止み、ヨリカの肩をポンッとした。

「寂しいのは分がる。でも、それはヨリカどじて悲じめ。ポケモントレーナーどじてそれは嬉じい」とだらお？」

「クリと頷くヨリカ。

その瞬間。マツリの顔がまた笑顔に戻った。

「なら大丈夫だ。コリカは今、悲じんでる。だから、今は悲じめばいい。でも、タキの前では悲じんじゃ いげねえ。タキのポケモントレーナー どじての成長を悲 悲じんじや いげねえ。それが分がつでるなら大丈夫」

「ああ。 ありがとうマツリ」

眼にウルウルと溜まる涙を手で拭取り、マツリに礼を言つコ力。

「礼なんていらねえ。おらあもコリカと同じポケモントレーナー。  
気持ち…… 良く分がるからよ」

そう言つと、マツリはまた、カケオとコルトのじやれあいを見て笑い始めた。  
コリカも、それを見てクスッと少し笑つた。

こうして時間は過ぎていき、いよいよマスター ゲートA ブロック決勝戦が開始！

## 第四十一回 マスター・ゲートAブロック決勝戦……開始！

大観衆が見守る中、遂にマスター・ゲートAブロック決勝が幕を開けようとしている。

マスター・ゲートAブロックに集まつた八人の選ばれしポケモントレーナー達。そして、選ばれし八人の中から選びぬかれたポケモントレーナー一名。

ポケモンという世界に愛された一一名のポケモントレーナーが、今

「Aブロック決勝戦。ポケモンと共に戦う一体感バトルは常にギリギリ、常に熱戦！ バトルの後はニッコリ笑顔で握手も忘れない熱血紳士！ タキ選手の入場です！」

いつも以上に力のこもつた実況アナウンス。空からはライトアップされる光が眩しくて、思わず眼を細めてしまう。一回戦・二回戦以上に力溢れる会場。これがAブロック決勝戦。決勝というものの重圧。タキは生まれて初めて、大舞台というものに足を踏み入れる。いや、足を踏み入れた。

タキの入場により更にヒートアップする観客。中にはタキを、喉がかすれそうなくらいの大声で応援する声もあった。

そんな、色々な要素が混ざり合つたこの場所に対し、タキは思わず生睡を飲み込む。これだけ高揚した気持ちで飲み込む生睡。全然気持ち悪いとは思わなかった。むしろ気持ちよかつたくらいだ。タキは徐々に、この大舞台での緊張感を楽しみ始めていた。

「続いて、ポケモンを愛せぬ者にポケモンバトルをする資格無し！ そんな一途なポケモンLOVE！ ピリカ選手の入場です！」

タキの入場と同じように、空からライトアップされる光に照らされながら入場してくる一人の女性。

しかし、この女性。これだけの大舞台の中、緊張しているような素振りが一つも無い。応援してくれる観客に対し、被る帽子を脱いで、笑顔でお辞儀をしたり手を振つたり……確実にこの状況を楽しんでいる。無邪気な素振りに身を隠し……かなり大舞台に手馴れていると見える。

「マスター、ゲートAブロック。選ばれし八人が集まつたこの場所で、その中から更に選ばれた二名のトレーナー。ここに……ここに出揃いました!!」

実況アナウンスのテンションも最高潮。このテンションに同調したマスター、ゲートAブロックに集まる全ての観客。全ての観客が、実況アナウンスと同時に「うおーーーーー」と唸つた。ヒートアップする会場に響き渡るその数々の声は、タキの体をピリピリと刺激した。まさか、声がこれほどまでに力のあるものだと……タキにとって生まれて初めての実感である。

そして、いよいよバトルの時間。これ程の大舞台の中、自分は思うようなバトルが出来るのか、呑まれちゃ駄目なのは分かつてゐるけど……いや、大丈夫。出来る。自分は様々な強敵とバトルをしてきた。そして、目の前には更なる強敵がいる。それだけなのだ。自分はいつも通りにバトルをする。そうじゃなきゃ相手に失礼だ。いつもと違う自分で戦うのは相手に失礼だ。

タキは、そんなことを考えながら、モンスター、ボールを取り出す。そして一つ深呼吸を置き、ゆっくりとモンスター、ボールからポケモンを場に出す。

「頼むよロッキー。大事な先鋒。君に決めた！」

タキが繰り出したポケモンはロッキー。ロッキーも、このいつも以上に熱い空気を存分に感じているのだらうか。いつも以上にロッキーも熱い。

だがそのとち、「この熱い空気をぶち壊す出来事が起る……」

「きやー！『ゴローン』ですわ！しかも、こんなたぐましへ『ゴローン』しながらも、艶のいい『ゴローン』を見るのは初めて。流石は決勝戦ですわ。相手もちゃんとポケモンを愛しながらポケモンマスターを目指す……どちらかに偏らず両立しているというわけですわね。ピリカ感激ですわあああ……」

緊張感溢れる熱い会場だと想えないほどのはしゃぎ様。タキも悪態をつかれているわけではなく、純粹に褒められているので、空氣を考えろ！と思つていながらも、「いやあ～」と言ふ、少し照れながら頭をポリポリ搔くことくらいしか出来ない。正に褒め殺しである。

「そんないい『ゴローン』を見せられたら、ポケモンを出さないにはいられないわ。いくのですよピカチュウー！」

その場に似合わぬテンションは止まることがなく、ピカチュウと言ふ可愛らしいネズミといったような風貌のポケモンを場に出した。

名はピカチュウ。体長0・4m。体重6・0kg。尻尾はギザギザで、頬には赤斑点に見える「でんきぶくろ」と呼ばれる、電気を生成するための器官が備わっている。そして何より、黄色い肌が特徴的である。

「さや～！ いつ見ても見事ですわピカチュウ！ 相手の『ロローン』にも全然負けてませんわよ～！」

そう言いながら、自分の出したピカチュウに抱きつべピリカ。流石一途なポケモン』LV.E。伊達ではない。タキもピリカのはしゃぎつぶりを見ているばかりだ。

しかし、ピリカはマスター『A』ブロック決勝まで勝ち上がってきた強者。ただ、ポケモンに対し、はしゃいでいるだけではない。

一頻りピカチュウとじやれあつた後、さつまでのはしゃぎつぶりが嘘のような表情でピカチュウの下を離れ、タキに近づくピリカ。「一人ではしゃいで申し訳ありません。私、<sup>わたくし</sup>ピリカと申します。タキさんの『ローン』。とてもいい状態ですわ。大事になされてるようで、私としても嬉しく思います。では、いいバトルをしましちゃうね！」

さつまでのはしゃぎつぶりが嘘のよう、タキの目の前できつとお辞儀をして、スッと腕を前に出し、握手のポーズまで決めた。なかなか読めない女性である。

握手のポーズに答えようと、タキも腕をスッと前に出さうとする。しかし……

「ちよっとお待ちくださいですわ！ タキさん。私に対し、何か一言どうぞ。その方が私的に盛り上がるんで、どうか一つお願ひしますですわ～！」

なかなか難しい質問を出すピリカ。何か一言と言われた後、何を言おうかかなり迷うということを、ピリカは分かつて言っているのだろうか。それに、この緊張感の中、一言を即興で考えられるほど頭が回るはずがないというのに……その笑顔を見る限り悪気は無さそうなのだが……

案の定、タキもいきなり言葉を振られ、かなり動搖したのだろう。よく意味の伝わりにくい言葉を発言する。

「えつ……そうだなあ。当然のことだけど、ポケモンバトルに関して、あいつが悪い。こいつが悪い。そんな対象なんてない。勝っても負けてもLOVE & PEACE！ って何言つてんだろ僕……とりあえずLOVE & PEACEでいいからねピリカ！ あつ……後、タキさんじゃなくてタキでいいよー。」

タキの放った何を言いたいのかよく分からぬ言葉に対し、あんなに熱氣のこもった会場がシーンとなる。俗に言うスベったというやつだ。これでタキもピリカと同じく、空氣を考えろ！ の仲間入りである。

しかし、ピリカだけは物深そうに頷いている。タキの言葉がピリカには伝わったようだ。

「愛と平和。いい言葉ですわ。ポケモンを愛せぬ者・信じれぬ者、ポケモンバトルを……いえ、ポケモンと触れ合ひ資格無し……ですわ。さて、これ以上長引くと折角見に来てくださってるお客様にも悪いですわね。それではタキ、改めてよろしくお願ひしますわ！」

仕切りなおして、また腕をスッと前に出し、握手のポーズを決めた。

そして、今度こそ固い握手を交わした二人。

これでようやく、Aプロック決勝戦……開始！

## 第四十二回 相性はタイプ以外にも

ロッキーVSピカチュウのバトルが始まろうとしているなか、一人、今の現状に納得出来ていかない人物が。

「どうじうつもりだ。どうして、タキのロッキーに対し、ピカチュウをぶつける……」

ユリカだ。ユリカは人一倍ポケモンの相性を気にするトレーナー。雷タイプのポケモンの十八番技である電撃技は、ロッキーのような岩・地面タイプのポケモンには通じない。となると、これは明らかにミスマッチ。

しかも、タキはピリカよりも先にポケモンを出した。つまりピリカには、相性で有利にたつ権利があるも同然。後出しジャンケンが出来る状態なのだ。しかし、ピリカは明らか不利な雷タイプのピカチュウを出した。後出しジャンケンで故意に負けたのだ。ユリカが疑問を持つのも分かる話。

だが、その答えはロッキーVSピカチュウ。このバトルで明らかになる。

ユリカは、これ以上何も言わず、静かにバトルを見守ることとした。

「それでは、ゴローンVSピカチュウ。バトル開始！」

いよいよ始まった。マスター�ートAブロック決勝戦。  
決勝戦の勢いに身を任せ、まず攻撃を仕掛けたのはロッキー。

摩擦が起こるほどどの回転率で回転しながら転がる勢いを溜めてゆ

く。そして、勢い十分、標的ピカチュウ。「ロロロロ」と猛スピードで転がる。

これに対しピカチュウ。焦るどころか、手で耳を弾き、ピクピクさせるほどの余裕振り。

どこから現れる余裕なのだろうか。

「遅いですわ。スローですわ！ ピカチュウ。高速移動ですわよお！」

勢いよく、そして自信満々に、ピカチュウに人差し指をピッと差して、そう命令する。

命令されたピカチュウは、ピリカの命令通りにロツキーの転がる攻撃をかわそうと高速移動。そして……

「そんな……どうこうスピードー？」

タキは驚いた。タキは絶対の自信があったのだ。ロツキーの転がるに対し、余裕を見せるピカチュウとピリカ。それが通じるほどロツキーは甘くない。タキはそう信じている。余裕は最大の隙。今までの戦いで、それも身に染みるほど実感した。

しかし、ロツキーの転がるは、ピカチュウを捉えた手ごたえが無い。余裕を見せ、隙を作つても捉えることが出来ないピカチュウの圧倒的なスピード。タキはまだ、これ程素早い移動をするポケモンを見た事がない。

「そういうことが……ロツキーはポケモンの中でも攻撃スピードが速いほうではない。相性というのは属性だけではないというわけね……」

「」の時、コリカは気づいた。そして、人一倍相性を気にする者として、自分を悔いた。なぜ、ピリカがロツキー相手にピカチュウを選んだか。ピリカの手持ちポケモンで一番……

「ピカチュウ！ 転がり終わりで隙が生まれましたわ！ すかさず電光石火！」

ピカチュウから見れば、ロツキーの転がり終わりの反動は、時が止まっているも同然。焦らず的確にロツキーの弱点を直撃。急所に当たったというやつだ。しかし、それ程大きなダメージはない。中ダメージといったところだ。的確に弱点に命中したというのになぜ中ダメージなのだろうか……

「ロツキー！」

タキが心配そうな声でロツキーを呼ぶ。

ロツキーは、大丈夫だということを伝えようと苦しそうにしながらもニーツと微笑む。

「美しい。バトル中にもポケモンを思いやる。愛ですわ。ですが、心配なさる必要はございません。私のピカチュウは、全くと言つていいほどパワーがございません。ポケモン愛を見せてくれた代わりに、一つ教えておくと防御力もございませんわ。恐らく、タキのゴローンの攻撃を一撃でも受けければダウンするでしょう。でも……私のピカチュウはタキのゴローンには負けませんわ！」

これだけバトル中に、自分のポケモンの情報をペラペラと喋るトレーナーがいたどうか。どこまでもお喋りで自信家なトレーナーである。

しかしそれは、それだけ自分のポケモンに対し、自信をもって信

じて いる証拠。ポケモンバトルにおいて、自信家といつのも一つの大 事な要素である。

「その理由。パワー・防御力、その全てを捧げたスピード……だよ ね……」

タキは、声を震わせながらそう言つ。

「その通りですわ。どうですか？ 絶望感を味わえましたか？」

余裕綽々な笑顔で言葉を返すピリカ。

「絶望感……確かに、対処法を思いつかないけど、それ以上に今、凄く楽しいんだ！ 本当にポケモンって面白い。ポケモンも一匹一匹に個性があるけどトレーナーも一人一人に個性がある。それも、みんな驚くほど違つんだよね！」

絶望感。いや、むしろ希望に満ち溢れたような表情でそう言つタキ。

声を震わせながら放つたその言葉は絶望感から表れた震えではな い。今が楽しくて仕方ない。だから抑え切れない。そんな震えだ。

「美しい……ですわ……」

そんなタキの心からの言葉に、ピリカは余裕の表情を失くした。絶望感からの振るえ声だと思っていたピリカ。予想を大きく外し、一瞬、空いた口が塞がらなかつた。

しかし、それも一瞬。今度は、覚悟を決めた。余裕など見せやしないであらう笑顔を見せる。

「どれだけ美しくても愛があつても、これはポケモンバトル。その先にある勝利を手にしなければ無……ですわ。タキ、あなたは美しい、愛もある。さあ、最後に私から勝利を奪つ。これであなたは私の中で完成しますわ。まだ不完全……不完全ですわ！」

ピリカは、落ち着こうと自分に言葉を投げかけ、自分で自分に言い聞かせる。

「決めた。この戦いに戦略なんて必要ない！ 僕のロッキーが攻撃を一撃与えてくれる。そして勝利する。僕はそう信じる！」

「なら私は、ピカチュウが攻撃を全てかわし、一撃も食らわず勝利する。私はそう信じますわ！」

この一言により、長らくストップしていたバトルが動き出した。しかし、タキとピリカ。この二人はトレーナーである。しかし、共にポケモンに命令を出そとはしない。「頑張れロッキー！」「大丈夫ですわピカチュウ！」二人とも、観客視線でバトルを見つめる。

バトルは一方的なピカチュウ有利に進んでいくように見える。岩を投げても、転がっても、殴りにいつても……その圧倒的なスピードでロッキーの攻撃をかわし続ける。

しかし、一撃でも食らうとピリカいわく、一貫の終わり。常に有利ともいえない状況。これが、二人のトレーナー。そして、大勢の観客の緊張感を高ぶらせる。

何度も何度も電光石火を食らい、傷つくロッキー。  
もう、これ以上食らうと……というほど回数を何度も食らっている。

しかし、ロッキーは倒れない。ロッキーのタフさは、ハナダジムのジムリーダー、カスミとのアズマオウ戦でも知るとおり折紙つきだ。だからこそ、勝機が生まれる。飛びぬけた根性は圧倒的なスピードをも跳ね返すのか……

流石のピカチュウも、ノンストップで走り回っている。いつもなら決着がついてもいい頃なのに倒れない。何度も食らわせてはいいなカチュウのスタミナは、こういう状況になるまでつけられてはいけない。徐々にスピードも落ち……るはずなのに、ピカチュウは、自分の最高速度を保ち続ける。スピードが落ちてしまふと攻撃を食らってしまう。そうなれば自分は負けてしまう。そんなことにはなりたくない。だから、ピカチュウも根性で保ち続ける。ロッキーに勝機を生ませるわけにはいかない……

だが、当然無理をしていれば隙は生まれる。  
そして、無理をしていて一番隙が生まれやすい場所……足だ。

ピカチュウは一瞬であるが体勢を崩した。  
これはこの試合にとつては致命的な隙。その隙をロッキーは見逃さない。最後の力を振り絞り拳を振るう。

「ロッキー！ セーだー！」

タキがようやく逃げてきた勝機に、楽しそうに応援する。

「大丈夫ですわピカチュウ！ あなたは……セーだーですわああ！」

ピリカもいよいよ作ってしまった隙に対しても、しかしながら樂

しそうに応援する。

バトルの勝敗を超えた何かをピリカは感じているのだろうか。

「……『ローラン。戦闘不能！』

ギリギリの世界だった。ロッキーの拳があと少しズレていたら、戦闘不能になっていたのはピカチュウの方だつただろう。

ロッキー／VSピカチュウ。執念でかわし切ったピカチュウに軍配が上がった。

## 第四十二回 相性はタイプ以外にも（後書き）

自分で書いておいてあれだが、ロッキーの転がるは、大抵外れて自分がダメージを受けるなあ（汗）

そして、決勝戦のピリカ。これも自分で書いておいてあれだが、バトル中だというのによく喋る（笑）

## 第四十四回。奥義

タキ二体目のポケモン。

現在タキは、ピリカと一体差ある。このまま平行線で戦いが続ければ負けるのはタキ。

なのでタキは、ここで試合の流れを変えなければいけないと判断した。

タキは今までの戦いを振り返る。その一試合一試合。常に試合の流れを変え、勝利を呼び起こしてくれたポケモン……頭に甦るはヒーロー。ヒーロー。ヒーロー！

試合の流れ……ヒーローに託す。

対するピリカ。恐らく一度連續同じ手は通用しない。そう考え、ピカチュウをモンスター・ボールに戻し、何やら大きな貝のよくなポケモンを場に出す。

名はパルション。体長1.5m。体重132.5kg。非常に固い殻と大きなトゲが印象的なポケモンである。

ヒーローバルション。バトル開始早々、ヒーローの火炎放射とパルションのオーロラビームがぶつかり合つ。

「長い！ とてつもなく長いぶつかり合い！ 魂と魂のぶつかり合い。そういうっても過言ではないほど……どちらも引けない！」

攻撃を止めようとしない両ポケモンに賛辞の言葉を送る実況アナ

ウンサー。

戦いが動くのは火炎放射とオーロラビームのぶつかり合いの後、どちらも引かずぶつかり合った技は相殺。

相殺した直後、とてつもなく素早い反応を見せたのはヒーロ。相殺した爆風に身を隠し、一気に間合いを詰める。そしてもうそこはヒーロの間合い。

「ヒーロー、そのままの勢いで体当たり！」

タキの命令を受けたヒーロは、間合いを詰めた反応速度の勢いそのままにパルシェンに体当たり。この体当たりに反応できなかつたパルシェンは、ヒーロの体当たりをモロに受ける。これは大ダメージ……と思われた。しかし、体当たりを受けたというのに、ピリカガニヤツと笑つた……

「流石見事ですわ。息ピッタリのコンビネーション。身震いがします。でも、それは私のパルシェンではなかつたらの話ですけど！」

「え……効いてないつ！？」「

ヒーロの体当たりに対し、吹っ飛ばず動じずのパルシェン。ダメージを受けた様子など一つも無い。

「私のパルシェンの防御力は並じやないですわ。半端な攻撃は無駄だと思うことですわよ。しかし、もう遅いですわね……パルシェン！ とげキャノン！」

パルシェンの固い殻についている一際目を引く大きなトゲ。その大きなトゲがキュルキュルと回転を始める。そして、その回転する

トゲは照準をヒーロに定め発射！

「一発！」

ヒーロの体に刺さるトゲ。

「もひ一発！」

一本目。

「更にいきますわよおお！」

三本目…

「まだまだですわあああ！」

四本目… しかし、これは辛うじてヒーロがかわす。丁度、パルションのとげキャノンも打ち止めとなつた。

素早く、刺さる三本のトゲを抜くヒーロ。しかし、トゲを抜くときの痛みは尋常ではなく、痛みで膝をついてしまう。そして、チラシとタキの方を振り向いた。それ程のダメージ。

それに気づくタキ。タキもこのダメージはヤバイと感じている。しかし、それを表情に出すわけにはいかない。タキは無理に大丈夫だという表情を作る。そしてヒーロに言葉を投げかける。

「大丈夫だよヒーロ。全然大丈夫。これからだよヒーロ！ もあ… 行こう！」

タキの言葉はヒーロに届く。無理にでも…しかし、諦めずに自

分を励ましてくれるタキに答えたい。だから立ち上がる。タキに安心して欲しいと願う。だから立ち上がる！

しかし、これだけの重症の中、ピリカが黙つていてくれるはずはない。

防御力、攻撃力を兼ね備えたピリカのパルシェンを打ち破る手段。もう、答えは一つしかない。ピリカのパルションの弱点は、あまりにお粗末なスピード。それを狙い、打ち破れる手段……

もう、考へてる時間はない。勝負は一瞬。判断も一瞬。伝える時間も無い。タキは一筋の望みをかけて、頭にパツと浮かんだ一つの手段を、ヒーローに目で伝える。

ヒーローもタキの目で送る合図にて、コクツと頷き動き始める。

決死のアイコンタクト。成功なるか……！

「また……まだですの！？」 もう、通じないことは分かつていいはず。焦りが状況判断を鈍らせましたのに！ チャーンスですわああ！」

勝利を確信したピリカ。

しかし、一番隙が生まれるときは勝利を確信した瞬間……

「違うよ……僕たちの狙いは違つところにあるー。」

タキの言つとおり、ヒーローの放つた体当たりはパルションに向けてのものではない。パルションを越え、パルションの真後ろでピタツと止まる。

「な……何をするおつもりですか？ 私のパルションは並の攻撃は

受け付けませんわよ……」

言葉では強がりを放つものの、とてもなくヤバイ出来事が起ころのは感づいているようで、流れ出す汗。引き笑いのような顔、表情までは誤魔化せない。

「次の攻撃……次の攻撃が通らなかつたら、正直もう手段はないよ……でも、意地でも通すよ。意地でも……僕とヒーローは通す氣でいる……」

迷いの無い声色でそう言い放つ。

そして、静かに最終手段の命令を告げる。

「ヒーロ。 地球投げ」

パルションを抱え上げ、上空へと飛び去る。

これは、マツリのカイリキー戦でも見せた。そして破つた。あの……大技だ。

これに対し、ピリカは何も言つことが出来ない。眼を見開き、生唾を飲み込み、汗を垂らし……明らかに冷静さを失つた表情で上空を見つめる。

ヒーロの地球投げ。上空でグルグルと回るその姿に、会場から応援する声が消えた。観客全員が、静かに息を呑んで上空を見つめる。この瞬間、会場は真に一つとなつた。タキを応援する観客。ピリカを応援する観客。みんな上空を見つめる。どちらを応援するとか今は関係ない。ヒーロの描く、球体……美しく綺麗な地球に、観客全員が魅入る。

そして……勢いよく急降下。その勢いで地面に叩きつけられたパルション。

あの、ヒーロの体当たりにビクともしないパルションが目を回し気絶している。戦闘不能だ。

それと同時に、観客全員から歓声が巻き起しつた。  
地球投げ終了同時。また、応援する声は甦る。

「…………はつ！ パルション！ 戦闘不能！」

審判も、地球投げの美しさに魅入っており、判断が遅れたようだ。  
審判をも魅了する地球投げ。正に必殺技。奥義に相応しい技である。

そして、ポケモン交代。タキはそのままヒーロ。  
ピリカは震える手でピカチュウを場に出す。

しかし、これはピリカの焦りからのミスなのか。  
ヒーロの反応速度は、数あるポケモンの中でもトップクラスだと  
いえる。いくらピリカのピカチュウといえど捉えられそうな気もあるのだが……

「危険……危険ですわ！ とくとお見せをせていきました。タキとリザードンの意地……次はこちらが意地を見せる番ですわ！」

試合開始早々、ピリカの命令でピカチュウは一直線にヒーロに電光石火をぶつけにいく。

「ヒーロ。よく見るんだ……ヒーロなら捉えれるよー。」

集中するヒーロ。

しかし、捉えられることはピリカは予想済み……

「そんなこと分かってますわ！ いくら非力なポケモンでも、全てを捨てた意地の一撃……なめちゃいけませんことよー。」

真っ直ぐ。どこまでも真っ直ぐにヒーロに電光石火を繰り出すピカチュウ。

これなら、どんなポケモンでも捉えられそうな軌道である。

例に漏れず、ヒーロは、腹に思いっきり電光石火を受けながらもピカチュウを掴む。

そして、思いっきり火炎放射をぶち込む。

「よし！ よくやったよヒーロー！」

防御力のないピカチュウは、一撃で目を回してダウン。戦闘不能だ。

「ピカチュウ！ 戦闘不能！」

審判もピカチュウの戦闘不能を告げる。

「甘いですわ！ 甘いですわ甘いですわタキ！ 私のピカチュウの意地は確実に通りましたわ」

ピリカがそう発したその時、ヒーロの体がグラッヒと揺らぎ、地に倒れた。

ピカチュウと同じく戦闘不能である。

「フ……リザードン！ 戰闘不能！」

パルションのとげキャノンで受けた瀕死のダメージ。そして、そこから立ち上がり、瀕死のダメージで放った地球投げ。そして、最後のピカチュウの意地の一撃。ヒーローの限界を破つたヒーローの意地を、ピカチュウの意地が打ち破つた。

「ヒ……ヒーロー……」

倒れるヒーローを悲しげな表情で見つめ……いや、頬をパンパンと叩き、ポケモントレーナータキの顔に戻るタキ。ここで悲しんでいるわけにはいかない。前へ進まないと……

「よく頑張つてくれたねヒーロー。絶対勝つから。負けないよ。僕。負けない！」

そう言い、モンスターボールにヒーローを戻すタキ。  
これで残すポケモンは共に一体づつ。ヒーローの活躍で試合状況をイーブンに戻し、タキバスピリカ。最終決戦へ！！

## 第四十五回 決着決着決着！！！

両者残すポケモンは一体。息を呑み、流れる汗を拭くのも忘れ、タキはスッとモンスター・ボールに手をかける。

いつもよりもモンスター・ボールを手に取る距離が短いように感じる。不思議だ。なんだか、モンスター・ボールの方から自分を呼びかけている気がする。不思議だ……そうか……

「僕を呼んでくれてるんだね。ごめんね。まだ一度も触れ合えてなかつたね。初めまして僕がタキです。僕を望んでくれてありがとうございます。初めましてエビワラー。僕が……君のトレーナーです！！」

眼を閉じ、二ツ「リ微笑みながら、優しくモンスター・ボールを投げ、エビワラーを場に出す。

エビワラー。体長1.4m。体重50.2kg。見た目の通り、パンチを得意とするポケモン。その破壊力は殺人級である。

そして、対するピリカ。どうやら対戦相手のタキに対し、感激中の様子。

「いいですね。最高ですね。こんな熱いバトルはいつぶり？ 私のポケモン達も皆感激……しかも、バトル終盤。場に出すポケモンに初めましてきましたわ。どこまで最高ですの！ これは絶対……負けられませんわ」

一頻りはしゃいだ後、すぐにポケモントレーナー・ピリカの顔に戻る。

そして、豪快にモンスター・ボールを手に取り、モンスター・ボール

を放る。そして、大きく叫ぶその名は。

「いきますわよペルシアン！ 最後に笑うのは、私ピリカ。そして、私の全てのポケモン。その一択ですわあああ！」

ペルシアン。体長1'0m。体重32'0kg。額に宝石がついているのが特徴的。

ポケモンは出揃った。後は、バトルのみ。タキVSピリカ。エビワラーVSペルシアン。マスター<sup>ゲート</sup>Aブロック決勝戦。ポケモントレーナーとして、ポケモンとしての全てをぶつけたバトルの結果が今……

「では……エビワラーVSペルシアン……バトル開始！！！」

始まった！！

まず、攻撃を仕掛けるはペルシアン。縦に横に、不自然に揺れていなかと思うと、凄まじい瞬発力でエビワラーに飛び掛る。

そして、見るだけで痛そうな鋭い爪を浴びせようと、エビワラーに向け、爪を振りかざす。

いきなりの奇襲、ピリカは完璧に成功したと小さくガツツポーズをした。ペルシアンの奇襲攻撃。今まで幾度無くバトルしてきたピリカ。そのピリカのペルシアンの奇襲攻撃の成功率。実に100%。外したことが無い。それほどの瞬発力なのだ。

その証拠に、ペルシアンが飛び掛った瞬間、エビワラーは反応することが出来ていなかつた。このままでは当たる。

しかし、一人の男は余裕そうにエビワラーを見つめる。

それはタキではない。タキはしてやられた。そんな顔をしている。もつ、攻撃は当たったとでもいうよに、既に次の展開に頭を働かせようとしている。

もう一度言づ。それはタキではない……

「なめるでねえ。タキもピリカも……おらあのエビワラー。なめぢやいげねえよ。エビワラー。」のフィールド、おめえのフィールドにがえでやれ……おつゞ。言つて聞く間に聞きこえだ。むづいソラは……おめえのフィールドだ

エビワラーの元トレーナーマツリ。マツリには全てお見通しだった。

こんな緊迫したムードの中、一人優しい笑顔でエビワラーを見つめ、平氣で独り言をかます。そして、その独り言は現実となつた……

「かわした！ かわしましたエビワラー！ テータによると、ピリカ選手のペルシアンの奇襲攻撃の成功率。実に100%。しかし今、この場で、確かにかわしました！ タキ選手のエビワラーが不敗神話、いや、奇襲神話を華々しく打ち破つたあああ！ これは歴史に残る瞬間！ 我々が生き証人！ 見事。感激です！」

盛り上がるアナウンス。耳鳴りが起こりそつうな程の観客の声。タキとピリカ。ポケモンバトルに命を刻み込むトレーナーまでもが突然とエビワラーを見つめる。

マツリの言づとおり。今、この瞬間。少なくともこの瞬間、この会場はエビワラーのフィールド。エビワラーに呑まれる会場の中、ただ一人冷静に笑みを浮かべて「おつげえおつげえ」と頷くマツリ。流石である。

「なんですねこの空気……まるで私達が敗れたかのよつな……なめちゃいけませんことよ。今まで奇襲攻撃が成功してきたのはタキのような素晴らしいトレーナーと巡りあわなかつただけの話。ただそれだけですわ。そんなことで慢心なんて……そんな気持ち一欠けらもいじやいません。ですわねペルシアン」

そしてここにもう一人、エビワラーに呑まれず、自我を取り戻したトレーナーが一人。静かに、だが力強く。ペルシアンに向け言葉を発する。

ペルシアンは、田線をピリカに向け、スッと戦闘態勢に構える。

「尻尾が水平……流石ですわ。それでこそ私のポケモン。勝ちますわよ。絶対。勝ちますわよ！」

その言葉と同時に、ペルシアンの眼がギッと見開き、エビワラーを捉える。そして、飛び掛る！

「来たよエビワラー！」

タキも、ペルシアンの氣配を察知し自我を取り戻す。

そして、ハツと言葉を発したその瞬間。エビワラー。動く。

「……向ひづが上……ですの？」

ピリカ絶句。

そもそもそのはず。攻撃を仕掛けたのはペルシアン。しかも、瞬発力重視というお墨付き。

しかし、蓋を開けてみれば、攻撃の瞬間は互角。ペルシアンの爪はエビワラーの頬をかすめ、エビワラーの拳もペルシアンの頬をか

すめた。

つまり、瞬発力。間の差を埋める最大の能力。これは、エビワラーの勝利。

この時、タキは一つ、思いついたことがあった。  
そつくりなのだ。この間を埋める動き。そつくり。もう、叫ばずにはいられない。

「タイソン！ 君の名前はタイソンだ！ よしタイソン！ 一気にいけ――！」

飛び跳ねながら命令をだすタキ。なんて嬉しそう。楽しそうな表情なのだろう。

そんな表情を見て、ピリカは思わず顔が緩んでしまった。もう、この時点でこのバトル。勝負は決していたのかもしれない。

タイソンは、タキの勢いを受け取ったかのように、右手に炎、左手に氷の膜を浮かびあげ、ペルシアンに拳をぶちます。そして、最後に電気の膜で終結！

「ペルシアン戦闘不能！ ピリカ選手の手持ちポケモン。これにより、勝者。タキ選手！ そして、マスター・ゲート・ア・プロック……優勝決定！」

会場からは「おめでとう」の声が上がる。そんな声援に包まれながら、改めてタキは自分がポケモントレーナーなんだと思い直す。今はただ、純粋に嬉しい。

「タキ。おめでとうですわ」

ピリカがタキに話しかける。

「ありがとうピリカ！」

「う」コトと微笑み、言葉を返すタキ。

その微笑みに対し、一つ大きくため息をつくピリカ。

「それですわそれ。その顔」

タキの微笑んだ顔を指差すピリカ。

「うめん……ちょっとはしゃぎすぎたね」

当然、ポケモンバトルには勝者と敗者が存在する。当然、勝者は嬉しいが敗者は悔しい。勝者が喜ぶのは当然だけど、それを敗者の前でするのは良くない。タキはいけないこととしたと反省した。

そんなタキに対し、また一つ大きなため息をつくピリカ。

「そうじゃありませんわ。タキ。タキの笑顔はポケモンを……相手トレーナーでさえも惹き込む力があります。そのせいで、私は後で、私のポケモンたちに謝らなければなりませんのよ。相手に惹き込まれ、自分のポケモンを一人ぼっちにするトレーナーなんて言語道断。しっかり謝りますわ。まあ、話をまとめますと、タキ。あなたはやっぱり最高ですわあああ……」

言葉を言い終わると同時に、ペルシアンのような勢いでタキに抱きつくピリカ。

これには会場からも、「おお～」という言葉が響いた。

「なつ……」

これに最もオロオロしたのはユリカ。言葉にならない反応を見せる。

そして当然。

「そんな赤くなつてまでムキになんなつて。ユリカ姫。これくらい  
じゃタキ王子は逃げはしませんよお～」

おちょくるのは力ケオの役目。

力ケオのちよつかいを真に受けたユリカは、勢い良く立ち上がり、  
力ケオに人差し指を指して反論する。

「違う。私はそういう意味で心配しているのではない！ 私はただ  
純粋に……」

「」でユリカの必死の反論を遮る力ケオ。

「分かつたから落ち着きなさい。俺が悪かった。よく分かりました  
ごめんなさい」

そしてその後、誰にも聞こえないような声で何か……呟いた。

そして場面は変わり、抱きつかれてアタフタするタキ。

「恥ずかしいから！ 憂い恥ずかしいから離れて離れて！」

タキが赤面しながらそう叫ぶ。

すると、ようやくユリカが離れた。

「何照れますのタキ。」んなの挨拶じゃないですか。意外とウブですね」

フツと笑うピリカ。

この時タキは地味に傷ついた。でも、なんだか笑みが込み上げてきて、最終的にピリカと一人で大笑い。とても楽しいバトルとなつた。

そして、いよいよ退場。そこでピリカは言った。

「タキ。あなたとはまた会う」とになるでしょう。そんな気がしてならないですわ」

「うん。僕もそんな気がする。また会おうねー」

「はー！ では、」きげんようー」

この言葉は決して嘘ではない。ポケモントレーナーの勘というのは存在し、きっといつかこの二人はまた……出会う」となるのであろう。コリカやカケオと再会したときのように突然に。一人は出合うのであるう……

そして、タキ。マスター ゲート ブロック。制覇ー！

## 第四十六回 優勝決定戦会場へGO！

マスターAブロックを制覇したタキ。

これにより、タキはマスターAブロックの代表として、マスターBブロック制覇者との優勝決定戦が行われる。

その一大イベントに集まる人数は半端ではない。Aブロック会場では入りきらない人数が優勝決定戦に押し寄せる。会場移動をしないとならないほどの大人数。

そんな一大イベントの中心人物にタキはなる。それはもう半端ない重圧がのしかかる。

しかし、マスターAブロックで死闘を繰り広げてきたタキ。精神的にも少しばかり成長したのだろう。重圧に呑まれるどころか、ワクワクした顔つきで優勝決定戦会場へと向かう。

そのワクワクした顔つきは、タキの移動中にピッタリとガードしているガードマンが「緊張してはおられないのですか？」と聞くほど。それに対しタキは「してるよ。凄くしてる。でも、それ以上にワクワクが止まらないんだ」と返す。これにはガードマンも普ッと笑ってしまう。

そして、しばらく歩くと、前に立ちはだかる大きな会場。

これが、僕が戦う会場かと、流石のタキも息を「ゴク」と飲み込む。そこに、ガードマンの一人がタキの肩にポンッと手を置き、話しかける。

「どうです。大きな会場でしょう。タキ様には更に大きく見えることだと思います。多くのトレーナーは、ここでバトルすることに憧れを覚える。しかし、ここまで辿りついたトレーナーは、この大き

な会場を見て、バトルすることに少なからず恐怖を覚えるのです。  
タキ様はどうですか？」

タキは少し考えて、頭を人差し指でかきながら、苦笑いで答えを返す。

「いやあ。恐い。凄く恐い。ワクワクするのは確かだけどやつぱり恐い。でも、この大きな会場で恐怖よりもワクワクが勝つたらもつといいトレーナーになれる気がする。だから、僕は精一杯ワクワクするよ。恐怖を感じながらワクワクを感じる。これって普通じゃ絶対味わえないことだから。精一杯贅沢を楽しみなきゃね！」

正直に答えるタキに、ガードマンは少し啞然とした後、また普ッと笑った。

「私、会場までトレーナー様を護衛する中立の身でありながら、あなたを応援したい気になってしましましたよ……あつ、これ秘密ですよ。こんなこと知れたら私、クビになってしまいますので！」

「うん！ ありがとう。頑張るよー！」

慌てるガードマンに、ニコッとして親指を立てながらガードマンに言葉を返すタキ。

そんなタキに、笑顔で深くお辞儀をするガードマン。

そんなガードマンに見送られながら、タキ。優勝決定戦会場の中へ足を踏み入れた。

## 第四十七回 マスター・ゲートBプロック制覇者

優勝決定戦会場へ足を踏み入れたタキは、案内人の案内の下、バトルフィールドへ。

一步一歩地面を踏みしめる事に、自分の心音が聞こえてくる。恐怖と対面する自分。ワクワクと対面する自分。一いつの自分が混ざり合つて、そしてそれが一つとなり自分となる。こんな贅沢な体験は無い。

「さあ。この扉の先がバトルフィールドでござります。そして、この扉はタキ様自身がお開けになってください。恐らくこの先は、タキ様がまだ味わったことの無い世界。自分で、自分のタイミングで、自分の見てきた世界の先を！」確認くださいませ」

着いた。いよいよこの先がバトルフィールド。

案内人が言うに、この先はまだ自分が味わったことの無い世界。どんな世界だ。分からぬ。分からぬからこそ自分で開くしかない。

扉が重い。世界の先を見るのを拒んでいるのか自分が……いや、そんなことはない。見たい。見たい。見たい！ タキはそう思つている。

そしてもう一つ。この扉を開けないと、マサヤとの約束が果たせない。マサヤはきっとBブロックを勝ち抜いてきている。そしてもう、世界の先にいる。だから、自分も開けないと。自分で進まないと……自分で決断しなきゃならないことは必ずある。多分、今もその一つの時。

重い扉をゆっくりと開くタキ。

そして、世界の先へ一歩足を踏み入れるとか」は……

「「これが……世界の先……」

「圧倒的。なんて広や。わざわざまで自分の心にあつた恐怖とワクワクが消え去る。

世界の先。そこは、なんて圧倒的な世界。タキの心を一瞬でも無にしてしまう。そんな世界。

その圧倒的な世界を体感し、観察を見渡し、そして、前を見る。そこに見たのは、この圧倒的な世界の中、呑まれたとは思えない真っ直ぐな瞳で「ひかりを見つめる男。この男はマサヤじゃない。この男は……」

「よお。タキじゃないか。久しぶり！」

「……シヨウ……」

タキの瞳に映るは、シヨウ。まさか、ここに残念するとは……

「まさか、こんなとこで出会つとはなあ。運喰つてのは存在するのかねえ」

しみじみと「ひかり」、タキは一つの疑問を感じた。

「シヨウ。君はこの場に来て、どうしてもう余裕でいらっしゃるの？僕、正直今、呑まれてるよ。何も感じない。シヨウに呑めつても何も感じないくらい何も感じられない。呑まれてる」

そんな真面目な質問に、シヨウは、おこおこため息をつく。

「タキらじくない質問だな。じつしてそう余裕でいられるの？ じやねえよ全く。考えてみる。俺達の田標はどーだ？」

「ポケモンマスター……」

「だる。じゃあ、ここのまどーだ？」

「マスター……」

「そうだな。なら、呑まれる必要なんかないじゃないか。ここはマスター……ゲート。ポケモンマスターへの通過点だぜ？ 通過点ってのは通るつてことだ。そんなとこで呑まれてたら、そこから先はどこも進めねえだろ。大体、俺は呑まれるつて表現はあまり好きじゃない。呑まれるつてことは、バトルで勝つ負ける以前に自分に負けてんじゃねえか。そんな気持ちじゃなれねえよポケモンマスターってのは

この瞬間。この大きな会場。タキの心を呑み込んでしまひ程の会場が静かにピタッと止まった。呑まれてしまつた。タキも、観客も、会場でさえも……ショウが呑み込んだ。

タキは改めてショウの凄さを思い知った。しかし、それと同時に、自分の中で何かが生まれた。吹つけられたというのとはまた違うこの感覚。全てがリセットされ、また自分を構築するこの感覚。タキにとって、ショウの一言は救いの一言となつた。

「ありがとうショウ。ようやく僕になれてきた。この借り……バトルで返すよー。」

「おひ。利子付きで返せよ。期待すんぜ」

「のやり取りに、優勝決定戦を見に来ているコルト達も動搖を隠せない。

「あれがショウか……」

「リカとコルトが声を揃えてそう囁く。

一人は、旅の途中、度々タキからショウの話を聞いていた。まさか、これほどのトレーナーとは思ってはいなかつたが……

「まだ戦がつでねえけど、間違いなぐ強いな」

「悔しいナビ、トレーナーとしての実力では僕達より上……か

マツリとカケオがショウを称賛する。  
特に、カケオが出会った事もないトレーナーを称賛するなんて初めてのことである。

「一言でタキの瞳を蘇らしよった。そりやマサヤが負けたのも頷けるわ……」

「タキ……」

脚、ショウを称賛し、タキを心配する。なんだか、優勝が決定してしまったようなこの空気。

タキ。この空気を覆すこととは出来るのか……

## 第四十七回 マスター・ゲートBプロック制覇者（後書き）

久しぶりですショウ。回数にして第九回ぶり。  
実際の時間として、約一年三ヶ月ぶり。

ちなみにショウといつのは、タキの友達であるライバルです（汗）

## 第四十八回 友達

異様な雰囲気に包まれた会場。少しの間の沈黙が流れる。だが、この沈黙を破るのもまたショウ。

「なあタキ。あそこで見てる団体さんはお前の友達か？」

ショウが、会場の一点を指差す。

「あつ……眞……見てくれてたんだ」

ショウが指差したのは、当然、ユリカ。コルト。マツリ。カケオの四人。

どう見てもタキを見つめているその四人に、ショウは気になつたようだ。

だが、タキは知らなかつたのだ。というか、考える暇がなかつた。タキは今までずっと、一人で戦つてゐる氣でいた。いや、ポケモンと自分の二つの精神で……

しかし、フィールドに立つ瞬間は自分一人。だが、それは違つたのだ。

この瞬間。タキには、このフィールドがとつてもとつともちっぽけなものに見えた。

だつて、周りにはユリカが、コルトが、マツリが、カケオが、この場にはいないがピリカもいる。皆、自分の周りで見ていてくれてゐる。自分一人じゃない。恐いものなんて何も無い。

「どうやら、『名答みたいだな。羨ましいね。一人旅つてのは辛いもんだぜ全く』

ショウがため息を一つつきひとつ呟く。ショウはびりやう、じこまで一人できたようだ。

やはりタキには、人を惹き付ける何があるのだろう。ショウはそう思った。

「ありがとうショウ。僕はいつもいつもショウに助けられてばっかりだ。今も……今だつて僕はショウに助けられた。これで僕は僕としてショウと戦える。もう、何も恐くないよ。でもそれは……」

「ユリカ！ ルト！ マツリ！ カケオ！ ありがとう！ 僕…  
精一杯頑張るよ…！」

タキは精一杯の大声で叫んだ。その声には、本当に感謝しているんだろうという思いがのしかかっていた。

「大丈夫みたいねタキ」

「ユリカと微笑むユリカ。そんなユリカの言葉に、他の二人も、ユリカと微笑み頷く。

もう、四人には、タキが気負いされているという心配はない。ただ、タキが精一杯頑張るのを見届けるだけ。もう、見ている側の不安もない。当然、会場も同じ。理論で会場を圧倒したのがショウだとすると、タキは気合で会場を圧倒した。

「いいねえ。本当、お前のそういうところ好きだぜ。いつも燃えてくる。よっしゃ！ 審判！ このテンションのまま、おっぱじめよっぜ。俺とタキで、マスター�ート史上、最高のバトルってのを演出してやつからよー！」

その言葉に、また会場は盛り上がる。

そして、そのテンションのままバトルが始まると

そして、このテンションを作ったのはタキ。ショウもまた、タキのその気合に動かされた一人ということだ。

## 第四十九回。バトル開始！！

ショウの……タキの言葉で盛り上がる会場。そして、そのままのテンションで行われるバトル。

タキもショウも、興奮状態でモンスター・ボールに手をやる。そして、タキがトップバッターとして繰り出すポケモンは……

「いつも……いつも先鋒は君に任せてきた。だから、今回も君に任せよ。ロツキー！ 君に決めた！」

タキが場に出したポケモンはロツキー。今思つと、このマスター・ゲート。全ての戦いの先鋒はロツキー。輝かしき特攻隊長である。ちなみにロツキーは、この先鋒キャラに誇りを持っている。

「おお。お前に似て熱そうなゴローンじゃねえか。じゃつ、俺は俺に似たクールなポケモンで攻めつかな。スプーン。軽く曲げてやれ」

ニヤツとした表情で場に出すポケモンは、スプーンと呼ばれる黄色いポケモン。タキは早速ポケモン図鑑を開く。

名はユンゲラー。体長1・3m。体重56・5kg。筋力がほとんどないため、常に超能力を使い移動するポケモン。右手に持つ銀のスプーンと長い髪が特徴的。

「なんだかまあ、そのままなネーミングだねまた

タキがすかさずツッコミをいれる。

「ハハハ。これでも短くしたんだぜ。元々は髪スプーンだったんだ

が、略した

「どうせこしてもそのままじゃなーのー。」

なんだかこいつやつ取りも壊かしに限りである。

そして、そんな懐かしい会話も済み、こよこよバトルが始まる。これは、タキにとつてある意味でのイベント戦。今度こそ……今度こそショウに一泡ふかせてやると意図込む。

「それでは、アローンvsコンガラー。バトル開始ー！」

まず、攻撃を仕掛けるのは例の如くロッキー。スプーンに血煙の拳をぶつけようとジリジリと近づく。

しかし、そんなロッキーの行動に、ショウもスプーンもフツッとした笑いを見せる。

「おーおータキ。スプーン相手に聞合に詰めか？ セリヤお前……悪手だろー！」

ショウがそいつひと、スプーンが何やら念仏のような言葉を呟えだした。

いわゆる詠唱といつかつだらう。そして、呟え終ったと同時に、スプーンの持つスプーンから、怪しげな光がロッキーに向かって飛び出した。

そして、その光は、確実にロッキーを捉える。ダメージ確定だ。

「ロッキーー！」

心配そうな声を上げるタキ。

そして、そんなタキを見て「マジ」とした笑みを浮かべるショウ。

「当たり前の結果だぜ。俺のスプーンとガチンコ喧嘩バトルが出来ると思うなよ。俺のスプーンに間合いは関係ねえ。このフィールド全体が攻撃範囲。分かるだろう？　これがどれだけ恐いかが」

ショウがそう言つと、スプーンがまた何か詠唱を唱え始めた。まだ、ロッキーは、さつきのダメージが回復しておらず、フラフラしている。見事に無防備だ。

「スプーン、サイコキネシスだ。この熱いゴローンを、優雅なフィールド旅行に連れてつてやれ」

指をパチンと一つ鳴らすと、スプーンの持つスプーンがキラリと光る。

するとビリだらう。あれだけ重そうなロッキーがフワリと持ち上がり、ショウの言つようて、フィールドを優雅に舞つているではないか。

「これは……どうこうことーー？」

不思議そうにするタキ。

「これか？　これはマジックだ。種も仕掛けもない本当のマジック。クールだろ？」

どや顔でタキに語るショウ。だが、実際にいよいよやらされているタキに返す言葉はなかった。だが……何かが吹つ切れた。

秘策も何も思いつかなかつた。だが……何かが吹つ切れた。

しばらへじて、地面に引ひきられたロッキー。もう、ダメージは致命的。

このまま何もする」とは出来ないのか……ロッキーは心をギュウッと締め付ける。

「違う。そんなはずはないよー。」

いや、何も出来なことは無い。タキヒロッキーの思いがシンク口する。

逆転できるような秘策が思いつかないにしても、何も出来ないことはない。

ロッキーに出来る」とはある。自分の能力を最大限に發揮してもいざに何が出来ないだ。

「ロッキー……！ 分かってるねー！？」

タキの一言に、ロッキーは田線で合図する。当然、その合図は分かつているの合図。

そして、ロッキーは回り始める。

摩擦を起こし、大地を揺らし、砂埃をあげる。田標は種も仕掛けも無いマジシャンのスプーン。このまおこじようにやられていはずがない。ロッキーは全てをかけて回転する。

「いいじゃないの。タキのポケモンらしい選択だ。だが、俺のスローンの前には無駄な選択だぜ！」

「無駄かどうかはやつてみなきゃ分からないー。そつじやなきや楽しさないじゃないー？」

「さつ！ そりゃ！」もつともー。」

タキとショウの言葉の掛け合い。そして、それと同時に最大限まで回転率を極めたロッキーが、スプーン目掛けて突進する。そして、それを止めようと、今の今まで詠唱を唱えていたスプーンが、ロッキーにサイコキネシスをぶつける。

サイコキネシスをくらつても回転をやめないロッキー。止まらないでも唱え続けるスプーン。

「いいねえ。やるじゃない。でも、いつまで抵抗が続くかねえ」

「続くよ。君のスプーンが諦めるまで続けるから僕のロッキーは…」

「はつ……本当に止まらねえでやんの……いーねえ。ゴローヌ……いや、ロッキーだっけか。意地の音色がビンビン伝わってくるぜ。こいつは馬力飛ばしていくしかねえな！ なあスプーン…！」

全力全快でサイコキネシスを飛ばすスプーン。しかし、止まらない止まらない止まらない！

そして、その回転する熱きロッキーは、遂にスプーンの側まで……

流石のショウの顔にも曇りが現ってきた。

正直、直感でヤバイと感じてはいたのだ。そして、側まで寄られてしまふと、その感じも現実的に……

「気合いを見せやがれスプーン！ ……この会場全てがお前を疑つても！ 僕は見届けてやるぜ。お前の意地をよ」

その言葉と同時に、ロッキーの回転がスプーンに直撃。

これはもう致命傷を超えたといえるダメージ。会場全てが戦闘不能だと判断する。

そして、それは審判も同じ。

「コングラー戦闘不能！」

審判が旗をあげたその時、ショウが血管むき出しで怒りを露にした。

「馬鹿野郎！！　てめえ審判だろ！？　なのになぜ見えねえ聽こえねえ！？　俺にはよく聽こえるぜ。スプーンの意地の音色がな。見せてやれスプーン。サイケ光線」

そうショウが言つた途端、スプーンの持つスプーンから、あの怪しげな光が放たれた。

そしてその光は、確実にロッキーに直撃する。ロッキーもタキも勝利を確信していたのだ。かわせる筈は無い。そして、ロッキーも、ゆっくりと地に倒れた。

「いいゼススプーン。お前の意地はこれでみんなに届いた。誰も気づけなかつたお前の意地は……さあ、ゆっくり眠りなスプーン。誰がどう見てもお前の意地は伝わったから」

少し涙目に、そして笑顔でそつとシヨウ。そして、その言葉の直後、スプーンは氣絶した。

「さあ、どうだよ審判。これでもコングラー戦闘不能かい？」

ショウが冷徹にそつと言葉を発すると、審判は自分を恥じるような

瞳でショウウに視線をやり、弱弱しく旗をあげる。

「両者戦闘不能……」

「そうだよ。これで分かつたろ？ ポケモンには意地がある。それを見破れねえようなやつがポケモンマスターになれるはずがねえ。そうだろタキ？ お前は自分のポケモンの意地しか見えてねえようだが……でもよお、その考えを変えるなよ。俺はポケモン全体を見る。お前はとことん自分に関わりのあるポケモンを見る。それでいいんだよ」

タキはまたもや見破られた。タキは反省していた。どうして、自分はスプーンの意地を見破られなかつたのだろう。正直、完璧に裏をついてくるショウウに憧れていた。でも、それは違う。

タキにはタキのスタイルが、ショウウにはショウウのスタイルがある。そして、そのどちらもに長所短所がある。一度裏をつかれたからといつて、ほいほい自分のスタイルを変えてはいけないのだ。

「さあ、第一ラウンドといひづタキ。まだまだ楽しめそうだ」

「うふ。じつらじただよー 流石ショウウだー！」

タキとショウウ。第一ラウンド……開始！！

## 第五十回。大事な大事な一休目

ロッキー VS スプーン。両者戦闘不能で互いにポケモンを一休とした。

そしてこの一休目。これはとても大事なバトルだ。ここでの流れを制したものがバトルを制すと言つても過言ではない。きっと、その感覚を本能で掴んでいたのだろう。ショウは迷わず、一つのモンスター ボールに手をかける。

「いいねえ。ゾクゾクするぜ全く……やりたいだろ？ やりたいよなあ。ビンビン伝わつてくるぜ俺にはよお。心配すんな。今……開放させてやる。行けキックロー！」

名はカメリックス。体長1.6m。体重85.5kg。甲羅の中から2本の巨大なロケット砲が出る。危機的状態に遭遇すると、甲羅の中に隠れる。ちなみに、その甲羅はとても固く、一度甲羅に隠れたカメリックスを引っ張り出すのは大変。

ショウは迷わずキックローを場に出す。

そして、キックローの思いを直感で感じ取るのだ。そしてその思いは、大体ショウと連結する。そうなつたとき、脳が働く前に、既に口から伝達されている。

「なあタキ。俺もキックローも満場一致でよお。ヒーローを御指名だ。まあ、こちからすればフィーリングばっちりだから、判断は当然、トレーナーであるタキにある。さあ、俺達の思いにどう答える？」

もう、当たり前のように、タキに質問するショウ。  
これに対しタキは、何の迷いも無く言葉を返す。

「当たり前じゃない。だって、ヒーローが戦いたがってる」

そう。ヒーローのモンスター・ボールは、ショウの質問の前から既にタキの手の中についた。もう、タキの答えは質問する前から決まつていたのだ。

そして、この言葉に対し、ショウは、会場がビックリするほどの大笑いをかます。

「やっぱりタキだなお前は、大好きだぜ」

「僕も同じ言葉を返すよ」

なんだか、告白まがいな事になつてゐる現状。  
だがまあ、このままズルズルとラブゲームをやつしていく仕方が無い。

メインはポケモンなのだ。しかも、エース対決なのだ。会場は、早く一一体のバトルが見たくてウズウズしている。

その現状に気づいたのだろうか。ショウが一度仕切りなおす。

「よし。そろそろじやれ合にも頃合いだな。さあ、出せよ。お前の始まり。お前の魂を俺に見せろ」

「うん！ 見せるよ。僕の全てをヒーローと合わせて……魂を剥きだしにするよー 行け、ヒーロー！」

場に出るヒーロー。そして、その眼はその顔は、いつものヒーローよりも更に鋭さを増している。

それもそのはず、ヒーローはまだヒトカゲ時代のあの敗戦を忘れていない。

これは、ヒーローにとってリベンジ戦。タキにとってもヒーローにとっても、魂を剥きだしにする価値のあるバトルなのだ。

そして、静かに熱くバトルは始まる。

## 第五十一回 ハース対決

ヒーローバスキッコ。一一体のライバルは、進化を経て再戦する。両者睨み合い、ジックと相手を見つめる。微塵たりとも田線は離さない。気合でも負けてられないのだ。

そして、その気合はトレーナーであるタキヒショウにも伝わる。もう、我慢しきれない。一人のトレーナーは、スッと人差し指を互いのポケモンに向け、言葉を発する。

「ヒーロー！ 火炎放射！！」

「キック！」

重なる一人の声。

そして、その声は……その命令は……きちんと互いのポケモンに伝わり、同時に技を放つ。

互いに譲らない技のぶつかり合い。いつまで経っても決着のつくことの無いその技のぶつかり合いは相殺。しかし、相性のことも考えると、単純な技の威力はヒーローが勝っているようだ。

「まだ終わりじゃないよ！ 体当たりだヒーロー！」

間合いを詰めるのはヒーローの得意技。相殺した爆風に身を隠し、圧倒的な反射速度で体当たりを繰り出す。

「いやいや甘いね。全く甘い。間合い詰めに自惚れちゃいかんぜ。間合いを詰められたら、その間合い詰めを打ち落としてやればいい。

キッコー。メガトンパンチで応戦だ

ヒーローの繰り出す体当たりを、メガトンパンチで応戦するキッコー。

いくら間合いを詰められても、いくら爆風で身を隠しても、いくら勢いのある攻撃だったとしても、打ち落としてしまえば意味がない。キッコーなら全然余裕で出来る。ショウがそう信じているからこそこの命令。そして、それは見事に当たる。

ヒーローの体当たりの勢いを増しても打ち負けるキッコーのメガトンパンチ。身体的パワーではキッコーが勝る。

どちらも譲らぬ攻防戦。魂と魂のぶつかり合いに、会場は一番の盛り上がりを見せる。

「やつぱぱりショウは凄いや！　見事に打ち返されちゃった！」

「くつ。なんこと言つてん場合でも無かう！」

ショウの冷静な判断から繰り出される命令に興奮するタキ。常に熱く勢いで命令するタキがショウのような冷静な命令に憧れるのは意外である。

「だね。でも、次はギャフンと言わせて見せるー。ヒーロー。翼を羽ばたかせ風起こしー。」

フィールドに風を集め、突風を吹かせるヒーロー。しかし、キッコーは動じない。

「おーおー。俺のキッコーはそんな風じゃ……っておー！　打ち消

セキッ「ーー」

ショウが初めて動じた。なんと、ヒーロは上に向かつて火炎放射を吐いたのだ。

そして、その火炎放射は風によつて散らばり、雨のよつてフイールドに炎が降る。

それは、ヒーロにもダメージがあるよつて思えるが、多少の炎など、ヒーロにはビクともしない。これは意外と効果的な攻撃である……いや、攻撃ではないのかもしれない……

炎の雨を打ち消そつとするキッ「ー。だが、それこそがタキの狙い。

「よし！ キッ「ーに体当たりだヒーロー！」

「なつ……！ これは不味いんじゃないか……」

炎の雨に気を取られるキッ「ーは隙だらけ。これはチャンスだとヒーロにもう一度体当たりを命令するタキ。

今なら距離も近く、隙がある。更に、持ち前の間合い詰めもある。その全てが揃つた今。ヒーロの体当たりがクリーンヒット！ 大きな体をしたキッ「ーが石の様に吹き飛ぶ。

「間合い詰めも役立つときは役立つでしょ？」

ニヤリとした顔でショウに言葉を放つタキ。

「まつたく……タキがこんな効率いい攻撃してくるとは予想外だつたぜ……予想以上の成長だな」

今のタキの攻撃を高く評価し、驚いているが、とても嬉しそうなショウ。

「うん。僕は僕のポケモンと共に成長してるよ。ポケモンが僕を成長させてくれる」

「お前らじこ回答をどうもありがとう。さて、次は俺のターンといつか！」

ショウはそう言つと、キックローに甲羅へ閉じこむこと命令。そして、これは何処かで見た光景である。

「さて、俺は今から甲羅アタックをするぞ。ちゃんととかわせよ」

ショウは次の攻撃を宣言した上で、本当に甲羅アタックを仕掛けてきた。

「あまりなめない方がいいよ！　かわせヒーロー！」

楽々とかわすヒーロー。

それを見て、ショウは満足顔。

「そりやせうだな。なら、これほどする」

甲羅に閉じこもつたキックローが回転を始めた。

そして、その回転の勢いで大きな体のキックローが浮かぶ。そして、そのままの勢いで甲羅アタック。いや、スピンドルアタックでも言つべきであろうつか。浮力により、浮いた甲羅が地面につく瞬間。甲羅は不規則にバウンドする。これを見切るのは難しい。

だが、反射神経に優れたヒーロー。からつじてこれをかわす。

「これをかわすか！　いいねえ。でも、ここには無理だろ？」

ショウの自信も頷ける。

なんと、キッパーの隠れた甲羅の間から水が噴射されているのだ。回転しながら水が噴射。これはもともとのポテンシャルも高くないと出来ない。まさに、唯一無一の恭當である。

「さあ、いくぜ。キッパー！　激流葬！」

これは流石のヒーローもかわすとが出来ない。攻撃がクリーンヒットする。

「よしー。やつきの借りは返したぜタキ。でも、俺の攻撃は止まらねえけどなー！」

また、激流葬の準備を始めるキッパー。

確かに、これに対する攻略法は全く浮かんでこない。だが、タキもヒーローにしか出来ない唯一無一の技があることを理解している。そして、それは今ここで使うべきだとも理解している。

「確かに凄い攻撃だよ。でも、僕は……ヒーローはそれでも負けない。諦めない！　いくよ。キッパーの攻撃を止めてみせるー！」

「はっ！　やつてみなタキ。タキが何をやつとしてるかはまあ分かる。でも、だからってここで引くのはタキに失礼だ。ヒーローに失礼だ。キッパーに失礼だ。そして、俺にも失礼だ」

キッパーの激流葬がヒーローを襲う。この唯一無一な攻撃に、ヒー

口は耐える。水を受けても引かない。甲羅が近づくにつれ、水の勢いも増す。だが、それでも引かない。そして、甲羅がヒーローに触れるその瞬間。力強く甲羅を受け止めた。スピンドルの勢いも耐え殺し、名の通り、受け止めたのだ。

「いいねえ……でも、まだあるんだろ？ 見せてみるよヒーローの全てを！」

興奮状態のショウ。その顔は喜びひとつもゾクッとしており、正にバトルに酔っている。

「うん。見せるよ。奥の奥まで出し切る！ ヒーロー、地球投げ！」

高い高い上空に飛び去るヒーロー。そして、地球を描き、急降下する。もう、見慣れたこの光景だが、初めて見た観客も、もつ、何度も見た観客も、同じようにその美しい光景に目を奪われる。だが、ショウはそんな美しい技を黙つて見つめる。今のショウの心にはキツローしかない。

「キツロー。やつぱりお前は最高だ。いいぜ」

ショウがそう呟くと同時に、ヒーローの地球投げが炸裂した。

会場はフィニッシュの瞬間を見たかのような大盛り上がりを見せる。

だが、ショウは自信満々な顔をしてタキに語りかけるのだ。

「なあタキ。次の手は考えてるか？ 僕は考えてる」

ショウの質問に驚いたタキが言葉を返そうと口を開いたその時だ。

「えつ……そんな！」

タキがショウの質問以上に驚く光景を目にした。なんと、地球投げを受けたはずのキッコーが立ち、仕掛けたはずのヒーローが沈んでいるのだ。

「さうか。出し切ったんだなヒーロー。いいぜ。お前の意地も俺にガツンと伝わった」

「ヒーロー……」

そう。ヒーローは全てを出し切ったのだ。そして、技を放った時点で力尽きた。

だが、そのヒーローの全てをキッコーが上回った。それが全てである。

そして、この結果を受けて、ジッヒーローを見つめているタキ。これにショウが話しかける。

「なんだタキ。ヒーローが心配か？」

しかし、タキは、心地良さそうな顔で首を横に振る。そして、ヒーローを見つめながら返事を返す。

「見てよヒーローの顔。とってもいい顔してる。こんな満足した顔のヒーローは初めて見たよ。楽しかったんだね。ヒーローは凄く楽しかったんだ。きっと、キッコーにありがとう。次は倒すからなって言つ

てるんだ。トレーナーとしてこれ程嬉しいことはないよね

「これにはショウの顔も緩み、まだバトル自体は終わっていないといつのに、ガバッと肩を組む。

「やつぱりお前はタキだ。そして、俺のライバルだ。任せとけ。また次を作つてやる。次はあれだ。ポケモンマスター決定戦で決着だ。最高の舞台で最高のバトル。いいねえ。完璧だ」

既に今後を見つめているショウ。

それに対しタキは、元気良く首を縦に振った。

「リザードン戦闘不能！」

ヒーロとキックローのヒース対決。次はきっと、ポケモンマスター決定戦で……

## 第五十一回 ハース対決（後書き）

最近、ヒーローの戦い方が同じになつているよつた気がする。マンネリにならなければいいのだが（汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0006e/>

---

ポケットモンスター +

2010年10月11日16時00分発行